
憑依モノ・恋姫編

やきいか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依モノ・恋姫編

【Nコード】

N0030M

【作者名】

やきいか

【あらすじ】

核の炎に包まれた主人公とある人物に憑依混在してしまい状況打破の為に大声出して次元に穴を開けて脱出を図る。しかしその穴の先にあったのは？

よくある憑依モノのはず。

憑依先は月を見ると大猿になる無敵のお父さん。主人公無敵系。

「目が覚めて」(前書き)

憑依先がアレなので最初から強いです。

あとこの話には大した内容はないので読まなくても構いません

「目が覚めて」

おーけー、とにかく状況確認が最優先だ

先程世界が核の炎に包まれてヒヤッハーになったところで、俺は死んだはずだ

『あ、これ死んだな』

と認識した瞬間、……………まあ今に至る訳だ

情報が足りん！とシャウトしそうになったがそうはならなかった。よくよく今の自身の身体や周囲を確認してみると妙な感じがしたからだ

まず目線が高い

俺は平均的な日本人の身長より少し低いかなー？くらいしかなかったはずだ

それなのに今の俺は、目測ではあるが足下からの高さを考えると170は優に超えて、75に届こうか！？というところまで伸びているのだ

10センチってでかいんだぞ！
伸び幅的な意味で！

そしてやたらと筋肉質な肉体

青い道着に黄色いズボン

先程からチラチラと視界に入る《茶色い尻尾》……………

頭の中のビンゴカードに穴が空いていく感じがする

そうだ……

この身体はドラゴンボールの『孫悟空』のものだ……

答えを得た俺は右拳を握りしめ静かに涙を流した

「いるのかどうかは知らんが……ありがとう神様……そして地獄に堕ちろコノヤロー」

ひとしきり恨みつらみに罵詈雑言を並べた後は状況確認の再開、と

青い道着と目線の高さからしてこの悟空の身体は『ドラゴンボールGT』終了後のものらしい

なぜ終了後かという結論に至ったのかというと、今現在俺が居る場所が関係している

足下から俺の前後に、果てしなく長い道がある

無理をすればなんとか2人立てるかな？くらいの幅の道

その道の端には三角形……………いや、あえて形容するなら『鱗』が道なりに延々と生えている

……………もう分かるだろう

ここは『あの世』なのだ

ツンツンした前髪の間から輪っかが見えたから間違いないだろう

作中でこの格好のままあの世にきた描写は無かったような気がする

あるとすれば最終回でシェンロンと共に消える辺りか？

でもあれは子供の姿だったからなあ

こんなことならDVD・BOXを見直すべきだったなちくしょう

まあ何はともあれ、『俺が孫悟空の身体に憑依してあの世にいる』
という事実が大事なのであつて過程について考えたところで益体の
ない話

すでに精神が肉体に引つ張られているのか楽観的になってきている。
そのお陰で『どうしてこうなったあああああ』という事態にもなら
ないのでラッキーだったと思うしがあるまい。

とりあえずこれからどうするかの方針を決めなきゃな

そういえば能力の把握がまだだったなと思い立ち、

早速調べようとした矢先

「……………どうすりゃいいんだ？」

身体はハイスペックでも中身は現代日本人なわけで……
しかも、生前何かをやっていた訳でもなく、運動なんぞ高校卒業してからは朝のランニングとストレッチぐらいだ。『気』についてなぞ漫画とアニメくらいの知識しかないし、それがいきなり役にたつとは思えん

やばいぞこれは

なんてことを考えていたら頭に何かが流れ込んできた

「これは……悟空の記憶か……？」

無印からGTに至るまでの悟空視点の記憶だった

さらに

「む！これは……！」

おお、悟空の『情報』と『経験』ではないか！
キター！これで勝つる……！！」

ご都合主義美味しいです

結局、孫悟空の『記憶』『情報』『経験』が手に入った

記憶についてはスルー

なんだかんだでハッピーエンドだったしね
もちろん夜の営みも……ゲフンゲフン

おらなにもみてねえだ

『情報』は、まあ要は何が出来るかについてだ

変身、瞬間移動、体術、気を使った技の数々、運転、釣り……etc

これらを使用・活用しようとした時に『経験』が勝手に頭と身体に染み込んできて、そしてそのまま実行することが可能らしい

以上3つの事柄が浮かんできたのは、能力云々を調べる行為が修行

に繋がったからだとか

さすがに思考回路までは染まらんが、それ以外は完璧に『孫悟空』
になってしまったのだった

しかし死人に憑依って……そこんどこだよ？

さて公式チートメンな悟空君に成ってしまった訳だが……

正直困った

なにかアクションを起こそうにも、既に死人なのでどうしようもないし……

うーむ……

……

あ、そうだ

「ブウみたいに次元に穴開けりゃあいいんじゃないかねえか？」

あれ？結構いいんじゃない？

後で界王神とかに説教くらいそうだけど

穴開けて異世界あたりにつながれば御の字

下界ならのんびり暮らす

天国あたりにつながったらそれはそれでいいかな？

天国なら悟飯やチチ達も居ることだろう

そうと決まれば後は

叫ぶだけ！

「穴開けて」(前書き)

展開遅くてごめんなさい

「穴開けて」

孫悟空に憑依してしまった俺はあの世から脱するべく次元に穴を開けようとするのだった！

む？なんか変な電波が……ま、いつか

さてはて、穴を開けるには膨大なエネルギーが必要だ

ただZ時代の悪ブウの怒りの咆哮で現世とアノ部屋との空間に穴が開くくらいだ

その後にはフュージョン化した超3ゴテンクスも穴開けに成功していた

ならば超4の状態でやったらどうなるか？

答えは簡単

『分からない』、だ

だって仕方なくね？

神様に力貰った訳じゃないし……

他のオリ主みたいに座標がどうのなんてできないんだよ！

『氣』で探索と言ったってまず誰の氣を探ればいいのかわからんし、探ったところで会ったことのある氣じゃなきゃそもそもわかんないし！

ああー！もー！

長々と考えるのは好きなんだが、いかんせん悟空の身体がそれに対応しておらず先程から拒否反応が出まくっている！

考えるのやめやめ！

もうやっちまおう！

ということだ

「……………はあああああああ」

見よう見まねで腰に手を持ってきて構える

すると頭に超4になるための情報と経験が浮かんでくる

まずは超1

「……………あああああああああああああ！！！！！！！！！！」

シュボ！

金色の気が全身から溢れ出し力を開放していく

「……………まずは第一段階……………」

アニメ版の最期辺りだと悟空はノーマルからいきなり超4になっていたような気がするが……………まだいいよね？俺初めてだしゆっくりでいいよね？

そうこうしている内に

「でやあああああああ！！！！！！」

金色の身体にバチバチッと電流がほとばしるようになった、つまり

「……………超2」

案外あっさりきましたねw

ブウ編では軽く流されてたような気がするけど超2状態って悟飯が完全体セルを倒した記念すべき型なんだよね

それを皆さんったら、やれ魔人ベジータだの超3だのフュージョンだの…もうマジインフレw

それもこれも悟空が帰って来てからだよな

つまりはこの身体の持ち主のせい

このインフレの素め！
もと

閑話休題

さて残るは3と4なのだが、やはり先の2つとは違いそこそこ気合を入れなければ難しいらしい

と言ってもちよつと気のコントロールに気をつけて一気にブワッと開放するだけだとか

説明が曖昧？

仕方ないじゃん。悟空なんだもん

どうせ超2のときみたいに気合いと掛け声があればあとはこのチー
トボデイがなんとかしてくれるのだ

ちやつちやと終わらせよう

「ふんッ……………どうおおおおお！！！！あああああ！！！！！！！！」

大気（あるのかな？）が震える感覚、そして

「長金髪眉なしヤ　ザの出来上がり」

はッ！？

いかんいかん、思考が若干悟空に吞まれそうになった……

「マジパねえ……。いや、マジ、パねえ」

先輩！服装に関係なく上半身裸で毛むくじやらとかマジパねえッス！
尻尾も赤いッス！

なにこの恥ずかしいカッコ
俺ちゃんと道着着てたよね？

質量保存の法則まるっと無視しやがって……

二次元なら仕方ないか？仕方ないな！

ハッハッハッハッハッ

無事超4まで変身することができた

いまだこのやたらとデカいエネルギーの渦巻く身体に戸惑ってしまう慣れの経験、というのは身体を通して精神にまで影響してくれているみたいで今のところ問題はない

先の戸惑いとは現代日本人だったなごりのようなものだ

憑依してまだ半日も経っていないのにこのざまなのだ

サイヤ人の生存本能には呆れを通り越して尊敬に値する

こうして乗っ取っているんだか乗っ取られているんだかわからん状況に陥っている今ならMGSのオセロットの気持ちがわかるぜ！

「……行くか」

くだらんことに^{じかん}字数を取られ過ぎた

スタートラインにたたなきやな

「すうー…はあー…」

ゆっくり深呼吸する

理論も確証もない

見たこと聞いたことがあるからやってみよう、という実験レベルの話だ

しかし、そんな『しりあすもどき』とは裏腹に、失敗したらしたでその時だ！という悟空ロジックと

『こいつならやってくれる』

という確信めいた言葉が浮かんでくる

過去悟空は、1人で、あるいは仲間と、あるいは息子と、あるいは敵と、数々の奇跡をその身1つで起こしてきた

なればこそ

この苦難と呼べないような事件も、一笑の内に解決してくれるので

はないか？

今は確かに『俺』が孫悟空だ

だが、『孫悟空』もまた居るのだ

いわゆる、心の中で生き続ける！、だ

もっとも俺は魂が融合とかのレベルでの話だが……

つまり、不安に勝る安心感が全身を満たしてくれているのだ

コンディションとしては最高

後は、叫ぶだけ

「すうー……………ッッッ！」

極上の気を魂にのせて

「

ツツツ！！！！！」

ゴオオオオオオ！

俺は叫ぶ

「……………っはぁ……………っはぁ……………っはぁ」

さすがに息が切れたわ…

喉いてー

なんていうか某バーーカーみたいになっちゃったなw

召喚されるクラスとしてはぴったりかな？

まあそれはそれとして

バチチチッ

「やった、な」

ぶっつけ本番でどうなることかと思ったが無事成功したみたいだ

俺の前に直径2メートルはある『穴』が開いており、『穴』の向こうには青空が広がっているのが見えた

「とりあえず繋がったか。青空ってことは下界だよな…。ま、わけわかんないところに繋がるよりいいか！」

スキル樂觀発動！

ポジティブになるのはいいかもしれないな

「んじゃ、行くとすつか！」

口調まで似てきたな

もういつそのこと孫悟空になりきったるか？

なりきったろ！

「よいしょ、っと。あ！そうだそうだ！」

穴に足を入れかけたところでやらなければならないことがあるのに
気がついた

「ん、と……お！いたいた！」

界王さま御用達の思念話だと思って下さい

『おーい！界王さまあー！』

『おい！悟空！さっきの気は一体なんじゃ！お陰で新しく買った車
がバラバラだ！』

『ははは！わりいわりい。ちいとやりたいこと思いついちゃまってよ
！』

『なにい？やりたいことじゃと？』

『ああ。下界にものすげー強えやつが生まれたらしくてさ、オラち
つと下界まで行って確かめてくる！』

『な、なんじゃとー！？下界に降りるー！？！？悟空、お前はもう
生き返ることわーんじゃあ、行ってくる！』できな……なにー！ち
よっと待て！待たんか悟空うー！』

ブチっとな

短い出番だったけど忘れないよ界王さま

その触角も寒いダジャレも

「そぉーい！」

お別れを告げてすぐ、穴の中に飛び込んだのだった

時間とともに穴が閉じてくの忘れてたぜ…

穴が半分くらいになってたときは焦った

「あらよつと」

出口が空だというのはわかっていたので穴を抜けてすぐさま舞空術で浮かんだ

空は蒼天

視界は良好

パオズ山に似た山脈も確認

地上は荒野

荒野があるのは漫画アニメで知っているので問題ない

「さーてここはどの辺りなんだ？……あれ？知ってる気がねえ？」

忘れてたけどGT終了後なので原作メンバーは殆ど死んでいる

残っているのは既に年老いたパンとチビ孫悟空にチビベジータぐらいだったはず

その内の誰もが身内又は戦友の身内なので自然と似た気になるはずだ
パンにいたっては自身の孫にして直接稽古をつけ、更にトランクスを交えて旅を共にした間柄だ

まず間違えるはずがない

だが

「……………やっぱりだ。人はあっちこっちに居っけど知ってる気がねえ。」

……………ッ！カリンさま…ヤジロベー…それにデンデたちの気も感じられねえ。

ホントにどこだここ？」

穴を開ける直前に『異世界につながるかも』とは考えていたが、可能性としては低いと思っていた

天国や地獄、ナメック星、界王星、界王神界など、異世界っぽい場所が引く手数多かったからだ

いずれの世界に飛ばされたとしても、天国以外はすべて観光？済みであり、天国だったとしても悟空の探気能力は半端ではないので問題は無い

しかし今の現状から考えると

「本当に異世界、ってやつか……」

だがしかし

今の俺は孫悟空であるということを忘れてはいけない

楽観に定評のある孫悟空なのだ

そしてそんな悟空に魂ごと憑依融合したのだ！

つまり何が言いたいのかというと

「……オラ……、

ワクワクしてきたぞ!!!!!!」

こういうことである

しかし、どんな世界かわからない以上人が空を飛ぶなんて普通はあり得ないので地上に降りることにする

……不思議の塊な俺が言うセリフじゃないな

「ま、いつか」

自己完結もなんのその

現代人と不思議野菜人との葛藤なぞコンマ5秒で不思議に軍配が上
がった

この世界はどんな世界なのか、うまい飯は腹一杯食べれるのか、
そして、強い奴はいるのか

新たな世界に期待を膨らませ、そんなことをつらつら考えつつ高度を下げていると、

「待てい！」

「ん？」

女性の怒声がすぐ下から聞こえた

何事か、と思い下を見てみれば

黄色い布を巻いたチビ、ヒゲ、デブの3人が1人の男性を武器を持つて囲み、そしてその3人に向けて睨みを放ち悠然と佇む女性がいた

「おいおい……こいつぁ……」

恋姫かぁ！
」

この世界の正体がわかった瞬間だった

「見つけて逃がして猛一回」(前書き)

これ番外編の間違いじゃない？

無駄に長いし

書きたいことが上手くまとまらないし

1日1話とか更新してる人ホントに尊敬するわ

「見つけて逃がして猛一回」

一刀side

昼間に悪友と見学に行った資料館で変な奴を見かけてからどうしても気になって木刀を握り聖フランチェスカの寮から飛び出してきたところ、昼間の奴が資料館に置いてあった鏡のようなものを持って走って来ているのが見えた

妙な正義感が湧いてきた俺はそいつを止めようと声をかけ、戦闘になった

戦闘中に鏡が地面に落ちて、割れ、光に包まれて意識を失った

目が覚めると一面荒野で

「へへへ……」

「おう、いら」

「ぶふう……」

変な3人組にからまれて……いや、襲われている

彼らの手には本物の剣が握られていて、ビビる要素としては十分だった

（クソッ……）

内心焦りながらも状況を打破しようと、動きが鈍そうなデブに切りかかる、が

ドス！

「……グッ」

他の2人の内のどちらかに殴られたようだ
体勢を崩してしまい地面に転がる

「あゝあ、大人しくしていれば身包み剥ぐだけだったんだがな」

「おい！服には傷つけんじゃねえぞ。高く売りつけるんだからな！」

「わかってやすよ、兄貴」

チビとヒゲの会話が耳に入る

死ぬという現実が刻一刻と迫る事態に体が震えて上手く力が入らない……

なんとか3人の方に振り向くがまだ地面に尻をつけたままだ

ヒゲのやつが剣を振り上げる

「じゃあな兄ちゃん、怨まないでくれよ？兄ちゃんが弱いのがいけないんだからな！はっはっは」

ちくしょう……

俺はこんな訳のわからないところで死んじまうのか……？

ヒゲが笑いながら剣を下ろそうとした、その時

「待てい！」

天使の声が聞こえた

一刀 side end

主人公 side

「待てい！」

女性が声を張り上げてから何かをイエロースリーに向かって話し始めたので、それをBGMにしながら少し思考する

下界に出られればいい、とは思っていたがまさか異世界…それもエロゲの世界にきちまったとはな

展開を見るに、恐らく無印だろうな。

真は買ってなかったからな……

もしかしたら真の可能性も無きにしもあらずだが、真下の5人以外の気は比較的遠くに感じる　それなりにデカい気が1つこちらに向かって来ているが　ので十中八九で無印だ

「
だろう。我が青竜刀の一撃を受けてみよ！」

んおっ！

いつの間にかOHANASHIが終わってたらしいな

というかこのままだと俺の出番なくなね？

ヤバッ！早く介入せねば…「はあああああああ！！！」

ちょw

ドガッ！ボゲッ！

「ぐええ…」「おおお…」

ヒゲとチビが女性の鋭い一撃によって沈められた……

「お怪我はありませんでしたか？」

「」

「あの、どうされましたか

」

えー？

あちゃー、原作イベント終わっちまった？

今声かけるのはKYだよねー

完っ全にタイミング逃したorz

そうこうしている内にさっきから近づいていたデカイ気が女性に…
…もう関羽でいいよね？

関羽と一刀君に接触

そして走り出した

しばらくして残りの2人もソレ 張飛について行ってしまった……

「あゝあ、行っちゃった」

思わず呟いてしまう……

「しょうがねーな……。次のイベントは、確かどつかの街に行つて賊討伐のために義勇兵を募るんだっただけか。討伐途中に乱入すつかあ？

アヤカシい！とか言われて攻撃されないといいなあ。

うし、さっそく行くとすつか！」

あの3人の気は既に覚えた

方角は分らんが俺から見て左の方に沢山の気が集まっているのを感じたから、その方向だろうな。集まつてる気の中に3人の気も確認できた

「気を取り直して……」

ドンッ！

全身に軽く気を纏い

「介入だあああ！」

バシユウウウウウウウウ

……………

軽めに飛んでいく！

いや……、本気で飛んだら地球5周くらいしちゃうからね？

一刀side

「しかし、管輅の占いも半分が外れてしまうとは……」

隣を歩く愛紗がポツリと呟いた

「占いつて、さっき言ってた俺以外の天の御遣いの？」

「はい、

『天より一筋の流星が落ちる時

混乱する乱世を収めんと2人の天の御遣いが舞い降りる

1人は光輝く衣を纏い天の知識とその大徳と慈愛を持って乱世を鎮めんとす

もう1人は金色の魂をその身に宿し絶対なる力と大陸のごとく広き友愛の心を持って乱世に惑う人々を救わんとす

両雄共に清き心を持ちこの世を過ちから救いたまわんとするだろう』

光輝く衣……これは間違いなく御主人様でありましょう。

しかし……」

「もう1人の方が？」

「……はい」

「……。ごめんね、戦えなくて……。やっぱり愛紗も一緒に戦える人の方がいい？」

「ッ！？いえっ！そういうつもりで言ったではありません！乱世を収めるには腕っぷしが強くともそれに傲らず、正しい心を持って奮う人物でなければなりません！」

「俺の場合奮う力がないんだけど……」

「ですからっ！！御主人様には力が無くとも、その天の知識を持って乱世に惑う人々をお救いになって欲しいのです！」

戦とは力だけで…ましてや個人の武のみで行えるものではありません。

御主人様には私達とは違う方向で支えていただかなければならないのです」

「ですから……そのように自らを卑下するような台詞は今後一切慎んでいただきたいのです」

すごいな……

流石に未来で英雄と讃えられるだけある

それはともかく、愛紗のフォーローに感謝しよう

「……………うん、わかったよ……。ありがとう、愛紗」（ニコッ

「ツノノノノノノノい、いえ！御主人様が迷ったり困ったりしたときに支えるのが家臣としての役割ですから！」

「それでもだよ。ありがとう」

「……………はい。ではありがたく頂戴しておきましょう」

愛紗がフツと柔らかな微笑を浮かべた

ヤバイ可愛い…

「?どうなさったのですか?」

「い、いやなんでもな…」

ズドドドドドド!!

ドゴオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「「な、なんだ!?!」」

雷が落ちたかと勘違いしてしまう程の轟音と振動に、思わず愛紗と声がかぶってしまう

「おねえーちゃん!」

ドドドドドド!

土煙を上げ張飛

鈴々が前衛部隊からこちらへと走ってきた

「鈴々ッ! いったいなにがあつた!?!」

「まさか敵の罠だったとかか!?!」

「ううん、違うのだ！」

「はあ？では一体何なのだ？」

「うーんとねー、ピカーっとしてブワァーてしたらドッカァンてなつてとにかくすごかったのだ！」

「ええい！お前の話はいまいち要領がつかめん！

こうなれば……御主人様！」

「ひゃい！」

い、いきなり呼ばれたからびっくりした…
というか嫌な予感しかない

「鈴々の話が上手く伝わらない以上、今から直接見に行きましょう
！」

グイッ

「え」

「はいやあああああああ！」

ヒヒイーン！

この時代に爆薬なんてものはない。だとしたら人間の仕業になるのだが…

「ヒイイ……」

「愛紗！あいつ、まだ生きてるみたいだ！」

「あの賊からここで何があったのか聞いてみましょう」

クレーターからやや外れた場所、比較的俺たちに近い場所に賊の1人が倒れていたのを見つけた

「おい、貴様！」

「ヒイツ！ひいひいひいひい……」

賊は酷く怯えた様子だった。しばらく愛紗が問い詰めていたがあまり効果はないようだ

しかし賊が顔を上げたとき、賊の動きが止まり元々真っ青だった顔色が土気色にまで染まり、ポツリと呟いた

「き、金色の化け物………うあ………うわあああああああああ
あ！」

ザシュッ

「「な!?!」」

突如叫んだかと思ったら愛紗の持っていた青竜刀を自らの喉に突き刺してしまった

目の前で人が死ぬのを見て吐きそうになる……

「御主人様!?!」

「大丈夫、大丈夫だから……………ッ!?!」

愛紗の顔を見ようとして驚きで視線が固まる

「なにかありまし……………ッ!?!」

俺の視線を追うように後ろを振り向いた愛紗も絶句した

俺たちの視線の先には

金髪を逆立て、同じく金色の何かが体全体を包む炎のように立ち上り、腕を組み、翡翠の瞳でこちらを見つめ僅かに微笑む人物が浮いていた……

そして、俺はそれに似ている人物を知っている。幼い頃、何度も何度も見直して真似をした。あの青い道着にも見覚えがある……

「孫……悟空……？」

一刀 side end

関羽 side

私と鈴々は戦と圧政に苦しむ民たちを見かね、世を変えんと旗を上げ人々を救う旅に出た

旅を続けていれば当然賊とも遭遇する。旅を始めて半年も経たない内に両の手で足りないほど遭遇してしまうのは、ひとえに腐敗の表れと言えるだろう

その事実を憤りを重ねながら、旅の休憩にと立ち寄った茶店である

噂を耳にした

『天の御遣い』

この噂を聞いたとき、私は居てもたつてもいられず勘定を店主に投げつけて店を飛び出していた

店主の顔の形が歪んだように見えたが気にしている場合ではない

旅を始めて間もないが、世の腐敗には嫌と言うほど触れてきた。苦しみ、嘆き、叫び、怒り、泣き、そしてあっけなく死んでいった民たちをこの目で見てきた。

私は、疲れていたのかもしれない

何かにすがりたかったのかもしれない

無くなることのないこの世の悪循環に触れ続けて、だんだんと摩耗していく私の心を守るために私は、『天の御遣い』に逃げ、救いを求めた

それからしばらくして一筋の流星が流れ落ちるのを見た私は感激で声を張り上げそうになった

義妹である鈴々の手前、声を上げることにはなかったが気付いた時には流星の落ちた場所まで走り出していた

鈴々に何か指示を出していたような気がするが、全く覚えていなか

った

早く『天の御遣い』様に会いたい

会って私を褒めてもらいたい

よく頑張ったね、と

もう大丈夫だから、と

私を包み込んで守って

救って欲しい！

だが、やはり現実は厳しいものだった

私が流星の落ちたと思われる場所についたところには、3人の賊に
囲まれ地面にへたり込んでいる『天の御遣い』と思しき青年がいた
のだ

いや、ただけだった

私が追い求めていた『天の御遣い』とはまったく違っていた

しかし、誰かの温もりと人の優しさに飢えていた私は迷うことなく

青年を助けていた

彼といくつか言葉を交わしてみてもと噂の一部が頭をよぎった

『大徳と慈愛』

かの噂にあった御遣い様は2人だった

だが目の前には彼しかおらず、その彼もお世話にも戦えるようには見えなかった

しかし御遣い様にも役割があるとすれば？

知と武

彼は『知』だ

知は時として武を圧倒してみせる。優れていれば優れているほど小の力でなにことも成し遂げてしまう。

直感とも言えぬ感覚が駆け巡り、私に行動を促した

共に乱世を収めましょう、と

私の言葉を聞いた彼は渋りながらも私たちと来ると明言して下さった

それから彼……いや、御主人様と途中で合流した鈴々と共に賊に襲

われたという町に向かっていた

ついた先は酷い有り様だったが、落ち込む民たちを見てなんと御主人様が激励を始めたのだ

『たいしたことはできないかもしれない。それでも大切なものを守るんだ！』

御主人様の言葉に町民たちの目に光が戻ってくる

私達も今まで訪れた町や村でも鼓舞はしてきた

しかし、どれもが徒労だった

私達がどんなに努力しても成し得なかったことを御主人様はいとも簡単にやってみせた

ああ……、御主人様は正しく天の御遣いなのだ

私はしばらく御主人様に羨望の眼差しを送ることしかできなかった

賊討伐のために義勇兵を募ったところ御主人様の鼓舞のお陰なのか、予想していたより義勇兵の数が揃った

そしていざ討伐、としたところで天が落ちたのかと思うような轟音が響いた

先に兵を率いていた鈴々に問うも、擬音ばかりで話にならない

仕方がなく御主人様と一緒に現地へと向かう

しかしそこで見たのは私の想像を遥かに超えたものだった

「いったいなにが……」

こつ漏らしてしまうのも仕方ないだろう

私達の目の前には、村1つ丸々飲み込んで余りある程の穴が開いているのだから

「これ……人間にできるのか？」

御主人様の呟きが聞こえたが、こんなことができる人間がいるとは思えない

いや、人間であってはいけない

それは……きつと……形容し難い……

「愛紗！あいつまだ生きてるみたいだ！」

御主人様の声で思考の海から引き上げられる

視線を動かせば疲弊した様子の賊の1人が俯いて座っているのが目に入る

とにかく情報を集めようと詰め寄るも脅えた姿勢を崩さない。どう

したものかと悩んでいるといきなり奇声を発して自害してしまった
まったく状況が見えないが、賊の発した最後の言葉が頭の隅にこび
りついていた

『金色の化け物』

妖の類なのだろうか……それとも道士か……？

思考に埋没していると突如御主人様が膝をついてしまわれた

大丈夫だ、の一言とともに立ち上がろうと顔を上げた御主人様の動
きが止まった

視線はこちらに向いているが見ているのは私の後ろのようだ

後ろになにかあったのかと意識を向けると同時にとてつもない存在
感を感じて振り向いてしまった

敵意こそ感じなかったが今の今まで気配を感じなかったのだ

敵ではないという保証はない

なにがあっても御主人様だけは……

決意を固め、視線を上げてみれば

『金色の化け物』と呼ばれたものがいた

残念ながら化け物ではなく人だったのだが、って違う！

そうではないのだ！

全身を金色の膜のようなもので包み込んだあの人物を見た瞬間

御主人様を御主人様として認めるに足る何かが全身を巡ったときと
同じ感じがしたのだ！

私には彼の人物が『化け物』には見えなかった

静かな強かさを湛えた瞳
隙のない姿態

全身から感じる安心感

下らないかもしれないがまた直感というやつだろう

『武』の御遣い様

外れていたとばかり思っていた占い

しかし、目の前と私の隣に占いが居る

この方たちがいれば……

なればこそ、今出会えたことは僥倖と言える

以前夢見た理想

民を救う！

私は、膝を着いて迎えることにした

関羽
s i d e
e n d

主人公
s i d e

案の定、3人どころか町すら超えて賊達の真上に来てしまった

「あれ？ずいぶんいんだなあ……」

ゲーム内では5千前後だったような気がするんだけど……

「どう見ても1万以上いるなあ。これだと乱入する前に負けちゃうんじゃないか？」

ちよつと不安になってきたなあ……

そうだ！

先に全員倒しちまってから合流しよう！

こちらの強さがわかれば勧誘なりしてくるはずだ

そのためには……

「このままでも指先1つで全員ヒデブツできるけどなあ。ちょーつと地味だよなあ」

それに、前世で読んだSSやFFでは俺のような立場の主人公は大体が占いに組み込まれていたはずだ

もし俺も同じ様な状況になっているとすれば、悟飯のように金色の戦士みたいな名前で登場しているはずだ

アピールとそうなったときのことも考えて超1で行うとしよう！

「はあああああああ！！！！！！！！」

ドシューウ！

はい完了

よし、殲滅にはいるう

とは言っても真面目にやったら指先1つでヒデブどころか地球崩壊184年とかになってもおかしくないので、力は最小限に抑えるよ

「普通に気弾打ってもインパクト無いしなあ」

DB基準

「そうだ！ネタに走ろう」

[illegible]

シュバババババババババババババババババババババ
ババツ！

今現在亜音速ぐらいのスピードでラッシュしてます

ラッシュに合わせて気弾（極弱）を拳の先から放っているの、さながら『光の豪雨』といったところですかな！

.....!

一応最低出力にはしてあるが、いかんせん地力が強すぎるので当た

一瞬だけ光が広がり、轟音を上げながら賊達を飲み込んでいった

そしてその後には

「……………」。

めちゃんこデカいクレーターが出来上がっていた

微シリアス、略して微リアスから一転

「あ、あら〜?」

うふふwやりすぎた

「ま、まあ結果オーライだよな!うむ!」

まだムカムカした感じは残っているが、あくまで楽観的な姿勢を崩さないのが悟空なので余り後悔はしていない。もちろん反省もしていない

「な、なんだこれは……!?!」

「いつたいなにが……」

おっ！一刀君と関羽ではあーりませんか

派手にやったからな

先行して様子見に来たのかな？

あ、生き残りいたんだ

あの攻撃からよく逃れたな、本当にギリギリじゃん

ん？生き残りがこちらを見ている？

目が合ったのでラブドッキュン してみた

「き、金色の化け物………うあ………うわあああああああああ
あ！」

ザシュッ！

ちょ、ひでえ

ちょっと茶目っ気出ただけじゃないか！

………あんな殲滅した後に茶目っ気も何もないかもしれないけど………

一刀君には辛かったか？吐きそうになつとるがな

お、こつち向いた

これ接触チャンスじゃね？

そうとくれば早速降りてお話じゃ！

余裕を持つてゆっくり降りていくと関羽もこちらを向いた

そして目が合った

可愛い……けど三大欲のうち性欲が戦闘欲のこの身体だと可愛いと
感じる程度だな

「孫……悟空……？」

うん？

一刀君DB知ってるの？

あれ？

「変わって帰ってご飯の誤算」(前書き)

無理矢理進めた。

これからはこんな感じになるかも

あと今更ですが自己解釈、独自設定、キャラ崩壊などあります

前回の関羽なんか酷いですね

なるべくキャラの性格は合わせますがそれでも差違は出てしまうと思うのでご容赦下さいな

「変わって帰ってご飯の誤算」

主人公 side

一刀君は家柄の関係上漫画やアニメに触れる機会が少ない、もしくはあまり無いと思っていた

本人も歴史の資料や兵法書などを読み漁っていたと言っていたものもある

だが……

「ほ、本当に孫悟空？本物？うわーすげーすげー！！」

「ちょ、御主人様！？」

めっちゃキャラ崩壊しとるし

ま、まあとりあえず自己紹介からかな？

「お？おめえオラのこと知ってんのか！そうだ、オラ孫悟空だ」

「あ、あの！俺北郷一刀って言います！あの！その、えっと俺小さい頃からずっと憧れてて……」

一刀君絶賛暴走中

「孫……ですか？もしや南方の孫家の人間か？いや、しかし人が宙に浮くなど……」

関羽もなんかぶつぶつ言ってるし

「……………それで、あの、お願いがあるんです！」

おおっ 一刀君復活！

「お願い？どんなんだ？」

「俺、訳わからない内にこっちの世界にきて凄い不安だったんです……でも愛紗……じゃなくて関羽に助けてもらってなんとかなるかと思ってたんですけどやっぱりすぐには帰れなくて……だからしばらくこの世界で生きていこうと思ったんですけど、なんか俺天の御遣いとかいうのらしくって、えっと……」

テンパっとるなあ

そうだ、あれやろう

「ちょいストップ」

「あ、はい。なんですか？」

「ほんの少しじつとしててくれっか？」

「？わかりました……」

そう言い終わると同時に俺は自分の手を一刀君の頭にのせる

「む……………」

よしや、大体の事情はわかった。つまり乱世つちゅうのを収めるために天の御遣いとして一緒に戦って欲しい、ってことだな」

「ええっ！？いや、まあそうなんですけど、今どうやって……………あ。クリリンにやったやつか……………」

ほほう、さすが一刀君。聡明でいらっしやる

「おめえのことも今ので大体わかったし。この世界？ちゅうのもなんとなくだけど把握できた。とりあえず元の世界に戻るまでの間だけだよ、よろしく頼む」

ホントは原作知識があるので特に問題はないのだが、一刀君には俺

が憑依者であることを知らせるつもりはない

さっきの喜び方とか頭を覗いた時の幼き日の一刀君の姿を見た俺としては夢を壊すようなことはできないのだよ！

ヒーローが衣装を脱いだらハゲチャビンのおっさんだったらショックだろ？

ということ、たまに地はでるしネタにも走るけど基本的に孫悟空として過ごすことにした

「あ、ありがとうございます！」

「まあそれはいいんだけどよ、そっちの女の子紹介してくんねえかな？まだ名前聞いてねえからなんて呼べばいいのかわからなくてよ」

「あ、まだ自己紹介してませんでしたか？」

「するもなにも本人がまだ戻ってきてねえからな」

「そうでしたか……、愛紗！愛紗ってば！」

「……え？は、はい！なんでしょう御主人様」

「なんでしょうじゃなくてさ、ほら自己紹介して」

「あ……ああ、申し訳ありません。私は姓は関、名は羽、字を雲長と申します」

「オラ孫悟空だ、よろしくな!」

「はい、よろしく願います。ところで幾つかお聞きしたいことがあるのですが……」

「オラにわかることならな」

「ではまず、孫悟空とおっしゃいましたが、姓が孫、名が悟、字が空ということですか?」

「姓とか名とかよくわかんねえけど、オラの名前が悟空ってことだけは確かだ」

そういえばDBの人間で主人公の家族以外名前しかなかったような

……

「ではこれからは悟空殿、と。それで悟空殿は孫家の人間なのですか?」

孫家つてあれだよな、孫堅とか孫策とかの

「孫家つちゅうんがどいつのことなのかわからんけど、爺ちゃんの名前は孫悟飯ていうんだ」

「孫家にそのような人物がいたという話は聞かない……。なるほど、わかりました」

「いってこと。そんで聞きたいことつちゅうんは終わりか？」

「いえ、最後に1つ……」

なんじゃろ？

「この惨状はあなたがやったのですか？」

「ああ、そうだ」

シーン……

えっ？なにこの沈黙

「そ、その、悟空殿はなにか道術のようなものを修められていらっしやるのですか……？」

道術？

いやまあ界王拳も道術と言われれば道術になるのかな？

でも今回は使ってないからなあ

「一応それっぽいのは出来つけど使ってねえぞ」

嘘はついてないぞ嘘は

気弾は純粹な技だからな！

空飛んだり変身したりするのもゼーんぶ気だ！

そうだ『気』のせいだ！

「そ、そうですか……。……しかしこの御方も御遣い様、きつとわたしの預かり知らぬことがあるのだろう……。……気にしてはいけない、そう気にしてはいけない……」

「んー？なんか言ったか？」

後半小さくて聞こえなかった

「オホンツ！いえ、なんでもありません。御主人様、悟空殿。」

「なに？／おう？」

「この様子だと賊はもう襲ってはこないでしょう。賊が討滅された以上ここにいる理由もありません。早く兵たちの所に戻り、邑まで帰りましょう」

「そうだね。早く鈴々にも悟空さんを紹介しなきゃ」

「わかった！んじゃもう変身は解いていいな」

シュン

「！？！？！？」

いやはや解くの忘れてたね

「う、悟空殿！？今のはいったい？？」

あ、そっか。知らないのか。いや知ってたらビックリだけど

「今のはな……」

おじちゃん説明中……………

「……………て訳なんだ」

「すーぱーさいや人ですか……天には摩訶不思議な者たちがいるのですね……………。もしか御主人様も!？」

「いやいや、ないから!俺れっきとした地球人だから!ヒューマン!悟空さんみたいな人外と一緒にしないでくれ!」

なかなか言ってくれるじゃないの

ま、気にしないけどね

ホントに人外だし?

「まあ、さっきの状態だとこの世界に出る影響っちゅうんが強すぎっから余り使わねえけどな!」

幼少期（と言っても16歳と言っていたが）で、すでに骨と皮膚が銃弾を弾き返すという人外っぷりを発揮していた

ということは刃物と弓矢ぐらいしかないこの時代の武器で傷つけることは不可能な訳でありまして

どこの海賊王漫画のように覇気があるわけでもないし………あつたところで効かないけど

ノーマルでそれなのだから、超状態にでもなろうものなら刃がこの身に届く前に崩壊してしまう

某月光蝶ではないが、闘気に触れただけでおじやんになる………と思う

「……悟空さん、くれぐれも満月は見ないで下さいよ?」

「ああ、それも大丈夫だ。超4に成れるようになってから大猿になつても制御できるようになつたかな」

確かに『月見してたら都1つ無くなりました』なんて洒落にならないもんな

現代日本人であつた俺としては風情も大事にしたいので能力把握の際に確かめておいたのだ

「なら、いいか」

「お話は終わりましたか？」

「おう、すまねえな。んじゃ早速連れてってくれ！オラもう…」

「「もう？」」

グギョルルルルルルル！

「なんの音だ！？」

「敵襲か！？」

む、一刀君は知ってるだろうに

「たははははは、今はオラの腹の音だ。さっき動いたから腹減っちゃって……」

まだ目の前の2人は気づいていないが、頭には死人の証である輪っ

かが残っている

本来幽体であるこの身体には食事も睡眠も必要ない

だが、俺がイレギュラーな形で地上に降りて来てしまったせいなのか、三大欲求もバリバリ活動中なのだ

まあ、ブウ編の悟空もあの世でガッツリ飯とか食ってたし？

むしろこれがデフォ

「で、では尚更早く合流しませんと」

関羽の顔が若干疲れてるように見える……

非常識と異常の塊が目の前にいるんだから仕方ないか

「そうだね。じゃ行こう」

「待った」

「「はい？」」

あれがやりたい！

「瞬間移動すつからオラに掴まってくれ」

「おお、その手があったか！」

「瞬、間移動？……もうなにも言つまい………はあ」

一刀君は嬉々として

関羽は悟ったような雰囲気であの肩に手を置いた

俺は指を額に着ける

そして

「んーと、この沢山気が集まってる所だな。うし」

ピシュン……ン

2人を連れてその場から消え去った

……シュン！

「とうちゃく」

「すげー！ホントに瞬間移動しちゃったよ俺！」

いやいや、したの俺だから

「なんと……。すごい……。これが、御遣い様の一端……」

超状態になれば瞬間移動ぽい移動とかもできまっせ？

「にやわわわわ！愛紗とおにーちゃんと知らない人がいきなり現れたのだ！」

ざわ…

ざわ…

ざわ…

別に福本ネタではないが、周りが騒然となっている

そりゃそうか

自分たちの進行方向先に自軍の大將と俺がいきなり出て来たらビツクリするわな

関羽と一刀君は事情説明に忙しいようだね

「愛紗たちから話は聞いたのだ！おじさんが2人目の天の御遣いなのかー？」

チビツこ…もとい張飛がこちらに来た

「はは、よくわかんねえけど多分そうだ。オラ孫悟空だ、よろしくな！」

とりあえず自己紹介

「鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳っていうのだ。真名は鈴々なのだ」

そつえば真名なんてありましたね

や、一応知ってるけど念のためにね

「真名ってなんだ？」

「にゃー、おじさん大人の癖に真名を知らないのかー？
真名って言うのはね、その人を表す真の名前のことなのだ。

例え真名を知ってても呼んでいいよって言われるまで呼んじやいけないものだ」

さつきからおじさんて……

まあ年齢的にみればお爺さんだから全然間違いじゃないけど……別にいいか

「オラに真名つちゅうの呼ばせてくれんのか？」

「うん！さつきはいきなり出て来てビックリしたけど、愛紗たちが一緒にいたってことは悪い人じゃなさそうなのだ。だから呼ばせてあげるのだ」

善人そうなら呼ばせるって……いいのかよそれで

「はははは、んじゃ、ありがたく呼ばせてもらっぜ」

「にやはは、呼ぶがいいのだー」

「これ鈴々！あまり失礼なことを言うでない！」

お話は終わったようだな

「よ！もついいのか？」

「はい、悟空殿が天の御遣いで我々に先んじて賊を討滅された、と

いう話をいたしましたら……フッフ

皆大喜びしておりました。後で直接お声をかけて下さい」

「そっか……。みんなが笑ってんなら最高だな」

「はい。それと、大変失礼しました。私の真名は愛紗と言います。どうか以後愛紗とお呼び下さい」

「いいんか？」

こいつぁ嬉しい誤算だぜ！真名を呼んでいいってことは信頼されるってことだからな！

「鈴々も真名を許している以上、義姉である私が渋るわけにはいきませんので」

「そっか、ならこれからは真名で呼ばせてもらっかな」

「はい、そのように」

無事合流を果たし、邑まで帰還することができた

その後は原作通りに一刀君が太守になり、俺たちは北郷軍の将として活動することになった

街中が酷く荒らされていたため、不戦勝祝いの宴は街の復興がある程度進んでからという話になった

なぜ不戦勝祝いなのかというと、俺のせいだとか

戦う前に俺が全滅させてしまったので、ということだ

今回の戦は義勇兵たちの経験を積ませるためという思惑も少なからずあったらしいので、余計なことをしてしまったかな？と伝えたが、

『確かに経験を積ませる機会を失ってしまったのは痛いです。ですが、死者が1人も出なかったというのがなによりもの戦果でしょう。中には家族を残してきた者も複数名いたとか。彼らの家族からすれば生きて戻してくれた悟空殿は正に英雄のように映っていることでしょう。』

胸を張って下さい。

あなたは彼らの笑顔を守ったのです』

とか名演説をしていただったので、まあいいか、と思うことにした

後日、その彼らから立て続けに感謝とかお礼とか御参り（？）とかされてグロッキーになってしまったのはここだけの話

閑話休題

それから数週間は街の復興の手伝いや、兵の調練、街の警備、たまに現れる賊の退治など、濃い日々を送っていた

あと鈴々が『頭の輪っかのおじさん』と呼んだのをきっかけに、やっと気づいた一刀君と愛紗たちの反応は面白かったとだけ記しておこう。事情説明がめんどくさかったこともな！

ようやく復興の目処が立ち、落ち着いてきたところで民たち自ら『新太守と愉快な仲間たち歓迎会』と『遅れてゴメン！不戦勝祝い始まるよ！』なる宴を街全体で興してくれたのだ

その宴の席で頭を抱える一組の男女

「鈴々がよく食べるのは知っていたがまさか悟空殿まで……………」

愛紗と

「忘れてた……すっかり忘れてた……サイヤ人の胃袋は底無しだつてこと……」

新太守こと一刀君であつた

宴の中の催しものの中で、大食い大会が開かれることになり、2人ともそれに参加したのだ

お前ら賊の襲撃から一月经ってないのに何してんだよという話になるが、どうやら前の太守が通常の三倍ほど税収をしていたらしく、備蓄庫には糧がたんまりと残っていたのだ

既に古米と呼べるほどの物もそこそこあつたので良い機会だから使つてやろうという話になったんだとか

それはともかく、民たちや一刀君と愛紗には誤算があつた

それが

「はむっ……はふっ……（モグモグ）…ゴクン……ぷはぁーっ、おかわり！」

天の御遣い、孫悟空の食の太さであつた

鈴々ですら十人前は軽くたいらげるのに対し、孫悟空はその倍以上ときている。

重なる器で通りの向こう側が確認できないほどだった、との証言もある

以後、孫悟空の食費について頭を悩ませる日々が続くのであった

「大空と大地と大海の中で」(前書き)

PV35000突破

ユニーク6000突破

ありがとうございます

というか恋姫ブランド凄いね

まだ四話くらいしか投稿してないのに

今回は更にひどい気がする

後半とか前に同じ終わりがたしたような……

公孫讃のどこまで進めるはずだったのに全然進んでません、ごめんなさい。

次話はなんとかしたいなあ

「大空と大地と大海の中で」

食糧問題発覚から更に数週間が経った

その間も黄巾党と呼ばれる賊の殲滅は続いた

もちろん俺も参加しているが、愛紗から半分は残すように、といい笑顔でお願いされたので手加減しまくっている

兵達に実戦の空気に慣れてもらう必要もあるので仕方ない

とある日、こんな噂を聞いた

『金色の御遣い様は太陽のごとき光を操り敵を殲滅せしめる』

『金色の太陽だ』

『我々を照らしたもう太陽だ！』

という噂

以来、北郷軍には天道がついているという風評が立つようになった

先日捕らえた黄巾党の1人が言うには

十の旗を見たなら、諦める

という決まりまであるようだ

やっぱりこの時代の人たちからすれば、人が空を飛ぶなんてのは畏怖の対象にしかないんだろうな

更に言えば俺の使う気弾は、あの規格外たちの中でもさらに規格外のもの

某魔砲少女の全力の砲撃でも精々が都市1/4壊滅が限界

こちらら欠伸びながら片手で月やら地球やらをズドンできてしまうのだ。比べる方が酷か？

威力を抑えているとは言ってもそんな気弾を雨あられと使っていればそんな噂も出てくるか？

毎回戦闘の後はナパームも真っ青な荒れ地になっているからな！

既に邑の人たちは空が飛べることは知っているので、警邏をする時はいつも飛んでいる

全体を広く見渡せるので警邏が楽なことこの上ないのだ

そして便利な点がもう一つ

「食い逃げだーっ!!」

「むー目標補足、これより捕獲対象ターゲットの無力化を開始する。せえゝのっ
っ」

上空からの見敵必殺《サーチ&デストロイ》

「はあっ!」

ボヒュウッ!

一般人なら1日昏倒するくらいの威力の気弾を飛ばす

相手は人々の間をすり抜けて移動しているので、他の人たちに気弾が当たる可能性も少なくはない

だがそんな問題は警邏初日にクリアー済みだ

一刀君で実験という犠牲を払いはしたが……

こちらは上空から視認でき、一度認識してしまえば他の気と間違えることはないので、気弾には追尾性能を追加したのだ

もちろんただ追いかけるだけでは被害が広がってしまうので、相手の周りに気が少なくなつた頃を見計らつて相手の真上から脳天に着弾させるようにした

そういえば最近の収監者たちは皆一様に頭が薄かつたそうな

なんだろうねーH A H A H A

先ほどの食い逃げ犯にも気弾が命中したもよう

一瞬で移動して犯人を確保。担当の兵士に受け渡す

「ほいっと。んじゃあとは頼むな」

シュタツと右手を上げて邑上空へと戻る

「はっ！お疲れ様です、孫將軍！引き続きよろしくお願いします！」

キビキビとした兵士の声が背中に向けられた

他にも近くにいた人たちから労いの声が多数かかる。その1つ1つに意識を送りつつ警邏に戻る

これは俺じゃなくて悟空自身のカリスマの影響かもしれないな。知

らず、人の心を魅了してしまうカリスマ。素体が悟空だから残っているのも当然か？

やっぱスゲーわ、悟空って

おっちゃん警邏中・・・・・・・・

時刻は夕暮れ時

もうすぐ仕事は終わるが、この時間帯からが一番気を抜けない

いつの時代も悪事を働く人間が動くのは、夜の帳が降りてから

それに目掛けての間に行動するものも居る

しかし、今のところそんなことは一度も起こっていない

なぜならば

「はっ！ほっ！それっ！そっち！そりゃそりゃそりゃそりゃあー！」

動く前に俺が全て叩き潰しているからだ！

俺が浮いているのは街の丁度真ん中辺り、20mほど上空

街自体そこまでデカくなく、かつ高い建物なぞ太守の城がいいところ。その太守の城も高いというより広いといったところだ

なので街全体を監視でき、不穏分子は例え建物の中であろうと気の流れを観て完璧に潰すことができる

気の流れを観て善悪の判断がつくようになったのはある意味偶然だった

元々気の扱いについては超一級品の才能と実力を持っていたので、できないかなー、と適当にやっていたらできるようになっていた

一度成功すると身体が覚えてしまったらしく、二度目からは問題なくできた

曖昧な説明だが、ロジックではなくフィーリングによるものなので細かに説明するのはとても難しい。強いて言うなら善悪を白黒のオーラに置換してもらうのが一番だ。H×Hの凝の方が分かり易いかな？目にオーラを集めて対象のオーラを視認する基本技の1つ。それを氣で行っているようなものだ。目に氣を集めている訳ではないがな！

そういうわけで悪っぽい集団が居る建物とかは真つ黒黒助が引越し始めたのだと思うほど黒いのだ。その中から人数を特定し、二次被害が出ないように気弾を調整後、発射・命中・引き渡し。潜伏先の家屋の屋根に開いた穴は『御遣い様の成敗跡地』として観光名

所になっているとか

まあこんな感じで日々を過ごしている……のだが

「休日が10日に一度って酷くねえか」

1日交代でやっていたとき、一周終わった後の犯罪者捕縛率が俺だけ異常に高かったく、しかも短時間で行ってしまったという事実が追い打ちをかけた

それ以来俺は一刀君や新兵等の警邏も一手に引き受けることになってしまった

愛紗に講義してみたものの

『聞くところによれば悟空殿は勉強が苦手とか。先の事を考えると悟空殿にも文官の仕事を覚えていたきたくもあります。ですが幸いなことに天の御遣い様は2人。片方は知識で、片方は武で、と既に役割として決まっています。ならば、天の御遣いであるお二人にはしっかりと役割をこなしていただかなければなりません。なので必然的にこうなったのです。もちろん悟空殿だけ仕事の量が増えたわけではありません。御主人様には悟空殿の分の書簡などを引き受けてもらっていますので』

など一息で言われて押し込まれてしまった

別に10日ぐらいならぶつ通していけなくもないけど精神的にキツい
しかも俺が休日の日は警邏と骨休みという名目で愛紗と一刀君が一
緒に出て行くのだ

こいつぁ間違いなくデートだな。俺の精神をゴリゴリ削ってくれて
いる要因の1つだったりw

閑話休題

そういえば嬉しいことが2つあった

1つ目は、この時代でも魚の生態があまり変わらないことだ

以前の食糧問題を俺なりに考えて
『自分の分は自分で捕ってこよう』
という結論に至った

そこで早速俺は海へと向かった

陸だと家畜に限定されてしまい、家畜じゃなくても俺が食べる量の
穀物を用意するとなると時間がかかるので没

川も満足できる量が捕れるわけなので却下。どんなにデカくても
鮭程度が限界だ

陸上での確保。無理ではないがやると大変だ。いかビクリ人間が存在したとて、ここは比較的常識のある世界なのだ

『DBみたいに巨大生物があっちこっちにいればなあ』

と呟いてから気づく

『クジラアアアアアアアアアア！！』

陸上にはおらずとも海中ならわんさかいるではないか！

しかもここは現代より1800年も前だ！

乱獲による心配なぞ微塵もなし！シーシェードもないから獲ったところで問題はない！強いて上げるなら俺が食い尽くさないかということだが、どうせ2年以内にエンディングを迎えるのだからやっぱり問題なし！

久しぶりの刺身じゃああああああ

と意気込んで太平洋まで一気に飛んで黒マグロ500kgクラスを4匹穫って海上に出してから大事なことに気づく

醤油、無え

この時代には醤油は無いということを忘れていた。某菌を見る人みにたいに麹菌を集めることができるわけではないので寿司刺身は断念した

腹いせに一匹丸々いただいてやった

[illegible]

右に2本、左に1本

マグロを抱えつつ俺は今、現代で言うところのシベリア北部に来て
いる

すでに環境としては変わらず永久凍土が出来上がり、ブリザードが

吹き荒れている

平均気温マイナス20

最低気温になるとマイナス60　を下回る極寒の大地

開発など皆無なためこんな環境なんだろうな

そもそも開発しても無意味だが、な

さて、やることやってさっさと帰って風呂に入ろう。寒すぎだ

両脇に抱えるマグロを全力で振り回す

ビュゴオオオオオ！！

えたーなるふぉーすぶりざーど（仮）が起きた気がする

そんなことよりマグロだマグロ

予定通りガチンガチンに凍ってくれたね。これであちらに戻っても
しばらくは保つだろう

俺？俺はあれだ、気でガードした。うん、これしかない

つかこれしかできない

2本を近くの山脈にまとめて埋めて気弾を辺りに撒き散らしておく
これで気を探ってマグロを取りに来ることができる

撒き散らしたときに鹿を見つけたので確保しておいた

鹿肉は生前(?)食べたことがあるが、ステーキはマジで美味かった、とだけ残しておこう

こうして食糧に関する問題が減った

いつでも雪山に瞬間移動できるので疑似冷蔵庫みたいな形で今後も利用していく方針だ

俺の仕事に輸送任務が加わった:

誤算がもう1つ

俺が持ち帰ってきた黒マグロと鹿を見るやいなや一刀君が大喜び。
それならばみんなで食べようと一刀君の提案でマグロのトロステーキを作ってくれと専属の料理人に依頼した。そして出てきた、見た目牛ステーキなマグロ焼き。たいした香辛料もないので単純に塩でいただいたそうなの

今まで魚を長期保存する方法がなかったため、あまり内陸部に魚介

類は流れてこないんだとか。必然、1度も食べたこともないという人もいた

つか愛紗たちがそうだった

新しい食材の味に2人の目はキラツキラと輝き、

『できれば邑の人々にも食べさせてあげられないか』

『みんなで食べた方が美味しいのだー』

と潤目で籠絡^{せつとく}され、定期的に海に行かなければならなくなってしまった

俺の仕事どんどん増えてってる……

海へ獲りに行く日が休日になってしまったため、10日分の疲労を抱え黒潮を目指さなければならなくなった。もう死んでるから過労死はないだろうけどな、不安だぜ

今度ガチでクジラ獲ってきて困らせてやろつか……

原作は文がっつりと並んでるだけだからよくわからなかったけど
そろそろ公孫譚フラグ何じゃないかなーとか思っていたら召集がか
かった

内容は今までと同じ黄巾党の討伐、少し違うのは今回はやや遠出に
なるということだった

「悟空殿」

「ん？なんだ？」

「今回の遠征においては、十分な兵糧の確保も迅速な勝利につながる
重要な要素となります。ですので……」

「わぁーってる、わぁーってるって。オラと鈴々の分はちゃんとオ
ラが準備すつから！」

「よろしくお願いします。では、出立は明後日となりますので」

「おう！」

海へ山へと移動を繰り返した結果、最初にマグロを埋めた山には既にビッグなフィッシュたちの畑となっていた。その結果山1つでは足らなくなり、後2つほどテリトリーの山を増やした。たまにヒグマなどの野生動物に魚を持っていかれたりするが貯蔵量はその何百倍とあるので問題は無い

数だけ聞くと穫りすぎのように思えるが、今現在の漁業の実状は世界規模で見ても猫の額ほどの面積でしか漁をしていない。さらに彼らは迷信や噂といったものをとて信じやすいので一定の範囲から出ようとしないのだ。技術や知識などは仕方ないといったところか。そういったことから漁獲量は現代の百万分の1以下程度でしかない。要は数を気にせず穫りに穫れるのだ

今回は遠征ということで持って行くのは300kg級のマグロを5本。あれ？と思うかもしれないが足りなくなったら雪山に瞬間移動して随時補給すればいいのだ。いやーマジ瞬間移動って便利w

できれば兵たちの移動も皆纏めて瞬間移動できれば良いのだが、場所がわからない上にまた愛紗にダメ出しを食らった。

『これから先、軍を分けての進軍という状況がないわけではありませんが。悟空殿に頼りきりでは、何らかの事情で悟空殿が居られなかった場合に兵の士気に関わります。兵たちのためにもここは御自重

を』

もっとも過ぎて笑うしかねえw

そんな諸注意を受けてからすぐ出立の日となった

行進速度を合わせるように、と言われたがそれについては問題ない

嬉しいことの2つ目になるが、なんと金ト雲を呼ぶことができたのだ！

空飛べるならいらなくね？なんて甘い！甘過ぎる！

忘れてたけど空飛んでる間は常に気を消費しているんだよ

燃費が良くなるじゃないか！

.....いやまあ、うん

行軍速度合わせるためです、はい

ま、まあ後々何かに役に立つはずだ！そくに違いない！

ちなみにこの金ト雲、愛紗と一刀君は乗れず鈴々は乗れた

金ト雲に乗れる条件を説明したら愛紗が崩れ落ちてたな

ワロス

鈴々の場合は思考回路が悟空に似てるからかな

「うわぁー！高いのだー！」

「あんまはしゃいでつと落ちっぞ」

「そうなたら悟空が助けてくれるから大丈夫なのだ」

2人で乗ってます

マグロを背負ってあぐらをかいている俺の足の間にすっぽりとハマっている

気分的にはパンと遊んでる感じだ

鈴々は初めての飛行に大興奮のようだ

今度街の子供たちを乗せてあげるのもいいかもしれないな

1日、2日と行軍していると少し先で賊の集団と公孫の旗を掲げた軍が戦闘を行っているという情報が入ってきた

鈴々にマグロと金ト雲を任せて一足先に飛んで援護をしに行く

「にゃあー！マグロは美味しいけど重いのだー！」

なんか言ってるが気にしない気にしない

あっという間に戦地についたが賊の数が圧倒的に多く、公孫の旗が徐々に押されていくのが分かる

まずは敵の動きを止める！

「はあああああ！」

ドオン！

やや派手に気を解放する

その際に纏う気の色を金にするのも忘れずに

俺の背中にはマグロではなく、『十』の旗

「な、なんだ!？」

「じじ、じじじじゅ十文字の、はたはたは旗たたた……」

「終わった……俺たちもう駄目だ……」

「バカやろう! さっさと弓矢でブチ殺せ!」

おうおうビックリしとるのう

しかしまだ戦うつもりのやつらが大半

賊全体がおよそ1万ほどで弓矢を持つてるのが4分の1くらい

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン
ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……!!!

全部俺に向かって放たれた

しかし矢が通るわけがないので外れた分も含めて全てが地に落ちた

2、3度繰り返されたがなんの意味もないので矢の無駄だ

「クソッ！まだだ！本隊に合流すればなんとかなる！一旦引くぞ！」

なんか指揮官ぱいのが頑張って号令をかけてる……おお、だったら引き始めた

駄菓子菓子

「逃がさねえ」

こんな数の賊見逃したら後々めんどくさいじゃないか！

両手を前に突き出し、

「ません「悟空おじちゃん……！」こ……っ？」

ドグア！

り、鈴々？あら？早くね？

しかし下を見ると

「ああゝ…もうみんな来たのか……」

あうあー、技出す途中で止められちゃったから賊逃げちゃった……

まあ仕方ないか

金ト雲任せた俺が悪い

マグロと鈴々の突撃は仕方ない

1500kgの衝撃は伊達じゃなかったってことだな！

「悟空さーん！！鈴々ー！！こちらの軍の人たちと軍議を行います
んで、降りてきて下さい！！」

「わかった！今行くー！」

「行くのだー！」

賊逃したのは痛いなあ

本隊がどうのとか言ってたから更に増えるのか？

そうなるど厄介だな。被害を抑えるために特攻でもするかね？

あの人と一緒にね！

P・S

金ト雲の中になぜか如意棒が入っていた

不思議だ

「戦の一幕」(前書き)

むしろメイオウ攻撃

「戦の一幕」

「へえ、お前らが噂の天の御遣いか……」

只今絶賛視姦され中

あのはたいした問題なく合流した、問題なく合流したのだ

マグロを降ろした先にたまたま公孫讃の兵がいて潰されかけたなんてことはなかったし、潰されかけた兵士たちが持っていた武器によりマグロが2匹ほど台無しになって鈴々が暴れて危うく隊が半壊しかけたなんてこともない

「あんまりジロジロ見ないで下さいよ……」

「いやあすまんすまん、噂では聞いてはいたんだがやっぱり自分の目で見て確かめてみたくてな」

そう言いカラカラと笑うこちらの女性こそ、報われないハムの人、公孫讃伯珪である

せっかく声まで宛てられたのに結局途中でリタイアさせられる可哀想な人だ

「そんなもんかあ？」

「百聞は一見にしかず、て言うだろ？本人を目の前にしてこんな事言うのは失礼かもしれないが、それでもお前が太陽のごとき光を操るなんて信じられないけどな。道士ではないんだろ？」

「ああ、違っぞ」

「後で見せてくれないか？もしホントなら兵の士気も上がるし、それに……「失敬、公孫讚殿？」…なんだ、どうした？」

「いえ、長々とお話するのは悪くはないとは思いますが……お互いに満足に自己紹介もしていないというのは如何なものかと思いません……」

横やりを入れてきたのは青い髪に朱槍を持つ女性、趙雲だ

ぬう……服が……エロいです……

「それくらいわかっている、これからしようと思っていたところなんだ！」

「それは重畳」

そう一言残して一歩引いた

嫌みの伝道師、趙子龍！

チャキ

「なにやら不遜な気配が……はて、気のせいですか？」

「なんでもねえ」

「左様か」

「然り」

なに今のやり取り

自分でやっててなんだけどシニールだったな

「ほら、じゃれてないで早く始めるぞ！どつやら賊の方にも動きがあつたらしいからな」

「御意」

「ああ」

「それじゃあ、最初はあたしからだな。
姓は公孫、名は讃、字は伯珪だ。」

「この軍の総大将と、幽州にある邑で太守をやってる」

「お噂はかねがねより窺っております。」

「私は姓は関、名は羽、字を雲長と申します。呼ぶときは関羽、と」

「俺は北郷一刀。一応天の御遣いなんて呼ばれてる。姓が北郷で名が一刀で、字と真名はないんだ」

「オラ孫悟空だ、よろしく！」

「ふむ……私が最後ですな。姓は趙、名は雲、字を子龍と言つ。常山の登り龍とは私のことだ」

「趙雲は士官先を求めて旅をしているらしくてな、今はあたしのところで客将をやってもらってるんだ」

「公孫讚殿の白馬隊の名は各地でも聞き及んでおります、西涼の騎馬隊にも引けを取らない精兵だとか」

「そんなことないって……」

「いえいえそんなに謙遜めされず……」

なんか話に花がさいてるんですけど？
今結構切羽詰まってたような気がするんだがなあ

「して、悟空殿？」

趙雲さんの目がおっかねえです

「噂によれば天の御遣いの1人は単独で乱世を治めてしまうほどの武を持っているとか……、見たところ貴殿がそうなのでありましよう？」

戦いたいって顔に書いてる人初めて見たわ

「どうしてそう思っんだ？」

「なに、武を嗜む者ならば容易に気づきましょう。こちらに降りて

きてから今にいたるまで、まるで動きに隙が見られなかったのな。腰に差していらつしやるその根^{こん}などもなかなか立派な得物であるかと。そして、使えるのでしょぅ?」

如意棒かぁ

素手がデフォだったから今いちピンとこない

前回金ト雲の中から拾い上げたこの如意棒

俺の記憶が正しければ一度も折れたことがなかったはずだ

対レッドリボン軍しかり、対怪獣しかり、その他諸々

小さい城の城壁ぐらいなら余裕で貫通するな

どこぞの格闘家は布で鉄を切り裂くらしいが……

使おうと思えば使えるんじゃない? 身体が覚えてたりするんだろうよ。実際隙が無い云々なんて言われてから気付いたからな。ほぼ無意識とかやるな悟空。身体が自然とそんな動きになるような修行とかしてきたっばいしな。スゴいね、人(?) 体

いやまあ、まともな人間じゃないけども

「ああ、使えっぞ? ガキの頃はこいつばかり使ってたからな」

腰から如意棒を抜く

クルクルクルクル…

シュパッ！

如意棒が伸びた時の顔楽しみだな

「これは中々……悟空殿、少々私と手合わ『失礼します！』……無
粋な」

「どうした！」

十中八九撤退してつたやつらだな

『はっ。先程賊につけていた密偵が戻ってきました。そのものによ
りますと、撤退した賊は別働隊と合流し、再度こちらまで攻めてく
るということです』

「……数は分かるか？」

『………3万強、だそうです』

うげえー、めちゃくちゃ多いな…

原作だと1万くらいだったのにな。数が異様に増えていやがる……。もしかしたら反董卓連合のときとか100万vsなんてことになりそうだな。干吉あたりが増やしたりしてんのかな？

「3万！？兵力が違いすぎる！」

「公孫讃殿、そちらの兵の数は？」

「いいところ3千といったところだ……」

「……こちらも似たような数ですが、それで十分かと」

「な！？相手はこちらの5倍以上なんだぞ！？」

「お気持ちはわかりますが、こちらには悟空殿がおりますので……」

そう言ったところで皆の視線が俺に集まった

残念ながら俺にそっちの趣味はないようだ

「確かにそこそこできるみたいだが所詮は1人の人間！3万もの賊に適うはずがない！」

人間扱い、だと？

やべえ超うれしいw w

「いえ、悟空殿に限っては例外でしょう。悟空殿は単独で1万もの賊をほふるほどの武技の持ち主。私も、その惨状跡を見たことがあります。それは正に天の御遣いに足るものであると宣言できてしまふほどに凄まじいものでした」

愛紗よ、それって言外に人間じゃないって言ってるようなものだよ
ね？

「あの……俺の立つ瀬が無いんですけど」

ほら、一刀君も困ってるじゃないか

しかし皆華麗にスルー

「関羽程の武人がそう言うのであれば真実味は増すが、それでもあたしにとっては噂にすぎない。これより全戦力をもって賊軍を迎え撃つ！出立は2刻後、各自持ち場に戻れ！」

キビキビと指示を出していく公孫瓚

かっこいいなあ……

やっぱり生は違うね

そしてこちらに振り返り一言

「……一緒に、戦ってくれるか？」

「当然です。世の乱れを正するのが私達の仕事ですから」

「あまり役にたたないかもしれないけど、天の御遣いって名前でみんなが頑張れるなら喜んで協力するよ」

「オラ難しいことはよくわかんねえ。でも賊軍が悪いやつらだっただけはわかる。オラも戦うぞ。みんなを守りたいってのはオメエ達だけじゃねえってこった」

愛紗、一刀君、俺の順番で返答する

二カッと笑うのも忘れずに

「お前ら……うん、ありがとうな」

やはりにかみながらお礼を言う公孫讃は中々可愛かった

地味に趙雲の特攻フラグを潰してしまったが、まあどうでもいいか、イベントCG的な意味で

追記

悟空にはニコポは搭載されていないようだ

公孫讚曰わく

『安心する笑顔』だとか

「前方五里の方向に砂塵！賊軍です！」

「陣を展開しろ！公孫讚軍が挟撃に移るまで持ちこたえろ！張飛を前に、私とご主人様を後方に方円陣を組め！」

戦の始まりを告げる声が響く

口上もない、質素な始まり

しかし、元々戦に華やかさなどない。とすればむしろこれが当たり前のようにも思える

なんて語ってはみるものの、今の今まで派手に吹っ飛ばしてきた俺が言えた義理じゃないんだけどねー

作戦は原作のまま

俺達が引き止めている間に公孫讃の軍が後ろに回り込んで挟撃する
というもの

敵に勢いをつかせるために徐々に後退していかなければいけないが、
今回は趙雲が呐喊していないのですんなりいきそうだ

今俺は空中で待機中

俺だけ向かって殲滅できてしまうのだが、俺がいればなんとか
と思われると軍を編成した意味がないし困る

や、実際なんとかなるんだけども

愛紗に言われたというのもあるが、俺自身がいつまでもこの時代に居るつもりがないので、いなくなった時のためにも頑張って経験を積んでおいてもらわなければならない

今回俺は、北郷軍に敵が接触してジリジリ後退し始めたあたりで敵兵を1万弱ほど減らし、そのあとは地上に降りて白兵戦を行う。公孫譚軍が挟撃をかけるタイミングもここだ。両軍には様々な経験をしてもらうことになる

「敵軍まもなく接触！」

「皆の者、臆するな！！我らには天が着いている！互いの背中を守り2人一組で確実に敵に当たれ！さすれば天が我らに勝利をもたらすぞ
！！！！！！」

『オオオオオオオオオオオ！！！！』

「始まったか」

眼下を見下ろしぼつりと呟く

甲高い金属音があちらこちらで響いてるのが聞こえてくる

時折金属音に混じって聞こえる断末魔は、賊のものか、はたまたこちらの軍か

3万という数は伊達ではなく、3千に届くかといった北郷軍との差は歴然だ

今は愛紗と鈴々が先頭で奮戦しているが、もし2人がいなければものの五分で呑み込まれていただろう。流石は美髪公と燕人。一騎当千の名が相応しい

徐々に北郷軍が後退し始めた

もうそろそろだな

シュオオオオオ……

両の手のひらに気を集めていく

オラオラで攻めるか、ス ナーサンシャインもどきでいくか……

挟撃の合図にするんだったらストナーンシャインの方がいいな

両手を頭上に持つていき拳大の気弾を作る

「ストナーアアアアアア……………」

ググググ…………、ギュンッ！

少しずつ大きくして最後に一気に直径5mほどに大きくする

威力はノーマル状態かめはめ波の10分の1もある

そいつを腰だめに持つていき…………

「サアンシャアアアアイイン！！！！！！！！」

賊軍の左後方へと放つ！

数瞬の後

ズゴオオオオオオオ！！！！！！

着弾した地点から爆音と爆風が唸りをあげた

爆煙がキノコ雲よろしく立ち上り、爆風によって巻き上げられた砂塵で視界が塞がれ

「エエッホッ！ゲホッ！」

むせた

ダセエ

「ゴホッ…ちくしょうコノヤロ！
マッスルタイフーン！！！！！！」

まあ自業自得なんけども、イライラしてネタ技に走ってしまったのはダメだったな

マッスルタイフーンとは某ダメ超人が戦闘の際に使用した超人技の1つだ。自身の身体を激しく振り突風を起こすという格闘漫画界屈指のとんでも技だったりする

俺の身体で起こした風が砂塵と爆煙をなぎはらっていく。と、やっとこさ現場が露わになった

「うゝむ、いい感じ」

いつぞやのようなクレーターを起こさないように横に広がる安心設計にしたので問題はない

敵の数が減りすぎたこと以外は

「あつちやゝ……まあた愛紗に怒られちまうな。愛紗が怒るとチチの次にこええかな……。まあ仕方ねえか！」

パツと見、敵さんの残りは1万と少し。ソレも反撃を始めた北郷軍と挟撃に入った公孫讚軍によりジワジワと数を減らしてきている

残りの仕事は地上戦、か

ここは如意棒に活躍してもらいますかね

そうして俺はもはや混沌としている敵軍のド真ん中へと降りていく

のだった

side end

公孫讚軍 side

私たちは敵軍の背後に上手く回り込み、しばらくの間敵軍が北郷軍に接触し合図が来るのを待っていた

天の御遣いの噂は聞いていた

北郷の方は良政を敷き民たちからの支持も厚いと聞いていたので流石だなくらいに思っていた、が

もう1人の天の御遣い……孫悟空の方の噂は酷く滑稽だと思った。聞けば『太陽を操る』だの『金色に光り輝く』だの『1人で砦を消滅させた』だの……。噂には尾ひれがつくものだとなっていた。それからこそ、この噂を聞けば聞くほど本当に馬鹿馬鹿しくて仕方なかった。

しかし、目の前の光景を見ると馬鹿馬鹿しいと考える余裕すらなくなつた。

悟空が飛ぶことができるというだけでも凄く驚いたが、それすら意にかえさない光景だつた

接触して頃合いかと思われたその時、突如として光が頭上から溢れてきたのだ

視線を向けてみれば、悟空が巨大な光の球を掲げているではないか
その姿からは、天、という言葉しか浮かんでこなかった

これには私含め全軍が絶句した

隣で突撃の準備を進めていた趙雲も口を開けてポカンとしている

私たちがその姿に見とれているとアイツが、天、を敵軍に向けて投げつけた

天、が敵軍に到達したと思つたところで、閃光と爆音と凄まじい衝撃が襲いかかってきた

ようやく収まったかと目を開けてみれば、舞い上がる砂塵の向こう側にとてつもなく巨大な煙が見えた

また絶句

何度驚けばよいのかと呆然としていたら今度は突風が吹き荒れた

突風が砂塵を吹き飛ばして視界を取り戻したら

三度目の絶句

先程まで敵軍が蠢いていた場所が綺麗さっぱりと片付いていたのだ

死体すら遺さず

正しく状況を理解した時、全身を震える感覚が襲った

恐怖ではなく畏怖

感動ではなく驚嘆

味方でよかった、と兵士の誰かが漏らした

私もそう思わざるを得なかった

そこで一足早く正氣に戻った趙雲から声がかかった

その声で正氣に戻された私は直ぐに号令を出した

「伯珪殿……」

「……………なんだ？」

「まっこと、あの御人がこちらの味方で良かったですな」

「……………。早く行かないと手柄が無くなってしまっぞ」

「おっと、それはいけませんな。それでは」

そう残して趙雲もあの混沌とした戦場へと向かっていった

私の視線の先では

奇跡を起こした人物、天の御遣い『孫悟空』が朱色の長根を奮い、
次々と賊を吹き飛ばしていた

時たまやられそうになっている味方を、朱色の根を、伸ばして、助

けたりと神業を披露している

ふふっ、もう何があっても驚かない

アイツなら、何を起こしても驚かない

s i d e e n d

主人公 s i d e

地上に降りてからリアル無双を展開していたらいつの間にか賊軍が
全滅していた

そらそうか

関羽、張飛、趙雲、公孫讚といった三国志を彩る英傑に加えて俺がいる

兵力差を抜いても過剰戦力だね

「勝ち鬨を上げろ！」

「鈴々たちのしょーりなのだー！」

『ワアアアアアアアアア！！！！！！！！！』

全軍で勝ち鬨を上げた後、直ぐに公孫讃の治める邑へと出発した。

邑へ入れば、すでに情報は伝わっていたらしく凄^ひい賑^{にぎ}わいをみせていた

そこでもやはり天の御遣いのレベルは凄まじく、こちらを拝む者まで出る始末

悪い気分はしないけどね

マグロはちゃんと回収してきた。今回の戦勝祝いの宴は街総出で行われるらしいので今から例の山に行って追加するつもりだ

「天の御遣いってのは、伊達じゃなかったんだな。本当に凄かったよ」

「然り、人間とはあのような高みを臨む事ができるのだな。いつかご教授願いたいものだ」

「なんか照れるな」

「我々の軍は良い意味で悟空殿に依存し始めております。なので相手の数が十倍に届こうとも、恐れずに挑むことができます。悟空殿という絶対的な安心感を背にしているからこそその勝利でしょう」

「やっぱり俺の立つ瀬がないんだけど……」

一刀君の言葉を締めにもみんなで笑いあった

後日愛紗に聞いてみたところ、今進めている調練は基本的に俺がいないことを前提に行っているらしい

頼りきりで恥ずかしくないのか、街を守ると立ち上がったのではないのか、と激を飛ばしつつ日々を重ねているのだとか

宴に出したマグロ、クジラの一部、カツオ、サケ、サバ、アジ、イカ、タコなどなどの魚介類は大好評だった

青魚は傷みやすいのだが、海で捕獲して直ぐ凍らせているので溶けても新鮮そのもの。北極から多めに氷を砕いて持ってきたので宴の最中も問題なし

醤油がないので刺身や寿司はできなかったが、それでも炙り、焼き、煮込み、燻製などで十分だった

煮込みや燻製が酒飲み達に大好評で、邑同士で輸出入してくれという話になったことを記しておく

比較的日持ちするから大丈夫だろ、燻製なんか保存食だからな

宴から数日後

「もう行くのか、名残惜しいな。今回は本当に助かった、ありがとうな」

「いいっていいって。オラたちも悪い事するやつらは許せねえからな」

「それでも、さ。宴に食糧まで提供してくれたりして本当に助かってるんだ。お前たちの食欲じゃあウチの備蓄だけじゃ保たなかったしな!」

ははは、と互いに笑う

「なあ悟空、ウチに来ないか？」

「こ、公孫讃殿!」

「ハハッ冗談だよ、半分はな。本当に北郷軍は羨ましいな」

「それが我らの強みでもありますから」

「……………白蓮だ」

「「「?」」」

「私の真名だよ、お前たちに預ける。お礼だと思って受け取ってくれ」

「わかりました。ではこちら信頼の証に真名を預けないといけませんね。私は愛紗、と」

「鈴々なのだー」

「俺には真名がないから一刀って呼んでくれ」

「オラにもねえから悟空でいいぞ」

「愛紗、鈴々、一刀、それに悟空。本当にありがとう。道中気をつけてな」

それは飯的な意味でかな？

「ご配慮痛み入ります」

「ふむ、では私もここで旅に戻るといたしますか」

趙雲が一言

いやいや、空気読んでくれ姐さん

「そうか……って、ええっ！？お前も居なくなるのか！？」

「何を仰います、もともと此方に客将として身を置いていたのは旅の休憩と公孫譚殿の太守としての器を見極めるため。良い機会なのでこの流れに乗って私も新たに、という訳です」

理由はわかった、しかし……

「ああ…有能な人材が……また地味って噂が……」

見事に撃沈しているではないか

将兵の何人ががささず慰めに入るのは流石の一言

「それではまたいつか。もっとも、案外早く再会するかもしれんが……」

一刀君に流し目を送る趙雲

一刀君め……いつの間にフラグを建てたのだ……クッ、これが主人公補正か！

未だうなだれる白蓮を横目に俺たちは進軍を始めた

趙雲は途中まで一緒だったが、目的の邑が南にある、とかで別れることになった

別れ際にマグロとメンマの相性について散々語っていたのはまた後日

「当然の流れ？それとも予想外？」（前書き）

褒められるとダメになるし、なにも評価されないとへこむし、辛口評価されてもへこむ。

でも第三者の評価って凄い大事なんですね

自分で自分の小説を読んだと正直悪い点しか見つからないのでどこを直せばいいのかわからなくて……

今回短いです。内容もイミフ

それでも構わない方だけどうぞ

「当然の流れ？それとも予想外？」

邑に戻り数日、警邏のみの日々を送っていると原作チームの3人が俺の所までやって来た

「悟空殿に折り入ってお願いしたいことがあります」

「なんだ、みんなして？オラに出来そうなことならなんでも言うてくれ」

「実は、私たちに気の稽古をつけていただきたいのです」

「確かに今のままでも十分かもしれませんが、軍という集団である以上1人に依存したままというのはまずいと思うのです。

先日の話とは矛盾してしまうかもしれませんが、集団での強さも、また必須。

そのため兵の調練に気の鍛練を設けたいと思い、それならばまず我々が手本となるべきだと言うことになりました。

兵たちも『御遣い様の力を手に入れることができる』と奮起することでしょうし、

私と鈴々も……武人として更なる高みを目指すことができるのは非常にたぎるものがあります」

「俺はついなんだ…フガッ…ムグッ……」

「にやははー、言わせないのだー！」

「ゴホンッ！現状、軍としての数を揃えるのが難しい以上、少数精鋭を目指すのが我々に課せられた義務でもあると考えます。

悟空殿、どうか我々に気のご教授を」

一気にまくし立てて膝をつく愛紗であったが、その目は爛々と輝いており

『返答は“はい”か“Yes”だ』と言わんばかりの眼力で見つめてきている

まさかこんな形の原作ブレイクをするとは思わなかったな

原作キャラの魔改造

パワーバランスを崩して下さいと言わんばかりのテンプレ展開だな別にやってもいいのだが、確実に古代版グリーンベレーが出来上がってしまうな……

原作でも一応負け戦なんてのはなかった

や、あつたらあつたでゲームが進まないんだけども

更に負け無しの最強の軍隊が出来上がっちゃうよね

まあ俺がいる時点で既に原作から外れているわけでありまして、ええ。やりますよ、やりますとも！

最近5千に増えた兵士たちをスパルタもビックリな精兵に仕上げてやんぜ！

「わかった！難しいことはわかんねえけど、強くなりたいんだよね？」

なら早速修行だ！」

「あ、警邏の仕事をしながらお願いします」

な、なんだってー！？

「うっし、まずは気を感じるところからだな」

場所を移動してここは太守の屋敷、その庭である

調練場でないのは警邏の続きのしやすさを考慮した結果だ

「まずは全身の力を抜いてリラックスすんだ」

「りらつくす、とは一体なんですか？」

「ええと、確かくつろぐって意味だったな。
自然体で居ることが一番ってことですよね？」

「むー、よくわかんないのだ」

「まあそういうことだ、気の流れを感じるには心を落ち着かせて意識を集中に持っていくのが大事だかな」

鍛練のイメージとしては悟飯がビーデルに修行をつけていた風景を
思い浮かべてくれればいい

あちらの世界もこちらの世界も気に関しての認識が似たり寄ったり
だったので今回はこの方法で大丈夫だろうが、いずれ軍全体に指導
をしなければいけないので新しい修行方法を考えないといけないな

できれば20日くらいで気弾をバシバシ撃てるようになってもらいたい

反董卓連合の時期がよくわからないので早めに兵たちを鍛えておく必要があるので、3人には……いや、一刀君は除外で、2人には兵たちに調練をつけることができるくらいには修めてほしい

素養としては十分だ

ビーデルが初日で米粒ほどの気弾を作ることができたことを考えると案外早いかもしれない

悟飯曰く、やっぱり武術やってるから飲み込みが速いなあ、このことなので愛紗と鈴々は完璧。百点。一発合格。

鍛練を始めてからしばらく経ったが、目に見えているわけではないが2人共すでに気の流れが纏まってきているのがわかる。基本的に不可視なのでイメージに頼るこの方法はこの時代の人間には難しいかとも思っていたがどうやら杞憂のようだった。

以前習得した気を目に集めて見る方法で2人を見ると、心なしか気の纏まりかたが炎をまとうような形になっていた。

自惚れるわけではないがこれは十中八九俺の影響だろうな。

悟空たちの纏う気は大体が炎が立ち上るような形だ。

俺の場合、この世界にきてから常に視認できるくらいの気で戦ってきたので一番身近な気のイメージが炎のような気になってしまったのだらうと思われる。が、問題はないだろ

一刀君は一応剣術を習っていたみたいだが、別に生粋の武人というわけでもない。2人に比べたらやや遅れ気味。しかし一刀君にはDBの知識があるので多少なりだが、イメージに関しては2人の先を行くだろう。さつきから形だけはそれっぽくなってる

「どうだ、なにか感じるか？」

「はい、なにぶん初めての経験なのでどう形容してよいのかわかりませんが……、何かが駆け巡っているような……いやまとわりついている……？」

「なんだかものすごくポカポカするのだ」

「……まだよくわかんないな……」

まあこんなもんだろうな

「気に慣れるまでしばらくそのままの状態を維持しといてくれ。自由はその状態になれるまではこの修行を続けっかな」

とはいえ、急いては事を仕損ずる、と偉い人も言っている。基礎の基礎をじっくりとやってもらおう

修行開始から3日

「おっし、そろそろ2人は次の段階に進んでもよさそうだな。一刀はもう少し気を感じる練習をやってくれ」

愛紗・鈴々の2人を少し離れたところまで移動させ座らせる

俺は2人の前に立ち軽く気を纏わせる

ボウッ

白い流れが立ち上る

「気には大分慣れたと思う。そこで今度は気のコントロールの訓練だ」

「あの、こんとろーる……とは？また天の言葉ですか？」

「ああ……、キチンと操るってこった」

「キチンと操る……なるほど、気を制御するということですか。天の言葉とは不思議な言い回しが多いですね」

「たはは……」

伝わらないだろうってのは分かってるんだけど、どうしても今までの感覚で使ってしまうな

ま、その都度説明すればいいか

「軽く手を前に出して合わせるようにして……………ほいっ」と

ポウッ

まずはお手本として一発作る

大きさは豆電球ほど

「こんな感じで気を手のひらに集めるんだ。まずはこの小せえやつを作るようになってくれ」

「はい。／わかったのだー！」

お手本があつたお陰か、直ぐに手の周りに気が集まってきた
が

「むむむ……………」

「にゃー…ピカッとならないのだ」

その先の気弾になるまでが難しいようだ

今の2人は気を手に循環させているだけで留まるには至っていない
愛紗はコツを掴みかけているのか手首の辺りから氣の流れが遅くなり、やがて元に戻っている

鈴々は流す氣が多いだけで留まる氣配がない

これでは疲れるだけなので少々休憩を挟むことにする。現に2人の顔には汗が浮かんでいる

「ふう………流れを感じるところまで案外楽にこなせたのかもしれないと期待していましたが………やはりそう上手くはいかないものなのですね」

「ははははは！まあそう焦んなって、地道が近道ってな！」

「何事にも順序があるのだ」

おお！鈴々が比較的まともなことを！

「下拵えのできてない料理は美味しくないのだ！」

うん、そうだね。美味しくないかもしれない

「むうー？なんなのだ？」

おっと、つい呆れてジッと眺めてしまっていたようだ

とそこへ侍女がやってくる

「御遣い様、こちらでよろしかったですか？」

「おう、あんがとな。あとオラのこと名前で呼んでくんねえかな？
一刀と被っちまうしな」

「善処いたしますね。失礼します」

意識改革の必要性あり！

「悟空殿、それは……何か書でもしたためるのですか？」

「いや、気の修行に使うんだ」

休憩を挟む際に侍女に頼んでおいたもの

筆と墨

まあ大多数の人は予想できただろう

某忍者漫画の主人公が修行の際に師からアドバイスとして施された方法を使う

詰まるところチャ　ラも気も、解釈の仕方が違うだけで同じ様なもののはずだ

違う漫画では念という形で出て来た気がする

「ほいつ……そいつ、と」

愛紗と鈴々の両の掌に点を書き入れる

「手の中に球があるように気を留めるんだ。ゆっくりと気を掌に集中させるんだ、うし、やってみてくれ」

「気を……留める……」

「むむむむむ……」

お！さすが武人、もう流れに規則性が出てきた

今度は留めるということに意識を置いているから、掌の周りの気が他より濃くなってきたのが分かる

ポッ

ほら、もう掌が気の収縮によって淡く光り始めてる

「ハアアアア……………」

深く息を吐く愛紗

呼吸に合わせて少しずつ密度が増していく

額から汗が流れて雫となり落ちたその時

「……………ッ！」

ポウッ

愛紗の掌に米粒ほどの大きさもない気弾が出来上がった

「ハア……………ハア……………やった……………」

声色は疲れているがパアアツと顔を喜色に染める愛紗は中々可愛かった

「すげえぞ愛紗！気の修行始めてあんまし経ってねえのにもうそこまで行っちゃうなんてな！」

そうなるように修行したんだけどね！

「とおおりやあああ！！！！」

シュバツ！

「うおっ！？鈴々もかあ！

いやあすげえすげえ、てえしたもんだぞオメえ達！

もしかしたら空も飛べるようになるかしんねえな！」

愛紗の直ぐ後に鈴々も成功したようだ。シュバツと光ったのはそれぞれの性格が出ているのかもしれないな

「ツ！！それは真ですか！？」

「にゃー！鈴々も悟空みたいに飛べるのかー？」

「ああ、時間はかかっけどちゃんと修行すりゃあ直ぐ飛べるようになったぞ。ただ、その前にしっかりと基礎をがんばんなきゃな！」

「はい！」

「燃えてきたのだー！」

やっぱり空を飛ぶのは憧れるのかな？ 食い付きがすごいな

しかし、愛紗と鈴々が飛べるようになれば戦術の幅も広がるし、気を纏うことによるちよつとした身体強化に武器の補強に気弾もあるので、一騎当千を地でいけるようになる。

俺としては、ゆくゆくは兵士1人1人が気弾を撃てるぐらいまでやりたいな

空を飛ばすなんて贅沢なことは言わないが、気の基本的な扱いさえ覚えてくれれば兵士1人で10〜20人分の働きをしてくれるはずだ。俺、愛紗、鈴々の3人で教導すれば時間はかかるが最強の軍隊ができる！

当然成長具合にバラつきは出るのでそこは要対策だな

互いの習得結果を称え合い、更に熟練度を高めようと奮起する2人を見ながら、これから行うであろう兵士育成計画に頭を巡らせるのだった

ちなみに修行中の警邏は不穏な気を感じたら、ジャベリンよろしく
追尾気弾を庭から撃ち込んでやっていた

今度からサーチャーみたいな気弾でも作ろうかな？

「……………俺っていつまでこうしてりゃいいの？」

未だに気を感じるための修行を続けていた一刀君

その後、庭の隅で体力切れで倒れた一刀君が発見されて一騒動あつ
たとか

「クソッ！誰がこんなことを！」

「いえ、あなたでしよう悟空殿」

「当然の流れ？それとも予想外？」（後書き）

次は軍師出す

辛口評価有り難いのもっともっと下さいなビクンビクン

「牛歩な歯車」(前書き)

亀更新×内容×見切り発車〓読んではイケナイ

遅れてごめんなさい。

二次創作しろや!とお声がかかりましたので地味に変えました。

あと、ストック貯めたいんでしばらく更新しません

7/20

修正入れました。

ですが、大幅な改訂はしないで某仙人の伏線としたいと思いますので、どうかご容赦下さい。

「牛歩な齒車」

気の修行を始めてひと月ほど経った

そのひと月の間に、まだ飛べるようになってはいないが、愛紗・鈴々共々、気の扱いには大分慣れたみたいだ。

気を纏わせて身体強化をさせてからの組み手をさせてから、気を武器に纏わせての試合。その後に気弾を作り、撃ち出す練習をさせている。

既に木偶人形を半壊させる威力にまでなっていて、今現在の命中率は6割といったところか。相手が常に動いていることを考えるとまだまだ。ガンガン特訓させなきゃな！

ただ、さすがに政務の方は疎かに出来ないので、政務中は常に気を纏っててもらっている。仕事を終えると気を纏う前の何倍も疲労が溜まるとか言っていたが無視だ無視。翌日には気の総量が若干上がっているからこれでいい。塵も積もれば、というやつだ。

愛紗・sが政務の間、政務に向かない鈴々と俺は庭で気の訓練に励んでいる。なので愛紗に比べて鈴々の方が総合力としては上を行っている。

一刀？ついこの前やっと気弾作れるようになりました。以上。

.....。

ま、まあ、このひと月は愛紗達に細かいアドバイスを入れつつ鍛錬を行うという日々が続いたのだ

そんなとある日、近くの村に賊が出たということで討伐に向かうことになった

今回俺は手を出さないことになっている

愛紗達が気を用いた戦いの経験を積みたいと言いつけてきたのだ

一刀君は反対したが結局押し切られる形となった

俺も肯定はしたが正直言って微妙なところだ。原作より倍以上多い賊の数は実際脅威でしかない。確かに2人とも気の運用により格段に強くなっているが、それでもまだまだ人の領域内での話だ。多少慣れたとはいえ気を常に使用して戦うのは、想像しているよりもずっと厳しい。

まあ、それを想定した上での日頃の訓練だったりするんだけど

身体強化の影響で死にくくはなってるだろうけど、まだ、刃は通る

ま、愛紗達ならやられる前にやっちゃうだろうけどね

しばらく行軍を続けていると前方に何かの行列が見えた

「ありゃあ一般人だな……。この先の襲われてるうちゅう村のやつらか？」

「うつすらとですが見えますね、間違いないでしょう」

「なんか急いでるみたいなのだ」

「悟空さんはともかく2人ともこんな距離からよく確認できるな……あ、やつと見えた」

素が武人な2人と一刀君とじゃ素材が違うぜ

「……………むっ！？3人共急いであの人たちとこに行くぞ！」

「はい！こちらでも確認しました！」

「すごい砂煙……きっと賊があの人たちを追いかけて来たのだ！」

「全隊に通達！迅速に避難民のもとまで行き民達を保護せよ！避難が完了次第反撃に移れ！鈴々は先行して難民達の背後を守れ！」

『応ッ！！！！！』

「がつてんなのだー！！！！！」

愛紗からの号令がかかり慌ただしく行動を始めた

そういえば原作イベントでこの時期にあるのって、はわわ軍師参入ぐらいしかなかったような？

てことは今回がそうなのかね、ほら、民の後ろに遅れている人影が2つ。きつとアレだな。

あ、鈴々がもう助けに行った。

結構速いんじゃないか？馬と併走できそうな勢いだっとな。

お！愛紗も絶好調だな！

青龍堰月刀の刃に気を纏わせて間合いを伸ばしながら戦っていやがる

お前はどこの念能力者だ！

元々あの武器を振り回す力はあったので身体強化は使用していないようだ。

もつとも、まだ併用できるほど使いこなせてないから使えないだけなんだけども。

「一刀は行かなくていいんか？」

「悟空さん……………それって嫌み？」

一刀君は俺と待機中

気の修行ばっかで肝心の武術の鍛錬をしてなかったからな、戻ったらビシバシ稽古つけてやろう

「ニヤリ」

「え？なんでわざわざ擬音を口で？何か嫌なこと考えてない！？ねえ！……！」

あーあー聞こえないー

んお？

ドゴォォン……

ドゴォォン……

たまに聞こえる爆音はおそらく2人の気弾だな
もしくは武器が地面にめり込む音

こころなしかいつもより威力が高いような……………

あれか、遠足が楽しみで前日眠れませんでした！みたいな

実力を存分に発揮できるから無意識の内にテンションが上がっちゃ
ったりしたのかな？可愛いやつめ！

ヒュウウウウ

「あぶねっ！」

バシィッ！

遙か前方　多分、愛紗がいるところから一際デカい気弾が飛んできた

確かに不敬っちゃ不敬な思考はしてたけど何故わかったんだ？

まさか……………こ、これがギャグ補正ってやつか

恐るべし

練りかたが甘々なので軽く弾き返したけど、それはあくまで俺基準

一刀君に当たったら最悪死んでたな、ワロス

「ワロスじゃねえーよ！とばっちりで死んでたまるかーっ！てかなんでワロスなんて言葉知ってたんだ！」

「オラだから仕方ねえって」

「そうか……………って納得できるか！！」

何かに吹っ切れたような一刀君は置いていて

「そうなのだ！悟空なら仕方ないのだ！」

「そうですね、悟空殿なら何があっても不思議ではない気がします。
既に不思議の塊ですから」

「はわわ、はわわ、なんだか不思議な方たちです」

賊殲滅は終わったようだ。数もたいしたことなかったみたいだし当然だな。

というか傍らの娘は噂のはわわ軍師ではないかね？

「ん？鈴々、その娘は？」

「逃げ遅れてたからパパと助けてきたのだ。
そしたらなんかお兄ちゃんたちに話があるって言うから一緒に連れてきたのだ」

「あ、あああのツ！わわわわたたわたしは、姓は諸葛！名は亮！字を孔明といいましょ！真名は朱里でしゅ！
……はわわわ囃んでしまいました……」

な、なんだこの可愛い生き物は……！

もうロリコンでいいや

ポフッ

「へえ、軍師志望かあ。オメエすげえ頭良いんだな！」

「はわ！？はわわわわ……」

現在朱里ちゃんの頭に手を置いてブレインリーディング中・・・
という建て前のスキンシップ！

ナデリナデリとしていたら、やや目を細めてはにかんでいる顔がまた可愛い！

なんていうか、もう、やっぱりロリコンでいいや

朱里ちゃんの名前を聞いてビックリしている一刀君は放っておいて、リーディングした内容を朱里ちゃんと共につらつらと説明

「水鏡先生の……」

「何かしたくて……」

「私を御遣い様の軍に入れてくだしい！あうゝ……」

かくかくしかじか？

「事情はわかった。だが見たところ戦えるようには見えないが……？」
「さつき悟空さんが軍師志望って言うてただろ？今の俺たちの軍に足りない役職だ。」

文官も足りなくて大変だって愛紗も言うてたし……この娘が文官の要になってくれるっていうならこの申し出は願ってもない話だと思うんだ」

「で、では！」

「うん、よろしく頼むよ。」

「はい！よろしく願いします御主人様！あと、私のことは真名で呼んで下さい。他の皆さんもよろしく願いします」

その言葉を皮切りとして各々の自己紹介を適当に済ませた

邑に戻って朱里の紹介を含めた軍義を行っているとき、また、孫家の方ですか、と聞かれたので勿論違うと答えた

「そうなりますと少々厄介なことになるかもしれませんね」
朱里が唐突に切り出してきた

「どういうことだ朱里？」

「はい。私がこちらに向かう間御主人様達の噂はあちこちで聞きました。『金色の太陽』のような二つ名もです。

当然のことながら、それと同時に御主人様たちの名前も広まっています。

ですが、それが厄介なことになりそう……いえ、今後確実に問題になってくるんです。」

「それは？」

「孫、という姓か」

「そうなんです。

悟空さんの姓は孫。私たちや邑の皆さんは、既に悟空さんが孫姓を持つ方々とは何も関わりが無いことを知っています。

ですが、噂でしか悟空さんのことを聞いたことのない人々からすれば……」

「いずれかの孫家の人間と勘違いする輩が出て来ると？」

「勘違いだけで済むならそれで良かったのです。

民の耳に入るということは上役……つまり、他の孫家の方々の耳にも届くということです。

王朝の権威が薄れて力が弱まっているこの間に名を上げようと躍起になっていますので、何かしらの動きはあるでしょう。

特に江南に位置する孫家には注意が必要になってくると思います。

あそこは先々代の当主である孫堅さんを戦で亡くし一時的に衰退。孫堅さんの遺志を継ぎ、先代の孫策さんが孫呉復興と天下統一を悲願として立ち上がるも、志半ばで倒れてしまいました。そして現当主である孫権さんは先代先々代の遺志を汲み、孫呉復興を目指しています。

善政を敷き、治安もそこそ良くて民からの信頼の厚い方々です。先々代から仕えている武将や兵士も数多く、それぞれが皆孫呉に忠誠を誓っています。

彼らは『孫呉』であることに誇りをもち、また『孫』の名は信仰の対象でもあり、孫呉復興に尽力する孫権さんを強く支持しています。

いくつか黄巾党殲滅の報も聞いていますから、恐らく此度の乱を復興への足掛かりにしようとしているんだと思います。

そんなところへ新たに『孫』の姓を持った天の御遣いなんて噂が届いたらどうなると思いますか？」

「…………… 良い気持ちにはならんだろうな。孫の姓を語る者が増え、更には天の御遣いとして名を馳せているのだからな。

我らに比べ、自分たちの名がかすれてしまふ、と危惧する者くらいは出てくる…………… か。」

「もちろん、流れてくる噂は良いものばかりですので、悟空さんの民衆からの人気は高いです。

各地の村や街でもそれは健在でしたので、それらを加味しても今すぐこちらに対して圧力などをかけてきたりなどはないと思われます。

なので、こちらから先手を打とうと思います！」

「先手って…何をするんだ？」

「はい、それはですね

孫呉と同盟を結んじゃうんです！」

『はあ？』

孫呉 side

王城のとある一室で、ある事柄について会議が行われていた

「孫姓は我らにとって希望も同じ！

あの天の御遣いなどに孫の姓を持ってこれ以上名を上げられでもし
ようものなら、我が孫呉復興なぞ夢のまた夢！

早急に対策を練るべきだ！」

全ての文武官が集い、話し合っている内容

『天の御遣い・孫悟空』

「気持ちはわからぬでもないが……現実的に見て、やはり無謀では
ないかと思う」

「何を弱気なことを言っているのだ！」

上座にはまだ幼さが残り、しかし王としての凜とした雰囲気を纏わせた少女が。

その傍らには主君に忠誠を誓い、生涯守り通すと心に決めた忠臣と、先代から孫呉の要として仕えてきた指折りの軍師が2人。隣には孫呉の次代を担う弓腰姫が座っている。

「噂の一つや二つ、お主も聞いているはずだ。噂には得てして尾ひれが着くものと心得てはいるが………流れてくる噂のことごとくが物語のような英雄譚であれば頭を痛めようというものよ。」

「それがなんだと言うのだ！
このまま指をくわえて静観している余裕なぞ今の我が国にはない！
もう日和見ではいられないのだ！
たとい攻め込む結果になったとしても、我々に負けは無し！
孫権殿！どうかご采配を！！」

「貴様！口が過ぎるぞ！！」

既に三回を数えるこの会議も当主孫権の意向もあり平行線を辿っていた

「……話に聞く限りでは、その者は自ら孫家を名乗った訳ではないのだろう？」

それに姓は孫かもしれないが、名が悟空で字は無いとも聞いている。

偽って孫姓を名乗るにしても……もう少しまともな名前を考えてくるだろうよ。

「

「し、しかし!？」

「それに、もう1人の御遣いの噂もある。

良政を敷き、気さくで太守らしくない太守として、その邑や周辺の民からの人気も高いらしい。人気については孫悟空も負けず劣らず。

「

「聞くところによりますれば、摩訶不思議な道術にて様々な交易品を取り扱っているとか。」

孫権の言葉に軍師

周瑜が補足を入れる。

「まぐろ、でしたっけ？海という水たまりにいるお魚さんらしいですね。とーっても美味しくって、お酒との相性もバッチリだそうですね。一度食べてみたいですねえ。」

「はーいっ！それ賛成！シャオも食べてみたいな」

周瑜の言にもう1人の軍師

陸遜と弓腰姫こと孫尚香が反応を示す

「……………」

王の傍らに居る少女は、無表情を装いつつ若干の苛立ちを含みながら会議を見守っていた

「今現在、特にこちらに損害が無い以上手出しは無用だ。これで終わりとする、各自迅速に持ち場に戻るように。」

会議などするだけ無駄だ、と口には出さず内心ぼやきながら孫呉の王は足早に退室するのであった。

「孫権様！お待ちください！まだお話は途中で……っ！？」

空席となった上座の傍らに立っていた少女が初めて動きを見せる

チャキ…

「迅速にとのお達しだ。疾く戻れ」

「ぎ、御意にございます……甘寧將軍」

喉元に向けられた剣と自身に刺さる僅かに殺気を含んだ視線を受けた武官の1人は早々に立ち去って行き、それに続くように他の面々も居なくなり部屋には甘寧1人となった

「北郷一刀………孫悟空………」

ポツリと忌々しげに呟いた言葉は誰に聞かれるでもなく虚空に消え去るのであった

玉座の間

孫権 side

玉座について溜め息を一つ

「はぁ……………」

天の御遣いについての会議があつた。もう三回目だ。

母様と姉様の理想を受け継ぐと決め、孫呉復興を掲げてはや一年

未だ未熟な私が玉座に孫呉の王として座ってられるのは、偏ひとえに優秀な家臣達のお陰だ。

母様の代からの古株も居れば、姉様の伝手でここに来た者、孫呉に仕えるのを誉れとして仕官してきた者…………

皆一様に孫呉を愛しているが故の日々の粉骨砕身ぶりに、私は頭が上がない。

ところが先日、天の御遣いが現れたという報告が入ってから孫呉は少々変わった。

御遣いの名を聞くやいなや激怒して攻め入らんと進言する者たちが
出始めたのだ。

当初は私も良い感情は持つて居なかったが、我が『孫家』の成り立ちもあまり気持ちの良いものではないということを考えれば可愛いものだと思えた。

それに各地に孫姓を持つものはポツポツ存在している。
今更一人増えたところで、という気持ちの方が強かった。

古参の将兵はもとより、情操教育の一環として新参の者たちにも孫呉がどういったものを理解させる指導を行ってきた。

軍師を頭に置いて、経験豊富な文武官を揃えさせた。教育については、水鏡塾に一抹の遜色もないと胸を張って言える水準だった。

みんな解っている筈だった……

なのに、今現在我が陣営の人間は、皆一様に理不尽で一方的な憤怒と嫌悪を面に出している。

何かおかしいと感じてはいるものの、各人はそれ以外の、いわゆる日常では何ら変わった様子がないのだ。

初めは小さい火種であったが、時を重ねるにつれて火種はその身から煙を吐き出すようになる。

だんだんと過激になっていく一部の文武官に対して抱き始めていた

疑心と不安の煙がプスプスと音を立てて上りはじめるのであった

……カツカツカツ

「蓮華様、周瑜です。少々お話が…」

「入ってよい」

間に訪れたのは姉様の親友にして孫呉最高の軍師だった

ガチャッ

「失礼します」

「……皆揃ってどうした」

どうやら周瑜だけではなく、呉の主要とも言える武将達も一緒のようだ

「最初に言っておくが、私は不干涉の方針だ」

周瑜の言わんとしていることは何となくだが分かる。
このままでは威厳に関わります、などと言って結局は姉様の最終目標であった天下統一への道を進まんとするのだらう。

私としてその気持ち分からない訳ではないが、正直なところ天下統一にはあまり興味がない。

無論守るべきものは守るし、必要とあらば戦もしよう。

だが、自らの道を邁進するために他者を踏みつけてまで行おうとは思わない。

民の平穏を守ることこそが第一だ。

「いえ、お話があるのは私ではなく尚香様と隠からだそうで……」

「なに？」

先ほどの会議もあつたせいで真面目な話と構えていた分、ちょっと肩透かしを喰らった気分だ

「あのねーお姉様！」

「……なんだ小蓮」

元気な声で話しかけてくる妹に呆れを含んだ声で返事を返してしまふのは、決して私の落ち度ではないと思いたい。

「シャオ、幽州の天の御遣いのところに行きたいなー」

「私も一緒に行つて小蓮様の面倒を見させていただきますのでご許可を思ひましてえー」

……この2人が何を言っているのかイマイチよく分からない

「2人とも何を言っているの？」

「ですからあゝ幽州の御遣い様の元へ……」

「なんでそうなるの！」

「さつきも言っただじゃない。シャオね、まぐろっていうの食べてみたいし、天の御遣いの2人にも会ってみたって思ったの」

「今まで何を聞いていたのだ！ただでさえ過激派の動きが不穏な時に火に油を注ぐようなことをしてどうするつもりだ！！」

表立つての動きはまだ見られないものの、火種は常に燦っているのだ。小蓮の動きに乗じて行動を起こすかもしれない。そんなとき……対応しきれ自信が……ない

「そんなに悪くない提案だと思っんですけどお……」

「……………。なぜだ」

「小蓮様を使者として接触させて孫悟空が我が孫家の人間であると

こちらが吹聴すればいいんですよ。

色々と手間はかかりますけど最終的に孫悟空を、ひいてはあちらの軍全てを孫呉に引き込むことができますよ。

孫家の人間が直接向かうことで周りの諸侯の皆さんも同姓同士が纏まった程度にしか思わないでしょうしね。相手方も強くは出られないでしょう。

客人として訪れている以上身の安全は確保しなければなりませんし、ましてや人質として捕らえようとは思わないでしょうねえ。まだ小規模な内に先手を打っておいた方が良くと思うんです。

ちなみに小規模というのは彼らと私たち身内の過激派の派閥のことですよ。」

驚いた……

小蓮と仲が良いから軽い気持ちで進言してきたのかと思ったら、ちゃんと見通しを持って考えられたものではないか

小蓮自身が理解しているかは定かではないが、これが上手く進めば戦わずして領地拡大に人材の確保もできる

正に一石二鳥

血を流さずに得られる平和

少々卑怯な気もするが、彼の軍は勢いを増すばかり。停滞気味の我が軍とは違い上り調子だ。

統制も満足に舵取りが出来ていないという醜態を晒している始末。
今の内に芽を摘むのも致し方ないか……？

まあ同族として困ってしまう以上いずれ我が軍に組み込むことになるのだろうが……

その都度考えることにしよう。

「……………わかった、許可を出す。」

3日後親書を持ち幽州へと向かい見事成功させてくるように。」

『はあゝい / わかりましたあゝ』

ボタン

一様の挨拶を交わして2人が退出していった。

「蓮華様……」

「ん、なんだ興覇？」

今まで沈黙していた甘寧が話しかけてきた

「よろしかったのですか？」

「……隠は、隠なりに孫呉の未来を考えてくれているのだろう。ついでにこの騒ぎの結末もついてくれば、とな。」

隠はあれでしつかりしたところもある。心配することはないだろう。

「

「そうですか……」

「大丈夫だ。例え何かしら抵抗があっても兵を減らす替わりに奴らの評判が落ちるだけ。」

失うものはあちらの方が大きい。

しかし、万が一のこともある。

興覇、お前の隊から何名か護衛に廻せ」

「御意」

ふう……

なんだか心が休まる暇がないわね……

「どうか……無事に済んでくれ」

まだ周瑜が残っているのも忘れて3日後に発つ2人の安全を祈り呟くのであった…

「（呉は……。雪蓮、あなたの夢見た世界はまだ遠いところにあるのね……）」

孫権 side end

出立が翌日と迫ったその日、事態は孫呉の計画を裏切る形で迎えていた。

「先手、打たれちゃいましたねえ」

「……あちらにも頭の切れる軍師がいるようですね」

「ぶうー！シャオ行きたかったのにいー！！」

一刻ほど前、江綾の孫権たちの居る邑に天の御遣い一行が現れた、との報告が入った

一行である。人数は3名。

護衛の部隊も連れずに、と憤りを隠さない士官達を鎮めながら御遣い一行を案内させ、その顔ぶれを確認した面々は驚きを半分に、もう半分を自身の納得に費やした。

天の御遣い一行

北郷一刀

現当主であり天の御遣いとしての知識を奮い、独自の政策により邑の発展に大きく貢献している人物。非常に温厚な性格で民からの信頼も厚い。

諸葛亮 孔明

先日新しく入ったという軍部初の軍師。既にメキメキと頭角を現しており、荒削りな主君の政策をこの孔明が再考後に施行。そのことごとくが見事に溶け込んでいる。
関羽に代わる新しい頭脳

孫悟空

件の人物でもう1人の天の御遣い。
彼がひとたび腕を振れば人が吹き飛び、その健脚で凧げば人は霞のごとく四散する。

届く噂は全てが一級品

性格も明るくサバサバしており、とっつきやすく北郷一刀同様人気も高い。

確かに武の体現者とも称される彼が居るのなら3人という人数も納得、むしろ護衛の兵は邪魔になる、と大体の人間は思った

人選を終えて進む方角を確認した後すぐに悟空が2人を脇に抱えて飛んでいってしまったので護衛部隊を準備する暇がなかったただけなのだが……

しかし、各人が驚いた要因はそれだけではない。風圧により乱れた容姿と、今現在悟空が背中に背負っている巨大な氷付けの魚らしき塊が戸惑いと驚愕を運んできたのだ。

前者は言わずもがな、後者は金ト雲で運んだのを下ろしてきたものだ。

一応、お土産兼献上品という名目ではあるが、食べ物で釣ろうというあたりが流石だ。

ドスンと巨塊を隅に置いて3人は上座に座る孫権の前へと進み膝をついた

「事前の連絡もなく突然の訪問に迅速に対応していただいたこと、まず感謝申し上げます。

私は姓は諸葛、名は亮、字を孔明と申すものにございます。」

「私がこの現主君の孫仲謀だ。」

そなた達の噂は今や大陸全土に広まっている。我が邑や宮廷内でも毎日のように流れている。

特に後ろの2人……貴様らが天の御遣いだな？」

「は、はい。姓が北郷、名前が一刀で字はありません」

「オラが孫悟空だ、よろしくな！」

悟空が名乗った一瞬、孫権の顔が険しくなるがすぐに元に戻った

それからしばらく社交辞令として他愛のない会話がなされたが孫権が本題について切り出してきた

「世間話はこの辺りとして、此度はいかなる目的でこの地を訪れたのかを申してみよ。」

孫権自身、大方の予想はついており、実際その通りなのだが、幾ばくかの可能性を諦めきれずに質疑したのだ

「率直に申し上げますと、私たちと同盟の義を結んで頂きたいのです」

諸葛亮が言い終えたと同時にその場が騒然となる

生意気な！

いまだ国も持たない成り上がりめ

身の程をわきまえろ！

燻製美味しかったですっ

悪口雑言9割賞賛1割で浴びせられる各人からの反応

この反応自体予想していたのか3人は微動だにせず、ただ孫権を見つめていた

孫権も視線を返しながら内心毒づいていた

先の先を取られたか……

若干の間を置いてから返事はあっさりと帰ってきた

「わかった。同盟の申し出、条件付きでならば結ばつ。」

『な!?!』

その場にいた人間の心が一つになった

ある者は驚嘆から

ある者は呆れから

ある者は憤怒から

ある者は喜びから

そして一同は、孫権の提示した条件を聞きまた驚くことになる。

「はわわ、そ、その条件とはいっただい……?」

「1つ、互いに細作を送らないこと。

2つ、同盟中は互いの発展のために必要に応じて情報を公開し合うこと。

3つ、いかなる時も互いの立場を尊重し合い、励むこと。

4つ、この条件は必要に応じて話し合い改訂する。

以上だ。」

「それだけ……ですか?」

「ああ。細かい案件についてはこれから話し合うことにする。
部屋に案内させよう。今夜は我が城でゆっくりしていくといい。」

「あ、ありがとうございます！あうう……」

あれよあれよと言う間に、条件付きで仮ではあるが同盟締結まで終わってしまった

その後、自分たちの意見など聞かれるまでもなく事が済んでしまった様子に、怒り心頭の孫呉の名も無きモブ士官達を甘寧が睨みつけて黙らせたり、

擬似的に同盟を結び、自らの欲を満たせる、と狂喜乱舞で御遣い2人に突進していく孫呉の姫と次代の軍師を諫めたり……

孫呉と御遣いの夜はやかましく更けていくのであったとさ。

??? side

この外史はいささか異分子の影響が強く出てしまつようですね

本来なら既に仕留められているはずでしたが……

やはり肉を増やした程度では無理がありましたか

今回の件にしても詰めが甘かったようです

しばらく使っていなかったのでサビついてしまったようです

久々に瞑想するのも良いかもしれません

………そういえば彼の方は上手く行つてるのでしょうか？

まあ心配するだけ無駄かもしれませんが

さて、少々予定が狂いますが、私も仕込みを始めなければなりませんね

この外史を終端へと導くための仕込みを、ね……

??? side end

同盟締結の宴（小）

「そうか！マグロ食うのは初めてかぁ！
どおだ？うめえか？」

「もう最っ高ー」

小蓮ちゃんの弾ける笑顔

いえいえ、君の方が最高です

「はぁあゝ…脂身なのにアッサリしてて、それでいて後を引くこの
味わい深さ……幸せですうゝ」

隠も発情一歩手前

「どんどん食ってくれなあ？足りなくなったらまた追加してやっかんな！」

はい、と返事の大合唱を聞き流しつつ周りを見渡す

「これを長期保存できるように調理したものを交易品として取引したいのですが……」

「ふむ……ではこちらは衣服とその裁縫技術、後は酒でも送ろう」

「ではあそこを……」

「こちらをああして……」

名軍師のお二人は貿易に関する難しいお話の真っ最中

ぶっちゃけまったく頭に入りませんな

あ、同盟の信頼の証として真名をもらいました

なんて言うか真名ってそんなに軽いもんだっただけか？

斬られてもおかしくないとか言って大事にしてる割にはポコポコ預けてる気がする

ま、本人たちが納得してるならいいか

一刀君は当主同士で顔を突き合わせてお話中

流石主人公。そこそ良い空気になっているではないか！

蓮華の後ろで一刀君を睨みつけている思春さんがいなければ、
なんだけどね

まあともあれ、各人各様にこの小さな宴を楽しんでいるならそれで
いいのかね？

謀略なんて今の頭じゃよくわからんし、なんとかなるし、してみせ
るさ

「悟空さ〜ん！この`あんきも`って言うの追加してほしいですう
」

「よっしゃ！ちょっと待っててくれな！」

ちょっとひとつ飛びしてきますか

ストックしなかったなので深海まで……………

「牛歩な歯車」(後書き)

碌に見直しもしてないや

後々加筆修正します

「今日も良い転機？」（前書き）

さて、言い訳は後書きでしょうか。

とりあえず遅れてごめんなさい。

またあまり内容的に進みません、急ごしらえなので所々おかしいところがあると思いますが、それでも良いという方はどうぞ。

「今日も良い転機？」

一刀君たちや文武官に新しい軍事訓練の案を提示して『そこまで暇じゃねえんだよ働けゴルア』と返されたり、追尾型気弾の練習と言つて憂さ晴らしに一刀君で実験したり、新店舗調査として一刀君の財布を空っぽにしたり、亀仙流？拳法伝授のために一刀君をボロボロにしたり……と、呉との交流諸々含めて比較的平和な日々を送っていたとある日のことである。

賊が出たと報告を受け、パツと行ってサツと終わらせていざ戻ろうかと準備をしていた時、この時代の人間と比べて桁外れにも程があるようなデカい気が動いたのを感じた

「んー？」

「……？どうなされたのですか？」

「ん？ああ、なんかあつちにでけえ気があつてさ」

「この方角は………西北、でしょうか？」

方向で言えば今の俺から左前

「西涼の方角ですね。そちらには確か都の洛陽があつたはずです」

「洛陽って言つたらシ水関と虎牢関が近くにあつたな」

…………… ああ、そうか！

洛陽と言えは董卓ではないか！

そして董卓軍と言えは飛將軍呂布

つまりあのデカイ気は呂布って訳だ

そーかそーか

「ッ！」

うおおー！白装束のこと忘れてたー！

「みんな、わりい！オラちよつと用事出来ちまつた！
ちゅー訳で行ってくる！」

「え？用事……ええっ！？ちょっと待って下さい！悟空さんにはまだお仕事が……はわわ、行っちゃいましたあ」

朱里の声はバツチリ聞こえたが今回……はこっちが優先だ

すっかり忘れてました反董卓連合イベント。

各地の諸侯が集うイベントでもあるので、会議の際に各諸侯の気を覚えておくのも良いかなー？とは思っただけど……

うちはある意味戦力過多気味なのでいきなり攻めてこられても大丈夫だろうし？

細作も放ってくれるだろうからいらねえな、と。

という訳で金ピカ鎧さん達とのエンカウントはまた次回ってことで

うる覚えではあるが、原作で呂布が名を一気に広める切っ掛けになったのは、確か黄巾党の大軍勢数万をたった1部隊、それもほとんど1人で退けたからだった気がする。

というかさつき感じた気の動きがそれだと思う、多分、恐らく、きつと。

「……しっかし3万なんて量じゃねえぞ、こりゃあ」

先ほど感じた分だと、呂布の部隊と思われる三百ちよつとの塊と対峙しているソレの数が異常なまでに多い。

軽く10は超えてるんじゃないだろうか？原作の三倍ってそりゃあんた……流石に無理でしょうよ

てなワケで援護しに来たんだが、気同士の衝突から少々時間をおいてしまったので既に現場は混戦一色となっている。

数の差が酷く目に付く……

その中で一際目立っているのが1人。

極悪なまでの数の敵中に単身突っ込み縦横無尽に敵を吹き飛ばすのが見える。

きっとあれが呂布だな。ホントに一騎当千してやがる……。

気を使えるようになった愛紗や鈴々でも届かないだろう。マジですげえ奴だ。

つと、

数が圧倒的な分、黄巾勢のほう有利か………というか黄巾だよな？。

あれ？ほとんど白い？

まあ大方白いのが黄色いのに加勢したんだろうが……

さつきから生きて捕らえろ、と叫んでいるのを見ると目的は捕縛かなんでそんなことするんだ？さっぱりわからん。脅迫材料か？なら君主を狙うはずだよな。部下と民を人質にして言うことを聞かせるとかならわからんでもないが……。どっちもどっちな気がするし、

左慈たちの最終的な目標は外史を閉じることだったはずだから、その過程についてはあんまり関係……なくもないかもしれんが、とにかく今は無い、は、ず

「ぬおおおお………」

五秒も考えてないのに頭がオーバヒートオオオッ!!

両極端なスペックしやがってこんちくしょー!!!!

考えたって分からない! 白いの捕まえて尋問したってどうせ自決して話なんか欠片も聞けねえだろ!

「ならばいつそ、目の前の! 奴らの悲願ぶっ飛ばし、防いでみせるぜ乙女の涙あ!

俺を、誰だと「悪を滅せよ!」…思ってなにいつ!?

クッ

ネタの1つにも走らせてもらえんのか!?

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ……

「だっしやあ!!!!」

俺に的を合わせた矢を打ち落としていく

「下の賊じゃないやつ！そうだオメエらだ！！この辺吹き飛ばすからさっさと退がれえ！はい撤退開始！！！！」

聞こえたかどうかは知らんが兎に角合図としてヤンキーに変身。

流石に呂布直属の部隊だけあってか撤退はそこそスムーズに行える様子、なんだけど混戦だったこともあり敵に囲まれて脱出出来なかった兵士が数十人ほどやられてしまった。

なぜ助けなかったのかって？

あんなに接敵してて間に合うかよ！クソ！

地上に降り立って殿^{しんがり}つばいことしつつ撤退の援護を続行する。

「……………お前、何者？」

む？

この部隊の真の殿は呂布隊長自ら…………って当然か、いっちゃん強いもんな。

「詳しい話は後だ！とにかくこいつら片付けっぞ！？」

説得。

「……………（ジー）」

警戒をやめてくれない。

こつちを睨みながら全方位の敵を吹き飛ばし続けるなんて器用な……流石この世界に認められたチートガール。やることがいちいち人外だっちゃわいや！

シュパパパパパッ！

しかし人外と言うのであればこのワタクシ（の半分くらい）こそ筆頭でありまして。つかサイヤ人で宇宙人で憑依者だし。

ついでに言うなら死んでるし？

まあまあそんな訳で俺も顔を明後日の方向に向けたままガシガシ倒しまくっているのです！

「ちっ、仕方ねえ……！目え閉じてろ！！」

「……………？」

敵は減らないし呂布は警戒したまんまなので強硬手段にでようと思いません。最初からやれば良かった……

ギューンと気弾を撒き散らしながら20メートルほど上昇、敵さんを一望できる位置まで。みんなこつちに注目してるな？

太陽を背にして両手を額の前に持ってきて……………

日輪の力を借りて、今必殺の！

「太陽 拳ええん！！！！！！」

カッッ！！！！！！

太陽拳でございます。

言葉と同時に広範囲に渡って激しい閃光が放たれる。

よし、今の内に呂布と一緒に……

「……………（フルフル）」

うひー！？喰らってらっしゃるううう！？

いや、そこはもっと、ねえ？

いくら俺の言葉が信用できないと言っても直感と言うか、第六感とか野生の勘とか、スピリチュアル的な要素で回避するものじゃない？

ギャグ補正で相手が弱体化するパターンは王道っちゃ王道だけどもこの場面で発揮とか無いわー……。

いや、つらつら考えてはいるけどちゃんとやることやってますよ？

とりあえず太陽拳喰らって目をゴシゴシしながら右往左往する呂布ちゃんを回収。方天画戟で一般人なら重傷確実な威力で何度か叩かれたけどそこらへんはスルー。空飛んだら大人しくなったわ。アニメとかだったら2頭身のデフォルメになってるんだろうなあ、かわいい。

呂布ちゃんを脇に抱えて、後退させた部隊を追い掛けつつクラスター気弾を奴らにご馳走。

ズガガガガガガガ！

倒れた人間につまずいて逆ドミノ倒しが発生。これで大幅に速度は削れたな、数は全然減ってないけど……っと。

「ちーっと待っててくれな」

「……………？」

空飛び始めてから大人しくなった呂布ちゃんを一旦降ろして……はい、急所目掛けて連撃が来ました。とりあえず適当に凌ぎつつ10メートルほど浮かんで迫り来る数万の軍団を見据える。

てか多いなあおい。

残り8万ってところか……？

よく持ったもんだな、さてはてどうやって片付けたもんか。

幸い、というか俺がそうさせたんだけど、今はもうあっちには敵さんしか居ないので特に後込みする必要はないかな？

ノーマルでも良かったんだけどノリで変身しちゃったからなあ、ネタ技にでも走ろうか？

「ネタ技で倒されるなんて、あいつらからしたらたまったもんじゃないな、やめとくか。」

散々やつといて今更だけど割り切るっきゃないよね。こついうのは。

「一瞬だ。怨んでくれるな？」

いやいや無理があるだろう、とか内心想いつつ数キ口先の敵に狙いを付ける。

広域殲滅なんて本来のスタイルじゃないのに最近じゃ砲台にしか納めてないなあ……。

「通り名どおり、太陽をお目にかけようか。」

作り出したるは元氣玉（偽）。

見た目重視の巨大な球だがもちろん威力もある。

昼間に太陽がもう1つできたような奇妙な感覚が戦場を埋め尽くす。しかし前方の集団は止まらない。

俺は無言でソレを投げる。

混在する魂と精神の片隅で懐かしい光景が目に見え始める。ブウ編のラスト直前もこんな感じだったかな……相手が全然違っていた。

球の大きさは正にブウ編ラストのアレだ。あれが爆発したら地球なんてひとたまりもないだろうが、もちろんそれは折り込み済みで少々手を加えてある。

現に、ほら

『

』

気球（仮）が敵のド真ん中に着弾する、それはそれはとても静かに。音も無く気球（仮）の光だけが広がって遂に敵を覆い尽くした。

悲鳴も聞こえないあつという間の決着。

光が粒子となって消え去ると一気に視界が良くなった。

『ッ！』

眼前に広がる惨状に後ろから息を呑む音が聞こえる。

今俺が眼下に見据えているのは、綺麗に半球状に削り取られた大地、半径だけでキロに届こうかというクレーターだ。

うつむ……期せずしてまた地図を変えてしまった。

これではいかんと頭を捻らせつつ呂布ちゃんの所へ戻ると、まだ皆さん放心したままだったので軽く気弾を破裂させて意識を戻させた。思ったより時間がかかってしまったので、お姫様達が白い変態共の餌食になってないか心配だ。早く行かないとな。

「……で、アンタが天の御遣いの片割れで、洛陽に不穏な気配を感じたから鎮めに来る途中で恋たちが苦戦してたから助けに入っておよそ8万もの敵を1人で倒した、と？」

「まあそんなとこだ」

「……………恋も、間違いないの？こいつに変なことされて、そ

れを楯に言わされてるだけなんじゃないの!？」

「……………（フルフル）……………恋、悟空に助けてもらった。」

「……………信じられない……………」

ここは洛陽居城 謁見の間。

あの光が結構遠くまで届いていたらしく、討伐に向かった方向から異常な光が見たので呂布ちゃんのことか心配になつて援軍を出すことになり、いざ出陣としたときにタイミングよく俺たちと鉢合わせになり、援軍としてきた張遼とあわや戦闘になるかといったところで呂布ちゃんが間に入って説得後、和解。
状況説明のため現在にいたる。

ちなみに意識を覚醒させた後、何故か呂布ちゃんド突き合いになりその結果仲良くなつて真名までいただきました。
曰く、『悟空強い、悟空いい匂い、悟空イイ人』

どんな匂いかと聞いてみればお父さんみたいな匂いだとか。
肉体年齢から考えたら若返つたのかな？嬉しいねえ。

とまあ青春ドラマみたいな展開で強引に仲良くなつたけど、本人はもうどうでもよいらしく【悟空と友達、仲間】という事実があれば良いんだと。

てなわけでフォローしてくれてるのだ。有り難や有り難や、なんま

いだぶなんまいだぶ。

謁見の間には董卓をはじめとして主だった将が全員揃っており、そして今俺はその視線を一身に受けている次第であるビクンビクン。

「いやー、ついに呂布ちゃんにも春がきたんやなーっ」

「春とはまた違うと思うのだが……まあそんなことはいい！。悟空とか言っただな！私と立ち会って噂が本物であると証明してみせろ！」

「よおっし、いつちょやるかぁー！」

「ちょっと！そんなことしてる場合じゃないでしょうがっ！」

「へう……」

愉快的奴らめ

これはマジで動かないといけねえな……

「噂で聞いたときは馬鹿馬鹿しいと思ったけど……今の話で更に信じられなくなっただわ。」

「でも、悟空さんは恋ちゃんも私たちのことも助けてくれたよ？」

「ううゝ……そうだけど……」

実は居城の門前に着いたとき、今居る謁見の間辺りから先ほど戦った白装束と同じ気を大量に感じとり、すぐ近くに2つの気を感じたので一か八かで2人のそばまで瞬間移動すると、ご都合主義よろしく白装束が2人を確保しようとしていたところだったのでコレを撃破。刺激の強いものを見せるわけにはいかないので白装束は全員昏倒に留めておいた。

とまあそんなことがあったので余り警戒せずお話を聞いてもらうことができたのだ。

閑話休題

「あんたの感じた不穏な気配とやらがあの白装束たちでいいのね？」

「ああ。なんて言うか、あいつらみんな同じ気なんだ。」

「はいはい！ 氣いつてなに？」

「うむ、それは私も氣になるな。」

「氣つてのは……うん………そいつの気配うちゅうか力の強さの証うちゅうか……。まあそんなもんだ！ ハハッ。」

「……な〜んやそれ。」

「まあ大体言いたいことは分かったわ。」

「そうか！つまりそやつが強ければ強いほど気とやらは大きいのだな！？」

「アホ、それぐらい誰でも分かるわ！同じ事繰り返して言うてどーすんのや！！」

「むつ。アホとはなんだアホとはあ！物事を反芻して覚えるというのは大事なことだぞ！」

「普段からそれくらい頭回してくれとつたら楽なんやけどなあ。」
（笑）

「それでは私は普段頭を使っていないみたいではないか！」

「その通りや！よおわかったなあ偉い偉い」

「ぬくく……貴様、私とやる気かあ！」

「受けて立つで！」

「「うぬぬぬぬ………」」

「……あの2人は放っておいて話を進めましょう」

「お、おう。」

ある意味予想通りの性格だったけど魏のアホっ娘とキャラ被ってるよね、これ。」

「あ」

「?どうしたの?」

気に関する基本的な話をした後、一旦休憩をいれている時に気づいた。

「問題解決出来そうな奴が洛陽にいる。」

「「「「はあ?」「」「」

「.....?」

そっだよ、洛陽にはピンク紐パンのムキムキ変態野郎がいるじゃないか。

名前は、貂蝉。

左慈と同じ立場にありながら対極に近い考えを持ち、外史に生きる人々を見守ろうとする変態ハト派の1人。

原作では外史の大元に触れない程度に、度々一刀君達に助言をしていた変態だ。

「そんなやつが洛陽にいたとして……、あの白装束への決定的な対抗策になるの？」

「うう」

そう言われると厳しいものがあるかもしれない。

左慈にしても干吉にしても容赦なく襲いかかっていた（戦闘的な意味で）し、白装束やその他も然り、牽制にはならないか。交渉も無駄。

というか今思い出したけど、原作で変態が外史云々について説明したのって結構ラストの部分だったな。

反董卓連合の一件でも『あたしはしがな踊り子よん』とか何とか言っではぐらかしてたし……。

情報も貰えないか。

あれ？なんか役に立たねえ。

うーむこれはマズいか？

いいや待てよ？

今までのこちら側の有利だった点は、
憑依者である俺が原作知識を所有し尚且つ憑依先が人外なので大抵の障害はスルーできるところにあった。

しかし現在、主に俺のせいで原作乖離を始めてしまったので原作知識が通用しなくなってしまうている…… んだけど、

原作と離れ始めたと言っても、対象の気さえ感じとればちょよっつと行つてパパッと解決できるはずだから、実はそんなに困つて無かつたり？

「というかなんでそんな奴が洛陽に居るなんて知ってるのよ？」

「そりゃあついさっきそいつの気を探つてだな」

「あんたなんでそれ使つてあいつらの親玉の居場所探つたりしないのよ！」

「その手があつたかあ！」

俺が『変態が洛陽に居る』と確信した要因は原作知識を参考にしたというのもあるのだが、白装束の気に類似したモノを感じたからでもある。

白装束の元が何かは知らないが

『増』の一言で増やせるということから恐らく式神の類なのだろう。うる覚えの知識からすれば式神を作成し操るには、自身の何かしらを媒体なりにして行ふはず。仮にも仙人である左慈らが使えないはずがない。

毛髪、血、爪、魔力、仙術、なんでもいい。

自身の一部を使用している以上、必然的に式神から発せられる気配というものは本人の劣化板になる訳だ。実際にはこんな単純な話ではないのだろうが……今は置いておこう。

もしあの変態が左慈と元を同じとするなら、彼らの所謂根源いわゆるというのは一緒だと思ったのだ。ということは気も似ているものになる、ならば逆探知のごとく白装束に似た気を探っていけば変態を見つけることが出来るとふんだので実行したところ、洛陽内で見事ヒット。反応は1つ。間違いなく変態です。なんたって気が歪みまくってるからな！

で

「ここ以外からは何も感じねえ。多分気を抑えてるんだと思う。」

探してはみたんだけど結局わからなかった。
随分と隠蔽が上手らしい。

「……とにかく今は少しでも情報が欲しいわ。洛陽にいる奴だけでも連れて来られそうなら連れてきてちょうだい。」

「わかった。でもその前に一回帰ってもいいかな？
何か決めるにしたってオラ1人で決める訳にもいかねえしな。それによ、」

「……………（コクッ）」

「私も付き合おう。」

「アンタたち揃いも揃って……ああーもう、なんで此処には自分勝手な人間しか居ないのよー。」

とりあえずわかったけど、アンタの本拠地って幽州でしょう？
今から戻ったら馬をつぶすつもりで走っても最低2日以上かかるわよ？

アンタが一体どれくらいの速さで飛べるのか知らないけど、流石に鳥や馬より速いなんてことないでしょう。

部屋は用意させるから泊まっていけば良いじゃない。」

ああそっか。俺が瞬間移動出来るの知らないんだっけ。

というか賈馱さんや、俺は幽州付近から西涼近郊まで日が暮れる前に到着したんですぜい？

仮にも現董卓随一の軍師ならそれがどういことかわかると思うんだが……

一応情報整理の時に話したんだけど忘れちゃったのかな？

「空」

「ん？」

「空、飛んでく？」

キラッキラな視線が痛いっす。

「いや、瞬間いど」「空飛ばないの?」「うっ……」

「……………」

「……………」

「なんで空飛んで欲しいんだ?」

「……………恋、乗る。」

そうきたかー!!!!!!

「別に飛ぶのはいいんだけどよ、オラ帰るしオメエ飯食いに行くんだろ?」

「……………一緒。」

「はい?」

「悟空、恋たちと一緒にご飯食べに行く。」

……ああ、そういえばこんな人だったね。うん。

というか俺に乗って食べに行きたいって、俺はタクシーかよ。

「今日はちいーつと都合が悪いかなー。」

明日また来るからそんなときにしてくんねえか?。」

主だった将、ウチのと同盟相手である呉の連中を何人か連れて行くつもりなので色々と準備がいるし、なによりその会議の後に起こると思われる宴のための材料とかを提供せねば。

恋ちゃんだけならまだしも俺も居るし?

救済策ってことで。

「明日来る、ってアンタ以外どうやって来るって言っのよ!。」

「……………」

「頼む。この通りっ!。」

「ちょっと!無視してんじやなっむがっ!?。」

「はいはい静かにしてよおなー。」

賈馱の声は聞こえてはいたんだけど、めんどくさそうだったので放置。

そして恋ちゃんは

「……………わかった。でも、明日。絶対来る。」

はい言質とつた！

愛紗達の気は……っとみつけた！！

「わりいになってことでまた明日、じゃあな！」

しかし俺は大事な説明をすることを忘れていた。

「は？」

ピシュ ……ン

瞬間移動のことと、それがどういったものであるかを。

『消えたー！？！？！？！？』

だがそこは猛将揃いの董卓軍。

「……………空、飛ばなかった。」

飛將軍は見るのも好きなようで

「ま、また聞かなきゃいけないことが増えたわ……。」「

軍師は頭を抱え

「ほえー、あれも気づちゅうんでやったんやろか？
ウチも使ってみたいな。」

神速の槍遣いはフラグを建て

「……………」

猪は1人呆けて

「へう……………今回私空気でした。」

君主はメタ発言を繰り出す。

そんなやり取りをしてたらいいなあ、と1人空に登り夕陽を眺める
のであったとさ。

なぜ一刀君たちが一緒じゃないかって？

一刀君の部屋から一刀君と愛紗の気を感じたからだよ！

つまりはまあ、そういつと。

気でわかるのも問題ありだなあとか逃避しつつも……………いや、今はいいか。

というか俺長考してもオーバーヒート起こしてねえな。

あれか、慣れか。

復帰した華雄の一言

「なあ、今更だが悟空の頭の上にあった輪っかは一体なんなのだ？」

「「「あ「「「

「……………?」

「今日も良い転機？」（後書き）

小説執筆してた

携帯の電池パックが謎の爆発

携帯壊れる

手火傷する

調子こいてメモ張にストックしてたのでおじゃん

結果：代替機よりお送り致します

リアルでの忙しさと相まって中々投稿できませんでした。

代替機打ちにくいし火傷痛いのでまたしばらく間が空くかもしれない。が、ひと月は掛かり過ぎなので、そこを反省点としつつ頑張りたいと思います。

「連合阻止、変態、洛陽にて」(前書き)

作者失踪？

しませんよ。

「連合阻止、変態、洛陽にて」

反董卓連合を阻止すべく動き始めた訳だが、ぶっちゃけやることは
1つ

白装束……ひいては左慈&干吉の動きを真っ向から潰すこと。

十なんとかっていうやつらが居たような気がしなくてもないが、既に何者かにやられていたという報告が入ったのでまあいいだろ。

んで

現在、肝心な例の2人の動向の手掛かりになりそうな重要参考人として三つ編みマツチヨにお話を伺おうかと、各代表とお付きの軍師が集まっているのであるが

「なんなのおなんなのよう！ワタシが一体なにしたあつて言つのよ
う？」

ああ！そーうなのねみんなで寄ってたかってアチシを そうつての
ねえん？

いーやああーおーたーすーけえー！！！！」

クネッ

『うつうつ……』

うゝむ皆さん顔色が悪いですなあ。

ちなみにこの場に居るのは、

北郷軍から一刀君、朱里、鈴々

呉から蓮華、冥琳、思春。

董卓軍からは原作キャラ全員が参加。

ちなみついでに既に真名交換は済ませております。もう真名の意義については何も言うまい……。

「……なんで悟空ちゃん、そんな普通にされてるん？」

確かに気持ち悪いんだけど、そこまで嫌悪感を感じないんだよね。

「助けて悟空ちゃんああああん!!!!!!!!!!!!!!」

ドグオツ！

「ふんぬうー！？」

近付いてこなければ。

「はわわわわ、壁の向こうに行ってしまいました……。大丈夫なんでしょうか！？」

「心配ねえだろ。」

ズゴン！

「ひどい！酷すぎるっわぁん！」

ほらねー

「見た目も中身も、正しく化け物だな……。」「

冥琳さん直球すぎます、果てしなく同意するけど。

「ちょっと悟空、なんなのよアイツは。こんなのが本当に役に立つの？」

それにあんな奴だなんて聞いてないわよ。」

賈馱さん、ジト目きついです。でも嫌じゃないです、はい。

しかし話が進まないので方向修正

「なあ変々……貂蟬？おめえホントになんもわからねえのか？」

「だあから言っただでしょう、私は只のしがなーい踊・り・子。洛陽にさく可憐で儂い一輪の花あ。」

結局同じ流れを2、3回繰り返した結果、白装束や左慈ひいては外史について語る気はないようだ。

俺が話すのもまた変な流れになるので、貂蟬に話せない理由でもあるのか、と、それとなく聞いてみると

『今はまだ時期じゃない』 そうだ。

時期ってきつとあれだな、原作で左慈たちが五台山？とか言う所で外史を閉じる準備をするあたりだよな。多分。

いやいや、なげーよ！

まだ蜀平定してねーよ！

更に言えば黄巾すら終わってねーよ！

むしろ終わらせてやる！

「あぁっとお、そうだったそうだった。

悟空ちゃん？2人つきりでお話したいことがあるからちよおおおつと来てちようだいなっ！」

グワシッ

「ん？あつ、ちよっ！？襟首掴むなっ！なにっ！？引きずるっつお
おおおおおおおおおおお……………」

はい、ベタな展開ご馳走です。
しかし嫌じゃなかったり？

ドップラー効果を残しながら去る俺を見送る皆さんは、何故か揃っ

て合掌していたとき。チャンチャン。

「って終わらせんなよ!」

「あら、誰に突っ込んでるのかしらん？」

コラ貂蟬、お前が【突っ込む】とか言うな。
卑猥に聞こえるだろうが。

「それはきつとアナタがそうしたいと無意識のうちに考えているから、なんじゃなあい？」

「お前と一緒にすんじゃねえよ。」

「口調」

は？

「口調変わってるけど大丈夫なの？」

「……別に。今なら周りに誰も居ないからな、お前なら元の口調でも大丈夫だろ。」

違和感バリバリだから直ぐ戻すけどね。

悟空の容姿に標準語とか似合わなさ過ぎるって、マジで。

「そう、アナタがそれで良いならアタシは何も言わないわん。
それじゃ本題に入るけど、予想はついてると思うけどこの外史についてよ。」

今更話すことなんてあるのかね？

「今更？いいえ、あなたはまだ、この外史がどういったモノなのか理解していない。」

「どういうことだ？

俺の知る外史とは……まあ俺が居る時点で違うのは分かってるけど、基本的には一緒なんじゃないのか？」

銅鏡割って ハーレム

みたいな。

「残念ながら違うのよ。この外史の起点はご主人様と左慈ちゃんではなく、

この外史の起点はあなたにあるの。」

起点とな？

「んんん？？？どついうこつちゃ？」

「悟空ちゃん、アナタ外史についてどこまで把握してるかしら？」

「一応始まりから終わりまでだな。細かいことは省くにしても、基本的な設定と「あーつとお！」か？」

「設定とか前提とか、それは私たちの存在を……外史に生ける人々を否定する言葉になるわ。だから出来るだけ使わないようにしてちようだい？」

「あ、ああ、悪かった。すまねえ。」

「あなたが一体どんな方法で情報を知り得たのかは、さして重要なことでは無いわ。それが役に立たないこともあなた自身がよく分かってるはず。」

「俺という存在自体がイレギュラーだから、か？」

「それも含めてとりあえずこの外史についてアナタに伝えておきたいことは全部で3つあるわ。」

1つ目、この外史の終焉はアナタの知る外史より早くに訪れる。

2つ目、この外史においてアナタはイレギュラーではない。

3つ目、今のアナタでは肉体の力を十分に発揮することができない。

「……………」

「……………」

な、何から質問してよいのやら。

なんだかんだで起点云々に関する疑問も解決してないし、どうしたもんかなあ。

「特に深く考える必要はないわ。というかアナタ考えるの苦手ですよ?」

はい、そのとおりです。主にスペック的な意味で。

「さっきの3つはどれも言葉通りの意味よ。
でもコレに関しては、アナタが知っているということが重要なの。」

「すまん、まったくもって意味不明なんだが。」

「私がアナタに知らせて、アナタ自身に認識させる。
まあ実のところ『知ったという事実』が欲しいだけなんだけれどもね。」

アナタがこの世界に来る前からこれは決まっていたことなの。

矛盾しているようだけど、矛盾していてこそその世界だから、こればかりは受け入れてもらうしかないわね。予定調和のほんの一部として、ね

とにかく私の用事はこれでお・し・ま・い。

もうこの話はお終い、質問等は受け付けませーん。」

なるほど、悟空脳のスペックを理解した上でのまる投げっすか。

それはそれで別に構わないんだけど、考察するにも情報が欲しいじゃない？ 詳しい情報がさ。

それはまあ、後々考える方向でいいとして。とりあえず話とやらはこれでお終いのようだ。先の会合が昼前だったのに気付けばもう日が暮れ始めており、予想以上に時間が経っていたことを意識させる。

「……………」。

外史の終焉。

起点の元となった銅鏡に、どうやったのかは知らないが何らかの力を加えて、外史の要因である一刀君に触れさせることでソレを終端の要として外史を終焉へと導いた。

貂蟬は俺が起点だと言っていた。

起点に成りうる事象に心当たりはあるかと問われれば、なくはない。

あの世から脱するために叫んだあの瞬間。
他にも気になるところはあるけど、まず一番可能性としては高いかな。

「でも実際叫ぶまでどこに繋がるかわからなかったしなあ。」

主観的にはまるつきり賭けの行為だったのだが、ソレが外史を開く切っ掛けとなってしまうた（かもしれない）とは……。

「しかしあれだな、貂蟬が知ってるってことは左慈達も把握してる、てことだよな。」

しかしそれを加味すると、あいつらの行動はやや大人し目過ぎる。

悟空の力を満足に使えないとも言ってたな。でも超4になれたよなあ俺。

うーん……。

目下の問題も片付かない内に違ふ事で悩むのは些いさか急きすぎか？それとも欲張り？

傲慢？まあいいや。

「行き当たりばったりでもいいじゃない、悟空だもの。」

楽観視が取り柄とはいえ、し過ぎるのは如何なもんかとは思っけどさ。

切羽詰まってる訳じゃないし、気になることがあると言っても精々靴下と素足の間にある毛玉程度だし。

「ケセラセラ、だったか？」

「何ぶつぶつ言ってるのよ。」

「んん？ 賈馱ちゃんもとい詠ちゃんではないかね。」

「おう。何か用か？」

「何か用かじゃないわよ、アンタ何時まで僕たちのこと待たせるつもり？」

話終わったならさっさと戻って来なさいっての。

もうこんな時間だから僕たちも話を切り上げて夕餉……というかもう宴会ね、とにかくお腹減ったから皆で何か食べましょってことになったのよ。」

「そうなんか？ そーいやオラも腹減ってきたなあ……。
それでわざわざ呼びに来てくれたんか？」

「……………いのよ。」

「？ どうした？」

「……………もう、ほとんど残って無いのよ。」

主にうちの恋とアンタんとこの鈴々のせいだね…………。」

「なん……………だと……………？」

「……それに、聞けばあんたも沢山食べるらしいじゃない？
大食漢が3人も居たら戦の前に国が滅んじゃうじゃないっ!」

「ひいつ!ごめんなさい!」

「……とか最初は思ってたんだけど、よくよく話を聞けばどうにか
する手段があるらしいじゃない?さあやれ、すぐやれ、今すぐなん
とかしなさい。」

「わ、わかった!」

手段つてのはあの貯蔵山のことかな。

最近あっちこっちに輸出してるから在庫が不安だが、まあ逝くしか
あるまいよ。

「な、なんじゃこりあ……」

あ、ありのまm(r y

沢山の魚介類の皆さんが鎮座しているはずの場所に到着すると……
そこには無惨にも食い散らかされた跡があああああ………

「グワオ」

どうやら現地の動物にやられてしまったようです……。

白熊さんたちからしたら天国だったことだろうよ。トホホ…

だからと言って何も持っていない訳にはいけないので、筋斗雲を呼んで残骸の中から被害の少ない物を先に運んでおいてもらい、俺は新たな食材を確保しにむかうのであった。

そして会合の3日後、曹操軍による黄巾党壊滅の報せが大陸に広がり、

その更に二週間後、各有力諸侯の下に

『反董卓連合軍への参加表明』の書簡が送られた。

~~~~~

冥琳 side

各地で広がる戦火に絡んでいた白装束と言う名で呼ばれる集団。

黄巾党は農民やその他の賊徒の集まりであるということは以前より聞いていたが、その数が異常なまでに膨れていたのは、どうやらその白装束とやらの仕業らしい。

確かに数は驚異であるが、各地で燻<sup>くす</sup>ぶっていた名を挙げんとする諸侯連中には美味しい話でしかない。

朝廷の腐敗が際に立つようになり、賊徒の勢いはまさに破竹の、と言わんばかりであった。

無論我らとて、その機を見逃すほど愚鈍ではなく。

一族の……孫呉の天下統一への足掛かりとして、戦乱の世へと足を踏み出した。

順調に且つ確実に一步また一步と歩んでいた矢先に現れた天の御遣い。

その1人が孫性を持っていたことで同盟を結んだ。

普段は気丈に振る舞っておられるが、元々荒事や天下統一には関心の薄かった蓮華様。

民を第一に置いて平和になるなら、と快く承諾してしまった。

こんな事をしていたと知られば打ち首かもしれないが、私は亡き先代の王にして唯一無二の親友であった孫策の……雪蓮の夢を成就しようとして、蓮華様をそれとなく戦場に向かわせるように手を打っていたのだ。

しかしそれも同盟を組んだことで水泡に帰してしまったと思っていた。まった。

どこか冷めたような気分で

『これも天命』と成り行きを見守る態勢に移りかけたときだった。

『黄巾党の首謀者が新たな戦を引き起こそうとしている。至急洛陽まで出頭されまし。』

と御遣いからの早馬が届き洛陽へと向かった時のことだ。

何やら珍妙な人物との会合を終え、街の様子でも、とふらりと出掛けた際。

件の白装束が接触してきたのだ。

私は軍師。武に誇れるところなどありようもなく、護衛も連れて来ていない。

敵の膝元までどうやって？

と思考しつつ周りを見れば、いつの間にやら董卓軍の兵士がこちらを取り囲んでいた。

嵌められたか、と思いきや兵士たちの目は虚ろであった。つまり妖術の類で操られていたのだろう。

万事休す、と苦々しい顔を造ってはみたものの頭の中は冷めきっていた。

1人覚悟を決めていたところに、兵士たちの間に道が出来、1人の男が前へと出てきた。

そいつは私にある提案を持ち出してきた。そしてそれに全力で手を貸すことも。

それは甘美な蜜。

消えたはずの野心をくすぐる危険な香り。

不忠であると払いのけなければならぬ筈なのに、私はその申し出を承諾してしまった。

御遣いのあの馬鹿げた戦力はどうするのかと聞けば、何やら既に策を立て仕込みに入っているという。

こちらの武将は今のところ董卓誘拐未遂事件で少々慌ただしく、私の動向に監視を置くには些かお粗末になっている。

ちょうど良い、隠れ蓑として使わせてもらおうか。

なあ雪蓮？

私にも、まだ欲が残ってたらしい。

あなたは赦してくれないでしょうね。

でも少しだけ……

あなたの夢のために頑張ってみてもいいでしょう？

S  
i  
d  
e  
  
e  
n  
d

「連合阻止、変態、洛陽にて」（後書き）

ふはは、今度は代替え機を犬に壊されたけどちゃんとマイページに保存しておいたんだぜ。

店員さんにすっごい怒られたけど。

前回の反省を活かせてないのが痛いです。

## 没ネタ（前書き）

だいぶ前に書きためてて没になったネタ。転生最強モノに手を出そうとして失敗した例。

も、文字数稼ぎなんかじゃないやい！



## 没ネタ

「B J 展開、モデルは……マジンカイザー（KS）でいこうか」

『yes , my lord』

周囲を眩い光が包み、光が収まるとそこには真紅の羽根を持つ漆黒の魔神がいた。

「おおー！きたきたきた魔神皇帝きましたよ魔神皇帝！

光子力じゃないのが残念だけど魔力で充分代用できそうだしな。まあ問題ないだろう。」

『マスター、このカイザージャケットは展開、維持、移動などには魔力でいいんですが。ファイヤーブラスターなどの攻撃技を使用する際には、一度魔力を光子力エネルギーに変換しなければならないみたいです。』

なんだそれ？めんどくさ！

うーん

「変換に必要な時間は？」

『およそ10分の3秒くらいです。』

一流魔導師クラスとの戦闘になりますと致命的な隙になりますね。とくにフェイト隊長やシグナム副隊長みたいにスピード重視で尚且つ一撃の威力が高い相手だと相性悪いです。

マスターの制限が解除されれば万事OKなんですけどねー。』

ふむ。確かにコンマ3秒は痛いな。刃牙なら余裕でKO勝ちできるくらい長い。」

「短縮はできないのか？」

『できますけど、その場合はマスターに掛かる負担が30倍になりますよ?』

キツイわボケ!

「貯め置きとかは？」

『あ、それならできます!但しカイザーノヴァ5回分くらいですけど』

「少なえな。まあこれがデフォだとしても改造してやればいいんだけどな。」

『それだと修行になりませんよ?』

今のマスターでも大陸破壊級の攻撃ぐらい出せますが、最低でも衛星破壊級は身に付けていただかないといけませんし。なら変換機構で負荷を与え続けて一気に回復!って感じにすれば一回の修行で倍くらいになれます!』

「一度見直しする必要があるな。その上で訓練メニューとかその他諸々決めるとするか。」

BJのスタイル変更に伴う使用動力変更システムを改造して、全スタイルの使用動力を魔力として俺及び大気から自動的に供給できる

ようにしようと思ったんだけどな。その際、技の威力が半減するらしいが将来的に衛星破壊級になるらしいから、まあいいだろうw  
衛星破壊級の半分てどれくらいだ？  
月半壊？

『はい。大体それくらいですねー。ただ、そんな技使ったら魔力の枯渇で100年くらい強制的に寝ることになりますけど。』

「あれ？魔力無限にしてもらったよな俺って。」

『確かに魔力自体は無限ですが一度に使用できる魔力には限界があります。  
マスターは元々人間な訳ですから後250年くらいは人間の限界を超えることはできません。』

250年経てばヒトとしての存在を越えたと認識されるので魔力も無制限になり腐れ神様からのリミッターはほぼ解除されます。  
リミッター解除といっても

【創造・想像の解禁】 【神力の使用許可】 【100m級ロボのジャケットの解禁】  
くらいです。

あと、魔力回復なんですけど…』

なにさ

『マスターの場合自己精製ではなくて、宇宙中に存在しているダークマターを自動的に吸収して回復を行っています。』

「ダークマター？」

『ダークマターとはぶっちゃけ宇宙の構成物質です。惑星とかも元

はダークマターです。ですから、例えばマスターが衛星破壊級の技を使用し、魔力を消費したとします。回復の際に必要なダークマターは衛星一個分です。  
つまり月が一個まるまるなくなります。」

「……………は？」

『このアンドロメダ銀河系に存在してると思われる太陽系の数はおよそ三千億ほど……………。  
マスターの場合最低ラインが衛星破壊ですので練習もろもろ含めてちよつと心もとないですね。  
あ、たしかマスターのB Jには次元連結システムがデフォで着いていましたよね？』

「……………まああるが……………  
で、それ使ってどーすんの？」

『アンドロメダ以外の数多ある銀河系に連結させて、そこから衛星一個分のダークマター頂いちゃいましょう！』

「衛星の基本て月なの？ だったら木星辺りにある衛星じゃ足りかね？」

『はい。ベースは月です！』

それで月より小さい衛星は、月と同じ質量分になるまで小さい衛星を取り込み続けます』

「なら大丈夫なのかな？」

『恐らくですけどねー』

恐らくとはなにかね恐らくとは……

というか月なくなったらやばくね？

自転軸とかめちゃくちゃじゃん

『吸収したそばから宇宙中に存在するダークマターが吸収した分の衛星を構築してくれるので心配ありませんよ』

ウホッ！宇宙の神秘ww

「あのさ」

『はいはいなんですよ?』

「インフィニットレイヤーでいいんじゃないかね? もしくはS2機関」

『.....』

「わざわざ吸収しなくても生成すればいいじゃん」

一分ごとに完全回復とか鬼だよね

使い切ることないけど

『そこは..... まあ..... 様式美?』

そこでなぜ疑問系か。

「まあいいか。変換作業自体にも修業要素あるっばいし。」

『どうします? ダイオラマ魔法球使います? それとも結界張りますか?』

「ここはダイオラマっしょ。結界だと時間の流れ方一緒だし。精神と刻の部屋ver・ダイオラマ魔法球で一気に250年修業しようー!」

『了解ですマスター！今格納領域から出します。』

そうして出てきたのはホイホイカプセル。

特に理由はないんだけど、カチツとやってボンって出てくるやつ見たくね？

俺は是非とも見たいね！

だからホイホイカプセルにしたのだよ諸君。

はい、ここまでです。

本編の方が煮詰まってしまつて執筆速度が落ちてます。

というかキャラが掴めない！

なので本編はもうしばらくお待ちいただければと、お願い申し上げます。

これからも『憑依モノ』よろしくお願いします。

没ネタ（後書き）

いらんアイデアばかり浮かんできよる。

書いてみて繋がりそうだったら頑張ってみよう。



「阻止できなかったけど、大丈夫か？」（前書き）

感想が入る度に心臓が跳ね上がる現象のこと何て言うんですかね？

チキンハートがローストされて出荷されていく……

「阻止できなかったけど、大丈夫か？」

ダンッ！

「どうしてこうなった!？」

あ、ネタではないので悪しからず。  
ちなみに詠ちゃんです。

今洛陽居城の一室に、呉メンバー以外の全員が集まりお話をしている。

そして新規参入者として公孫賛、もとい白蓮もここに居る。何故居るのかは後で説明するとして、我々同盟軍（今命名）は現在混乱状態にある。

会合の後に発布された反董卓連合軍の報せは、ソレを防ぐべく動いていた俺たちに少なからず衝撃を与えた。

内容を纏めると

『悪政を敷いてるといふ董卓を討とうと打診した十常侍たちの動きを牽制すべく、帝を盾にとり十常侍を1人残らず殺害し、自らが全権を支配すまいと帝とその一族や筆頭家臣を並々虐殺。そんなの許せねえ！』

大陸を欲望で満たそうとする董卓をみんなで協力して討とうぜ!』

とのこと。

ものつそボロクソに書かれている上に、理由は解らないが十常侍が死んだのは確かなので、もしそれを上手く利用されたのであればどうしようもない。

恐らく帝が死んだというのも事実なのだろう。実行犯は……白装束。

報告では董卓軍の兵士の格好をした男が犯行後自害したらしい。

「後3ヶ月……まだ時間はあるわ。」

檄文は2つ公布されていた。

2つ目の内容は、なんのことはない。

『決戦するから準備に3ヶ月』

それだけだ。

思えば俺たちが異常だったのだ。いや、今更かもしれないけど……。どんな戦いであれ、戦闘をすれば消耗するものだ。

兵糧に然り兵士に然り。

しかし俺が瞬間移動なんてチートを使って1軍ごと移動させたり、気を習得させ地力を向上させたりしたせいで、被害という被害が出

なくなってきたいるのだ。  
兵糧然り、兵士に然り。

最近になってその辺の問題を朱里に注意されて回数こそ減らしたが……。

つまり俺たちの軍は戦の準備に時間を掛けたことがないというわけだ。

連日連夜討伐に行くということも無かつたし、その分の時間を要所所振り分けたりして有効活用してきた。

たまに討伐に行っても俺無しで半日で片が付くようになったし、気の鍛練をさせ始めてから幾分か皆の活動時間も増えた。偏に【<sup>ひん</sup>気】様々である。

話がそれってしまったが、要は戦の前の入念な準備はとても大事なことですよ、ということだ。

今までが今までのなので3ヶ月という期間が果たして決戦の準備を行うに相応しい期間なのか判断しかねるが、とりあえず時間はあるということだ。

「しかし公孫贄も災難だったわね。袁紹がいきなり攻めてくるなんて。

「ごめんなさいね、僕たちのいざこざに巻き込んでしまつて。」

「確かにいきなりだったし、太守として、また一武人として自分のとこの土地を守れなかったのは悔しいが……。

命には代えられないし、なによりあたしはまだ生きてるんだからな。

改めて感謝させてくれ、ありがとう、助けてくれて。」

「感謝なら悟空にしなさいよ。実際僕たちはあなたが危なかったことすら知らなかったんだから。」

「ハハハッ、ちゃんと悟空にも再三礼を言ってるんだが、むず痒いって言って受け取ってくれないんだよ。」

「クスッ、悟空さんらしいです。」

「ふふっ、確かにね。」

連合発布の少し前、彼女の領地に突如として袁紹軍が攻め込んで来たらしく、質より量といった袁紹軍の物量に押されあっさりと敗走。あわや討たれるか、となったところを間一髪俺が連れてきたのだ。

「でも……俺たちの邑もとられてしまった。」

『……………』

一刀君の言葉に北郷軍の面々の顔が曇る。

袁紹軍の勢いは凄まじく、公孫賛の治める地を侵略し終わると俺たちの邑まで押し寄せ、瞬く間に占領されてしまった。

援護しに向かったが時既に遅し。

城壁には高々と掲げられた袁の旗が幾つも見えていた。

吹き飛ばすにしても袁紹軍が邑ごと消し飛んでしまうので断念した。

「……いったい何を考えているのかしら？連合発足の手際といい手口といい、公孫賛への進撃といい。

僕が今までに聞いてきた袁紹の噂と全く違うじゃない。」

救援に向かったのは大量の気が邑へと押し寄せたからであるが、そこで奇妙なことが起きていた。

付近一帯に戦闘の跡がなかったのだ。

邑に兵や将を配置してなかった訳ではない。にも関わらず一切の痕跡が見つからなかった。

今詠ちゃんが言った通り、あの袁紹に限ってこんなことはまず有り得ない。絶対ない。

密偵の話によれば、

『袁紹は威風堂々隙なく構え、腹心である文醜・顔良と常に3人で行動を共にしている。』

『陣を巧みに使い、策略を敷き、数を活かす戦い方をしている。』

本当に有り得ない。

突撃・優雅・勝利の単語しか知らないような奴のやることじゃない。

いやまあ、帝殺し辺りからなんとなく分かってはいたんだけどさ。また白装束なんだろうな。

実は、密偵の報告の中で気なる点を頭で反芻しつつ直接見に行ってきたり。

そしたらなんとなんと、ちゃんと自我がありやがった。

原作で操られていた曹操のように虚ろになってしまったのかとばかり思っていたが、そんなことはなかった。

今回、人的被害がほとんど無かったのは洗脳のせい（・・・）らしい。なんだかむしろ洗脳されたままの方が世の中の為になるような……。まあそんな気分にはさせられるくらい別人になっていたということだ、うん。

なんというかもうこの世界で起きる障害が全部白装束のせいには思えない。というか今のところ10割中10割くらいあいづりじゃん。何してくれちゃってんの？マジで？

「…………袁紹が理性的になって人道的に良くなったのは相当痛いわね…………。」

「俺、袁紹のことよく知らないんだけど…………どんな奴だったんだ？」

『阿呆（よ／だ／や／です）』

「そ、そうなんだ。」

なんという統一感。一刀君の顔が盛大に變っているではないか！  
董卓軍恐るべし？

「……………」

恋ちゃんは例外ですよー。

「悔しいけど先手は打たれてるし、僕たちが否定しようにも材料が無いし……。多分また白装束が何か手を出したんでしょうね。」

「それに曹操さんも……………」

『ッ！！』

「そうだったわね…………曹操も動いているのよね……………」

曹操が動いたのは袁紹が動き始めるのとほぼ同時で、地形的に元・俺達の邑は2人の軍に挟まれる形になったのだ。

『一に霸道、二に霸道。三四に美少女、五に霸道。』

たしか彼女はこんなだったと思うんだけど…………合ってるかな？

時期が時期だったのもあるけどタイミングから考えてコレも白装束だな。

この世界の彼女がどんな人間かはまだ知らないが、今回の戦に乗



るような人物じゃあないはず。

実際に見たかは定かではないが、少なくとも俺の噂を聞いたことがあるなら、あまり懸命ではないと言える。俺に限り噂の誇張というのは”誇張”ではなくってしまっからだ。

結論：全部白装束のせい。

「……いいわ。あっちがその気ならこっちにも考えがあるわ！

躓いて転んだってただじゃ起きないってことを証明してやるんだから！！

朱里？」

「はい。ではこれより我々北郷軍は蜀に向かいたいと思います。」

「阻止できなかったけど、大丈夫か？」（後書き）

短い

「大丈夫だ、問題ない」(前書き)

進展しない

「大丈夫だ、問題ない」

兵力の差を補うために、愛紗たちにやらせていた鍛練を董卓軍の皆さんにもやってもらうことになり、早一週間。

同時進行で行われている蜀への進行は今のところ上手く行っている。

ここで蜀に関する原作知識を少し思い出してみる。

おっぱい&よう”よ

いや、すまん。なんでもない。

入蜀に至るイベントとして原作では

- ・袁紹が黄忠の治める領地に侵入
- ・袁紹が黄忠の娘を人質に取り自らを追撃してきた北郷軍を迎撃させた
- ・たまたま街にいた趙雲の協力により事態は解決
- ・黄忠・趙雲の両名共に北郷軍へ参加を決めて一件落着、と。

大体こんなだったはず。まあ今回は袁紹が逃げた訳でもなければ、後ろ暗い噂が立っている訳でもないので普通に進軍して問題ないはず。

黄忠さんはこの恋姫世界でも1、2を争う常識人（であって欲しい）なので話せば分かるはずだ。

「おつ、悟空、こんなところにいたのか。」

「ん？おー、翠！なんかあったんか？」

「いやゝ、それがさ……気つていうのがイマイチ掴めなくつてさ。もう一度悟空にお手本見せて貰おうかと思ってな？ダメかな？」

「そんなことねえぞ！見たいっちゅうなら幾らでも見せてやつぞ。」

「本当かつ！？良いやつだなゝお前！ありがとな」

彼女、翠こと馬超猛起は詠ちゃんの手回しにより、噂の浸透が進む前に引き入れることに成功した武将の1人だ。

接触しやすく名も実も合わせ持つ人物として、涼州の太守である馬騰へ協力を仰いだ。

結果は見ての通り成功。協同戦線を張るための戦力増強を促すために、一人娘の馬超を洛陽へと送ってもらい、現在一緒に鍛練を行ってもらっているという訳だ。

錦馬超といえば、他の諸侯群を遙かに凌ぐ圧倒的な馬術を用いた戦闘が光る武将だ。騎馬隊なら白蓮も居るが流石に翠には及ばない。同じく霞も騎馬隊を使うがこちらは用途の毛色が違ってくるのでまた別の評価になるだろうか。

さてはて、一通り気云々に関するアレコレを翠に披露してから、その後自分の鍛練に時間をたっぷり使って1日を終えた。

え？鍛練の様子？

そんなもの見たってしょうがないじゃないか（笑）座禅組んで眼を閉じてひたすら気を練るだけですもの。

蜀へ向かう理由として朱里ちゃんが上げた理由はつ。

進行してくる2大国への牽制と対抗するための戦力拡大と増強のため、今より広い範囲から徴兵を行う必要がある。なので今の内に檄文の影響が薄そうな蜀の劉璋へと協力を仰ぎ、彼の臣下や彼に従う周辺諸侯の力をもって戦力増強としようということらしい。

もちろん協力してもらった分の礼だとか交渉の口実だとか、もしあちらが敵についてしまった場合の対応とか、考えることはまだまだあるけどその辺は軍師の皆さんに頑張ってもらうとして！。

どうやら朱里ちゃん等軍師たちは、この反董卓連合に勝った後のことを考えて入蜀を進めたいらしい。勝つこと前提でのお話。

最初に聞いた時はマジかよと思わなくもなかったけど、よくよく考えたら俺のせいなんだろうな。今まで自重しないで戦ってきたからな……。

今回は今までと違って彼方此方に軍を展開することになるから流石に俺1人じゃカバーしきれないぞ？って言うのは他の皆に失礼だよな。

第一この世界の女の子は大体がチート使用だから変なフラグでも立てない限り負けることはないっしょ。現に華雄と公孫賛も生き残ってるしね。

歴史の修正力なんて言葉もあるけど、あんまり信用してないんだよな。第一それじゃあIfの物語にならないじゃない？

あくまで此処は『そういう流れ』とは『違う流れ』を辿る外史なのだから。

そういえば曹操が操られているとするなら夏侯姉妹とか百合軍師とかはどうしたんだろう？まさか一緒に操られてる？  
いやいやそれはそれでどーなのよ。有り得ない話じゃないあたりが非常に怖いんだけど……。

絶対死ぬ気で突貫してくるよな。そしたらこっちも死ぬ気で迎え撃つよな。結果どちらも手痛い被害を被って……。

ハッピーエンドが目指せない……だと……！？

まあいいか。実際問題見ないことにはわからんし。どうするかはその時決めよう。

~~~~~

「そんなこんなで一週間！」

「悟空さん？気でも触れたんですか？」

「御主人様？悟空殿は元から線が一本違うではありませんか（笑）」

「そうだったそうだった（笑）」

え。なにこの扱い。おいちゃん鳴いちゃうよ？ 誤字にあらず。

「オホンッ！しかし劉璋め……話すら聞かず一蹴するとは！民草のことを思つての判断であれば我々として引くことやぶさかでないが……あやつはっ！！」

「密偵さんの調べによれば、劉璋さんは家臣の不正を知りつつもそれを正そうとせず、逆に一緒になつて汚職に手を染めているようです。」

朱里の報告に更に顔が歪む愛紗。その様は正に阿修……なんでもござーせん。

「黄忠將軍を筆頭とする宿將さんたちは劉璋さんに進言し続けていたみたいですが、まるで効果はなく……。」

恋姫の知識はあつても三国志自体の知識は大して持ち合わせていないので、主要な人物以外の印象が薄くて……というか知らなくて劉璋がどんな奴か分からなかったが、……どうやらクソツタレのようだ。

「うーん……。黄忠をなんとかこちらに引き込めないかな？」

「そうですね。簡単にはいかないでしょうが、そう難しくもないでしょう。」

「つまりどういうことなのだー？」

「黄忠さんには：以前亡くなられた旦那様との間に子供が1人居た
はずです。女手1つで子を育て、亡き夫の代わりに太守を務めています。」

「なるほど。では我々が成すべきことは、我々が如何に今の劉璋より
良い政を敷くことが出来るのかを説き、又、するだけの力が有る
ということを示す事。だな？」

「はい。本当はあまり力に頼った交渉はしたくないのですが……。」

「力を示すということは、逆を言えば脅しにも取れる、ということ
か。」

「今回は事が事だから仕方ないんじゃないか？あまり悠長に話し合
いなんてしてられないだろうし。」

「……………はい。」

実際あんまり心配いらなと思うんだけどねー。

余程の不確定要素が無い限り。

因みに、もう左慈一味は不確定要素じゃなくなった。やりすぎだあいつら。

「本当は悟空さんには袁紹さんと曹操さんの方を警戒して欲しかったんですが……」

「うっ……悪い。」

「朱里、悟空殿。もう直ぐ到着しますのもうそろそろ気を引き締めて下さい。」

愛紗の一言でビシッと締まる。

この辺は軍師であろうともできなきやな。

「ん？あれって……」

そう漏らす一刀君の視線の先、つまり俺たちの前には……

「『黄』の旗っ！？黄忠が陣を布いているのか！？」

黄忠のと思わしき布陣が展開されていた。

「こちらも急ぎ布陣せよ！四半刻の遅れも許さん！！各自迅速に行

動せよ!！」

『応ッッ!!!!!』

「関羽將軍に報告!」

こちらの陣も敷き終わり大天幕にて目の前の布陣について頭を捻らせていたところに伝令が来た。

「ッ!なんだ?」

「あちらの陣から将と思われる人影が1人で出て参りました!」

「1人……ですか?」

「はっ!確かに確認しました。」

1人、ということは黄忠さんで間違いないな。

「悟空さん、これもやつぱり……」

「うんにゃ、今回は白装束の奴らは関係ねえぞ。ここに来る前から

気を探ってたから間違いない。」

「悟空さんを疑う訳ではありませんが……それでも絶対ということはありません。注意し過ぎて丁度良いぐらいです。」

「ですから、警戒態勢は解かないように兵士の皆さんにも伝えてもらえますか？」

「承知しました。」

「報告します!!」

朱里が指示を伝えて伝令が去ったと思ったら入れ替わりに新しい伝令が入ってきた。

「彼方の軍から出てきたのは黄忠將軍であると確認が取れました。」

「口上戦……でしょうか？」

「クッ……口が立ちそうなのは皆洛陽か……。」

「いえ、それが此方の将と話し合いの席を持ちたいと……。」

「話し合い、ですか……。多少の差異はありますが当初の予定から

は外れていけませんので応じるべきかと。」

「わかった。では席は此方が用意しよう。黄忠殿にそう伝えて欲しい。」

「ハッ！」

「……これ以上先手を打たれるのは割に合いませんからね。」

黄忠来襲にバタバタと騒がしくなった大天幕。
いや別に襲われたわけじゃないんだけどさ。

「悟空殿……やはり」

「だあかあら心配いらねえって。そう言うと思ってもう一回探ってみたけど何もなかったからな！」

相手側からは何も感じなかった。
念を押して彼方と此方、両方の軍の末端の末端までジワッと探ってみたが、特に問題は無かった。

最近【悟空】の魂の圧力が強すぎて、混ざってる筈なのに圧迫されるような感覚に陥る事がある。
そのせいなのかは知らんが混ざる前の【俺】の魂のような何かが薄くなっているような気がする。目に見えるようなモノではないの

で本当に感覚的なアレになる。

危機感を持つ反面、このまま侵蝕されても良いような気持ちな俺もいる。

「悟空殿？」

「ん？ああ、なんでもねえ。」

少し虚ろってたようだ。

あまり気負わない方が良いのかな……？

「大丈夫だ、問題ない」(後書き)

短い

「事後。後は承諾のみ」(前書き)

酷い

「事後。後は承諾のみ」

「この度は此方の我が儘を受け入れて頂いたばかりでなく、会席のご用意までして頂いて大変有り難く存じます。

私が黄漢升と申しまして、あちらに見える都の太守を務める者に御座います。」

「北郷軍一が家臣、関雲長だ。」

「鈴々は張飛なのだー！」

「北郷軍総大将の北郷一刀です。」

「アナタが噂の御遣い様でしたか……ではそちらの方も？」

「オッス、おら孫悟空だ！」

「ふふふ、そう……よろしく願いしますね。」

こちらは来客用に設置された天幕の中。現在黄忠さんをお招きしているところでござんす。

「それでは本題に入りましょう。」

「わかりました。ではまず、何故私たちが先に布陣を敷いていたのか、からご説明致します。」

簡単に纏めると次のようになった。

主君の劉障の圧政は昔からであったが反董卓連合が発布されてから更に顕著になった。

布陣を敷いたのは劉障の指示。

劉障に娘を人質に捕られていたが、とある有志の協力により救出され、劉障は未だ気づいていない。

北郷軍に攻め込むと見せかけて共闘を持ち込み、そのまま劉障を討ち取るう。

三つ目が出た辺りでちょうど俺たちが現れたようで、渡りに船とお話を持ち掛けてきたとの事だ。

「その有志の方というのは？」

「確か『華蝶仮面』と名乗る朱色の槍を持った方だったかと。」

おおつ、華蝶仮面さんここで登場ですかい。
というか星ちゃん良くやった、GJ！

「

華蝶仮面……ですか。」

「むむむー、とても怪しいのだ。」

「仮面ライダーみたいなものなのかな……」

「……ビクッ！！な、何か嫌な予感がしますう……」

うむうむ、将来的に朱里は犠牲になるからな。せいぜい頑張ってくれたまえ！！

しかし華蝶仮面か……

カッコイイな……

……ハッ！？

いかんいかん。思考が悟空に吞まれて感性が直角に曲がるところだったぜ……

「あの、悟空さんの様子が……？」

「申し訳ありません黄忠殿。原因はわかりませんが持病のようなモノでして、我々も困っているところです。」

「あらあら、うふふ。天下無敵の御遣い様も完全無欠という訳にはいかないみたいね。」

ム？なにやら不審な会話が聞こえるが、なんなんだろう？

「にゃー、顔に出てたのだー。」

なんと！？

「タハハハハ。なんちゅーかその、華蝶仮面つてやつと戦ってみたくなっちまってさ。」

それに黄忠も強えんだろ？愛紗から話は聞いてるし、何より気の流し方が一流だ！オメエとも戦ってみてえなあ。

オラ、ワクワクしてきたぞ！！

クー、待ちきれねーっ！！

一旦洛陽に戻って恋たちと模擬戦してくっかな？」

「さすが戦闘民族サイヤ人、バトルジャンキーを天元突破しちゃってる！？そこに痺れる憧れるウツ！！！！」

一刀君 何故そのネタを知っている。

「関羽殿？」

「はあ……。その……ご主人様も若干……入ってまして……はあ。」

「クスクス…、それは……ご愁傷様です。」

「とかく黄忠殿。其方のお話、しかと聞き届けました。」

「では……ご返答の方は？（流されましたね）」

「今この場で、と行きたいところですが何分急なお話でしたので我々だけで今一度煮詰め直した後、兵たちにも納得してもらってからになります。」

「ですので明日までお待ち頂きたい。」

「明日の朝一番に、其方へ使者を出しましょう。」

「分かりました。私の方の兵にもそう伝えて置きます。」

「それと華蝶仮面さんが私の陣にて待機してしますので、そちらにも話を通して置きたいと思います。」

「……………。失礼ですが、信用出来るのですか？」

「ええ、大丈夫です。一度会って頂ければ分かると思います。
璃々も ああ、これは娘の名前です 大分懐いてしまったよ
うで……。華蝶仮面ごっこ何て言うのもやり始める程に。」

「いやいや、本人目の前にして『ごっこ』遊びって……。」

それは言わないお約束。

「それも明日になれば分かるでしょう。今は報告を急いだ方が宜しいのでは？」

朱里の一言により会談はこれにて終了となった。

~~~~~

その日の夕刻、大天幕での会議。

「黄忠殿は何故、私たちと共闘などと……」

「愛紗？なんでそう思うんだ？」

愛紗の切り出しに一刀君が疑問で返す。

愛紗が言いたいことはつまりこうだ。

今現在北郷軍には本拠地と言える土地が無い。現状を見るならば洛陽に、つまり董卓の元に身を寄せている事になる。

公的な発表はされてはいないが、諸侯達も細作位は放ってるだろうから此方が董卓と共に居るのは既に筒抜けだろう。

すっかり悪役にされてしまった月ちゃんと一緒にいる北郷軍。心象としては悪の組織の大幹部ってところかね。

劉璋と違い黄忠さんは優秀過ぎるほど優秀なので、北郷軍の現状も知っていて然るべきだろう。

それを加味して考えれば黄忠にとって北郷軍は悪の手先。にも関わらず此方と手を組むことを打診してきた。そしてその意図が分からない。謀れない。

と、朱里ちゃんが説明していたのを頭の中からお送りしたのだがどうだろうか？

「畏つてこと？」

「可能性はゼロではありません。むしろそちらの方が考え方としては至極当然と言えましょう。」

「ですが黄忠さんが劉璋さんとの間に確執が有るのもまた事実です。今回の事柄は私たちにとって非常に複雑な疑念を孕んでいます。」

「複雑な疑念？」

「そもそも反董卓連合は白装束の手により引き起こされました。細かい所は省きますが、今までの一連のソレには必ず白装束が絡んできました。ですから今回の遠征も白装束が一枚噛んでいることを想定して動いている、と言っても過言では有りません。」

「なるほど、それで？」

「私たちの今現在の状況は非常に宜しくありません。平和な世を、と立ち上がったはずの軍が何時の間にもやらの片棒を担ごうとしているのですから、これは大変良くないことですね。今はまだ大丈夫ですが、当然排返しようとする動きも出てくるでしょう。」

「そうなった場合我々には対抗する術が無くなってしまいます。」

「えっ！？で、でもこっちには悟空さんが……」

「ですがどんなに強くても1人では限界があります。1人で複数の戦場に立つことは不可能ですから……」。



今回の戦の度合いは今までとは比べ物にならないくらい大規模なものとなりますから、今までのように悟空さんの一当てを行うことは非常に困難になります。

敵味方入り混じつての戦闘に悟空さんの力は大き過ぎるんです。」

これは以前恋ちゃんの援護に入っただけにも考えたこと。

多少なら味方ごと消し飛ばすという手もあるけど、今更冷酷になれと言われても無理だ。胸糞悪いし後味悪い。

この身体から放つ気弾は威力が高い反面、範囲がべらぼうに広い所為で味方を巻き込んでしまう。しかし撃たねば数の差から味方は負ける。

とまあ、ジレンマ&シリアスっぽくしてみたけど、実際大した問題じゃあない。混戦になる前に削れば言い話だし、混戦になったところでインファイトへ切り替えれば問題無し。

むしろインファイトに入ってから本領発揮？

「悟空さんにどう動いてもらうかの案件は私達でじっくり考えますが、悟空さん自身も何か考えていて下さい。」

「えっ？オラもか？」

「うええ……悟空さんに頭の作業は無理があるような……」

ムッ！失礼だなお前！お前失礼だな！

まあ事実だけでも。

「先ほども言った通り、劉璋さんと黄忠さんとの間に確執があるのは事実です。

それが自然に発生したものなのか、又、白装束の手によるものなのか。」

「どちらでもやることは変わらないのではないか？」

「袁紹や白蓮さんのこともあります。もし同じであれば出来るだけ被害を出さないようにしなければなりませんし……。」

「では現時点では保留にするのか？不謹慎ではあるが此処で余り時間を食う訳にもいかんぞ？」

「いえ、返答は予定通り明朝に出します。返答内容は『是』と。」

うーむ。気の探索で相手側を信頼するに足る理由がある、てのは言っべきかなあ。

あ、理由つてのは華蝶仮面のことな。他の要素も探したんだけど、

操られてるだけならその他の兵士や一般人と変わらないんですわ。  
近くに寄れば違和感ぐらい感じるだろうけど、生憎と兵士達の気は  
滅法小さいし距離も離れ過ぎ。わからんって。

愛紗ではないが……不謹慎だけど華蝶仮面の正体とか彼方と合流  
するまで黙っておきたい。その方が面白そうだし。

「そうか……分かった。御主人様も鈴々も、悟空殿もそれで宜しい  
ですか？」

「うん、頼んだ。」

「やっと喋れたと思ったたらもう終わってしまったのだ！」

『?』

「なんでもないのだ。鈴々もそれで構わないのだ。」

「そうか、悟空殿は？」

「ああ、オラもそれで良い。」

「よし。それでは」

とまあ結局何だかんだ言いつつ受諾する方向で決まったのだった。

~~~~~

決まったんだけど

「ねえねえ悟空さん。やっぱり仮面つけて付けるぐらいだからこうビシツとポーズとか決めたりして？」

「いやいや、やあっぱ名乗ってからじゃねえかなあ。」

『待てい！！』

天が呼ぶ！

大地が呼ぶ！

弱きを救えと人が呼ぶ！！

この世に蔓延る悪党共！

貴様等の罪、我が朱槍の一撃で

キレイサッパリ切り落として見せん！
華蝶仮面、只今参上！」

「「こんな感じ？」」

「うわー、すっごく面白そうなのだー！！
鈴々もやるのだー！！！」

「あ、あああ……病気が鈴々にまで………ううっ……！」

これだ。この空気。

どうしてこうなった。

膝を着いてる愛紗可愛いです。しかし一刀君の睡付き。
ま、いっか！特に興味無いし、主にサイヤ体質の所為で。

朱里ちゃんはこんな状況になる前に兵糧とか物資の帳簿を付けに行った。

妙に早口で会話の十割ほど囁んでたから、身の危険でも感じて逃げたんだろう。

明朝送り出す兵には既に受諾の旨は伝えてあるし、頭を使った作

業は門外漢だし、今は華蝶仮面ごっこで忙しいし。

なんだか俺役に立ってないな〜っていうのは卑屈か。悟空の身体能力ってだけで十分なアドバンテージなものな。

「大いなる力には責任が伴う、かあ。」

蜘蛛男の親父さんの言葉だったかなー良い言葉だなー、などとぼんやり思い出しつつ、

「違っつて鈴々！腕を斜めに上げて両足をこう広げてだな」

「それじゃカッコ悪いのだー！やっぱりダァーっと登場してぶわぁーってなっつてどうわぁーっとして」

妙に熱くなっつてる華蝶仮面談議の喧騒をニコニコしながら眺めつつ、

「……………此処だけ平和だなあ。これが世界中に広がれば……………いや、無いな。」

わりとどうでもいいことに思考を割いとります。

さりとて小難しいこと考えて眉間にシワ寄せるよかマシってもんでしょ。

とりあえず明日。明日だ。

明日の朝になれば色々分かるさ。

日の入りと合わせて出てきた朧月。未だ碧さを残す空に高々と上る月は、太陽光を反射して茜色をしていた。

それが一瞬だけ真つ赤に染まった気がして、それはこれから流されるであろう兵士たちの血を指しているかのように見えた。

「事後。後は承諾のみ」(後書き)

短い

「決戦にむけて・その1」（前書き）

当初の予定ではシ水関と虎牢関をかめはめ波で吹き飛ばしてる筈だったんだけどなあ

なんか変な方向に行っちゃった

「決戦にむけて・その1」

両手を揃え

祈りを捧げる

命に感謝し

両親に感謝し

世界に感謝し

此処に集いし者達が紡ぐもの、

それは言葉。

それは慈愛。

それは賛美。

それは真実。

彼らの口から零れ落ちる言葉。たった一言しかないそれは数多の

意味と目的を持った、ある種神聖な言葉。

その言葉とは

「せいの」

『いただきます!』

~~~~~

只今、成都にてお食事中なり。

劉璋肅正の件は本当に呆気なく終わりを迎えた。

朝、黄忠軍との合流を果たして改めて挨拶。その際華蝶仮面ではなく星ちゃんが現れたので何故?と聞けば

『ああ、そちらは私の旧い友人でして。

悪に虐げられる民の声が聞こえる、と言い出したかと思えばいつ

の間にやら居なくなっているような、正義に熱い人物なのです。つい先ほど此処を起ったようですが、起つ前に私の方に文が届きましたな。

【悪漢より幼子救出せり。我、新たなる悪を滅せん。貴殿に幼子を任せたく連絡申し上げる。】

そして向かってみれば此方の軍の方に着いた、ということで、私  
が此処に居たのは全くの偶然、偶然なのでございます。』

以上を一息で伝えたものだから聞きたいことも聞けず、色々なアレ  
がうやむやになってしまったでござるの巻。

というかそれで丸め込まれちゃう愛紗ちゃん達その他ってどうな  
のよ？

一刀君が感づかないなー？おかしいなー？と首をひねってたんだけど、  
まだ華蝶仮面自体見てないからわかるわけないよね、うん。

「劉璋が連合に参加しなかったのが幸い、と言ったところでしょう  
か？」

「いえ、参加表明は出していましたが、蜀の地が都から比較的離れた  
場所にあつたのが幸いと言えるでしょう。」

「おかーさん、ひょうめいつてなあに？」

「そうね……、璃々はお母さんのこと好き？」

「うん！だぁーい好きー！」

「ふふ、ありがとう璃々。お母さんも璃々のこと、だぁい好き。」

（それで結局、表明ってどういう意味なのだー？）

（自分の考えや態度を相手に分かるように示すことだよ）

（黄忠さんと璃々ちゃんがお互いに『好き』であると伝えているでしょう？あれも表明の一つなの）

（へー、そーなのかー）

「今のお母さんと璃々みたいに、私はあなたが好きですって伝える事が表明なの。」

「ふーん。じゃあ璃々、今お母さんにひょうめいしたの？」

「ええ、そうよ。お母さんも璃々に表明したのよ。」

「えへへー」

「うふふっ」

そしてこの平和である。

嗚呼、げに美しきは母子の絆。

「……頑張んなきゃな。」

主人公の独り言は誰にも聞こえないのが常道ですよ！

「此度の戦、黄忠殿も参加していただけるそうです。今まで中途半端だった弓兵の訓練も、これで解消されます。」

それに伴い悟空殿にかかる負担も減りますでしょう。今のところあまり気を張り詰める必要はありませんから、しっかりと英気を養って下さい。」

そんなことはなかった

そっぴゃあうちこっぴゃ飛び回っててまともに休んでないなあ。

しばらくは内政系のお話や鍛練とか訓練とか訓練とかばかりになるだろうし、成都でのんびりするのもありかな……。――

「あつ。それとこれとは話が別ですので気の鍛練は見ていただきませうから。」

ノゾミガタタレター

~~~~~

「すごい！高あーい！！」

「よし筋斗雲、もう少しスピード上げてくれ！ちゃんとお掴まってるんだぞ璃々？」

「うん！わかった！」

『いいいやっほううー！！！！』

ここ最近の日課である、璃々ちゃんと一緒に筋斗雲でランデブー。すごい懐かれました。

本来この役目は一刀君のはずなんだがなあ。妥当っちゃあ妥当なんだけど。確か親父さんが早くに亡くなったんだよな。あれか、父成分が足りないってか。確かに一刀君は親父って感じじゃないな、兄貴って感じた。

というか璃々ちゃんもご主人様って呼んでたな。お兄ちゃんだと鈴々と被るからかな？気の利く子供なこと。

「あ！お母さんだ！おかーさあーん！」

流石神弓の娘、この高さから実母を見分けるとは……。スペックの高さが窺うかがえますな。

しかし璃々ちゃんよ、このスピードで飛びながら叫んでもあまり意味ないと思うんだけど

「ーーーーー、ーーーーー！」

はい、ちゃんと聞こえてたし見えてたみたいですね。
この娘にしてこの親あり、ですかいな。

すごい今更だけど、この世界の武將たちも一般人からすればネジが2、3本イカれてるんだった。
蛙の子は蛙ってか。まあ悟空一家も異常だったし、遺伝的なものだと考えれば普通なのかな？

いやでも、実際に直接遺伝子情報が伝わるのは、その子供の父親と、母親の父親……。つまり祖父が子供の遺伝子情報の大半を占める割合になってるから、本当に凄いのは璃々の父親なのか……。？
はたまた黄忠さんの父親か……。

閑話休題

たった2、30分でも全力ではしゃいでいれば疲れる訳で。

「ごめんなさいね。わざわざおぶっていただいて……。璃々ったらはしゃいでばかりで……。ご迷惑じゃありませんでした？」

「これぐれえならなんてことねえさ。オラも楽しかったかな。それになんか懐かしかったしな。」

それは、遥か遠くの記憶。

俺ではなく、孫悟空としての記憶の一片。彼と彼の息子の記憶。

一緒に筋斗雲に乗って空を駆け回った。

力加減を誤って泣かせてしまった。

一緒にチチに怒られた。でも、やっぱりみんなで笑っていた。

俺の記憶ではないのに明瞭に頭に浮かぶそれは間違いなく本物。俺にとって他人の記憶でしかないのに、どうしても客観的ではなく主観的に見えてきてしまう。

「懐かしかった？」

「おう。オラ子供が2人いてよ」

「」

ふと口から出たのはそんな言葉。一度関を切ってしまえば後は流るる水の如くである。

正直何を話したのかはあんまり記憶にない、けども……。

兎に角どちらも親馬鹿でござんすってことで。

「うふふつ。あら、そういえば悟空殿？私のことは真名で呼んでくだらないのかしら？」

「え？真名？」

「ええ、ま・な」

なんということでしょう。何時の間に真名なんぞあずけよったんやこの姐さんは。

そういえば真名で思い出したんだけど悟空の真名ってなんだろうね。やっぱりカカロット？

「悟空さんに真名を呼んでいただけないなんて……私、悲しいですわ。」

おおよ、と泣き崩れるのは艶やかでとても素敵なんですがね？黄忠さん。

侍女の人が騒ぎ始めるんでやめて欲しいです。

「おめえが呼べっちゅうなら呼ぶけどよ、本当にいいんか？」
念には念をね。

「ええ。是非ともお願いしますね。お嫌でしたか？……そうすわよね……わたくし、誰彼かまわずに真名を預けるようなはしたない女と思われても仕方ありませんわね。シクシク」

わざわざ擬音まで付けてお疲れ様です。てか、泣き真似続いてたんですね。

「い、いやそんなこと思ってねえって！」

「そうですか。では改めまして、姓を黄、名は忠、字を漢升。そして真名を紫苑と申します。受け取っていただけますよね？」

ニコッ

……さて、顔も名前も、まして存在しているのかすら怪しい我が同胞諸君。

そうだ、同胞諸君（異なる世界に転生・憑依・召喚・トリップした人々）。

恐らく身を持って体験したことがあるのではないだろうか？

世の中には絶対に逆らえない……逆らってはいけないものが、多々存在する。

ニコニコ

「……………」

オリ主系でギャグに走る場合の典型的な『黒い微笑』を……まさかこの目で見ることになるうとは……。

「あらあら、私そんなに意地悪く見えたかしら？」

はい、テレパシーも標準装備でしたね。そういえば。

「わ、わかったってばよ（？）紫苑、だな。いい真名じゃねえか。」

「いやですわ、褒めても何も出ませんよ。」

いいえ、出てます。特に胸部の自己主張が激しいです……。

「つかぬ事を聞きますが……、悟空さんには真名はないのでしょうか？」

「んー、確かに悟空以外の名前はあるっちゃあるんだけどよ、なんかしっくりこねえからオラ孫悟空の方が好きだな！

なんだって爺ちゃんが付けてくれた名前だかな！」

恐らくこの身に宿る最古の記憶。何故か三人称視点の過去の情景。目を閉じれば直ぐに展開、プロジェクターがあればそのまま投影出来そうなくらいの画質だ！

「そう……。なんだか悪いこと聞いちゃったかしら？」

申し訳なさに聞いてくる紫苑。しかし紫苑が言うほど気にはなっていない。何故なら、悟空であり悟空でないから。

「てえしたことじゃねえさ！爺ちゃんに付けてもらった名前の方が長く呼ばれてっからな！」

死して尚語り継がれる名前は伊達ではないのだ！

「そう……。あら？」

お喋りしながら歩いていると、ほっと紫苑が声を漏らす。

あらやだ、もう着いちゃった。

「部屋まで運ぶか？」

恐らく断るだろうけど一応聞いておかないとね。俺紳士だし。

「うふふ、ならお願いしようかしら？」

こちらの考えを見透かしているかのような……至極たおやかな笑みを魅せてくる紫苑。

「ん、わかった。」

ふはは。しかしこのアタシには効かんですよ。

「よい、しょ……と。……うし、これでいいだろ。」

「はい。お疲れ様でした。」

道中も特に何も無く部屋へと着いた。むしろ部屋に行くだけなの
に何か起こるものなのかね？

「…………ん…………ん…………くあ……………」

んむんむ、よく寝てますな。そろそろ退散の時間かねえ。

ギョ

「なに？」

「まあ」

まさかのギョ（裾握り）。

「璃々つたら悟空さんと離れたくないみたいね。」

嬉しそくに呟く紫苑。それはもう嬉しそくに。

「仕方ありませんね。悟空さん？」

「おう。なんとなく言いたいことはわかる。」

「夕食の時間になりましたらまた来ますね。ふふ、ごゆっくり」

そう言い残しルンルンと楽しそくに部屋を出て行ってしまった……。

「まあ……添い寝、だよな。」

無意識下における子供のニギニギとは、得てして力強いもので。力加減の難しいこの身体では璃々ちゃんの指を一本一本剥がしていくのは、そこそ難易度が高めのようだ。ここは大人しく添い寝してやるべきかのう……。

そうして俺もいそいそと寝台へと潜り込むのであった。

その後、俺の『いびき』により璃々ちゃんに軽いトラウマを作ってしまうのは別のお話。

「決戦にむけて・その1」（後書き）

本当は3話から話位まとめて投稿したかったんだけど……こう、ね。
リアルとの噛み合わせが上手くいきませんで……はい。

これからをもっと要領よく生きたいと思います。

「決戦にむけて・その2」(前書き)

ページあたり2400文字設定なら1ページとちょっとで終わる量。

閑話みたいな？

「決戦にむけて・その2」

Side 袁紹軍

元々、統率できていたのか怪しかった軍、その上層部。

そのトップである袁本初のかもし出すよくわからないカリスマと、腹心の文醜と顔良の大々的なフォローとバックアップにより、軍はまだその形を成していた。

そんな彼らであるが故に上層部の一塊の異変に気付くはずもなく。気付く者もいたが、今まで破天荒だった我らが姫がやっと才覚に目覚めた！程度にしか認識されなかった。

そして件の腹心の一角にして袁紹軍唯一の良心である顔良も異変に気付いた内の1人であった。ふわふわしているようで意外と聡い彼女は変化にいち早く気付き、親友の文醜を始め大凡そ自身の信賴おおよを置ける人々に声を掛けて回った、が。

「姫が何時もより真面目だから怪しいって？斗詩は考え過ぎなんだよー考え過ぎ。」

姫はまともになるし、あたいらの仕事は減るし、給金はちゃんと貰えるしで万々歳じゃん？

だからそんなに気にすんなって。斗詩のその性格、損してる。」

「よ、余計なお世話だよー！」

と、肝心要の相方には取り合ってもらえず、賛同する者もいたが微々たるものだった。

その内疑問に思う者も居なくなっていき、顔良もついには、そんなものか、と折れてしまった。

そして何時しか、文醜・顔良を含めて袁紹軍全てが大将の異変を”良いこと”として受け止めるようになった。

袁紹の治める領地の民達は突如として人が変わったような政策を取り始める領主に困惑した。

しかし自分達に不利な条件や決まりが作られた訳ではなく、むしろ有り難いことの方が大半を占めていたため気にしないことにした。

そんな最中、袁紹から檄文が飛んだ。

都洛陽でそんなことがあったのか、と思う一方、巷で噂の天の御遣い御一行が少なからず関わっていると知り驚きを隠せなかった。

不明瞭な噂と目に見える結果では後者の方が民衆にとっては圧倒的に重要だ。

良き治世を始めた袁紹に、だんだんと民衆は信頼を築いていった。

それが、傀儡に成り下がっているとも知らずに。

S i d e E n d

~~~~~

S i d e   孫権軍

さて、袁紹の異変が国内外に知れ渡るようになり、こちらの孫権軍も警戒を強める軍勢の内の1つであった。

「解せぬ。」

「……………。思春?。」

「……………」

この報せは国内に波紋を呼んだ。

今でさえ馬鹿みたいに多い兵力に磨きがかかるのはいただけないので、戦力補充に時間を割いている間に叩いてしまおうと主張する者。

他国の畏であると主張する者。

これを機に友好的な関係を持つべきと主張する者。

そんな意見が飛び交う中、君主孫権は御得意の保留を選択。またか、と漏れる言葉を後目に孫権は迷っていた。

軽々に判断して良いものか、と。

主人の悩みは伝染するものなのか、お付きの甘寧や陸遜もうんうんと唸るようになり、終いには孫呉全体がそんな気配に包まれるようになった。

唯一人を除いて。

それからしばらくして、孫権は『孫呉はどちらにも付かず不干渉である』と結論を出した。

S i d e   E n d

~~~~~

檄文が飛んだとき我が軍はこの戦に一切の干渉を貫く事を決めた。

御遣い側に付かないのは、行つたところで戦力過多になるだけだろうからだ。何度かあの悟空とか言う奴の気弾と呼ばれる技を見せてもらったが……開いた口が塞がらなかった。

手の平程の大きさしかなかった筈なのに、何故山頂を削り取れるのか。それでいてまだまだ小手調べですらないと言うのだから……呆れるしかない。

同時に数々の噂にも納得がいった。あんなものを一軍に放り込めば一瞬の内に壊滅してしまう。更に強力なのを作ろうものなら……一国が落ちるといふ表現でも足りない。

あの力こそ、彼奴等に付かなかった理由と同時に袁紹側に付かなかった理由でもある。

……単純に、戦いたくないのだ。

被害は甚大、評判も落ちる。将兵は死に絶え……再興の機会も無し……。

「解せぬ」

おっと……世の理不尽についつい声が……。

ともかく、それはもう不干渉という声明を出したので端に置いておこう……。

それより今は気になることがある……。

周公謹。我が軍きつての筆頭軍師、そして何より先代の孫策様の無二の親友……。他国を探したとて、彼の者程の才を持つ人物はいないであろうと思わせる頭の切れ。

あの方は滅多なことでは動揺を見せない。軍師として内面外面問わずに強くなければならないが故に……。とても感情が読みにくい。今回もそんなものかと思っていたのだが……。どうもおかしい。

妙に余裕があるのだ。

如何に表情から感情を読み取りにくいとて、私も一介の武人。にくい、のであつて僅かではあるが読めない訳ではない。その僅かを察し先手を取るのが、我が隠密の鉄則。なればこそ見逃すことはできないのだ。

あれは……。なんだ？ 若干の安堵感と大きな謀略の眼差しと……。まさか知っていたのか？

……。いや、国を背負う立場の人間であればあらゆる事を想定して然るべきだ。予期していたのだとすればなんらおかしいくはない、おかしいことではないのだ。

しかし予期していたのではなく『知っていた』のであれば……

周喩様……あなたは一体何を考えていらっしゃるのですか……？

S i d e E n d

~~~~~

やや中心に洛陽と成都を置き、対称になるようにソレは展開されていた。

左右対称であるはずのソレは歪な形を成しており、又、とてつもなく巨大に描かれていた。単体ではまずソレの為す意味は分からないであろう。

仮にわかる者が現れたとしても、既に手遅れなのだ。

しかし、まだ、ソレが決定打になると決まった訳ではない。

戦場という生き物を御そうとするならば、念には念を入れなければならぬ。

これはあくまで布石。これから開ける長い長い戦の先の、その勝利のための。

このように表現すると、さも正義を胸に悪を滅せんとする如何にもな集団のこのように聞こえるが、その実、自分にとつて都合の悪いものを徹底的に排除せんとする、所謂クソったれなのだ。しかしそれを指摘してしまうと皆やってることは変わらないのでスルーさせていただく。

とある場所に設置した仕掛けの1つの上に、ポツンと一人、男が佇む。顔に掛けた眼鏡を右手の親指と中指でクイツと持ち上げ都の方角を静かに見据える。

「我々とて、只いたずらに外史を流れてきた訳ではありません。あなたへの対策も以前とは比べ物にならないほどに強力になっていますよ。何度煮え湯を飲まされようと我々は諦めることは有りません。」

我々は管理者。そして調停者……。  
大き過ぎる力は外史には必要ないのです……！

お、大人しく……排除され……フフ、フフフフフフ……」

残念ながらこの仕掛けが活かされるのは、まだまだ先の話である。



「決戦にむけて・その2」(後書き)

足りひんのう

「決戦にむけて・その3」（前書き）

書きたいことは山ほどあるんですが、前書き長くても、ね？

今回の話は投稿していい内容なものか悩みましたが、当たって砕け散って土に還ってミミズの糞に成るのも良いかと思ったので投稿します。

あとですね。今の更新速度を考えると、ゼロ魔編は新規に投稿したほうが良いのではとも考えてまして。まあ状況によりけりですが。

「決戦にむけて・その3」

成都居城・鍛錬場

「  
行きます……ハアッ！」

対峙するのは愛紗ちゃん。風切り音と共に上段から刃が迫る。

俺はそれを如意棒で軽くないす。

「よっと」

シャッという軽い音がして刃の軌道がそれる。

「……フッ！セイ！」

逸らされた先、下段からの返す刃からのコンビネーションが来る。

そして俺はまたそれを如意棒にて逸らしていく。

迫り来る刃は恐ろしく速い。

流石は一騎当千の武将。気のある程度使えるようになった今の斬撃

は以前の比ではない。

この世界の恋姫達は無意識下でも使っていたようだが、やはり”こつだ”と認識するのとしなのとは大きな差が出るものだ。

今回の試合の目的は……というか鍛錬場にきて目的も何もないな。実は俺と一刀君がこの世界に来てから今日で丁度半年になる。そして気の鍛錬を教え初めてから、大体4ヶ月目になりそうだったり？曖昧な理由は大宇宙の意思のせいだからだ！

兎も角、後ひと月程で大きな戦が始まるわけでして。今の私の實力見てください！という話である。要は、上達っぷりを見せたるわい、てな感じ。

そうして試合を行っている訳ですが……すごいネ、人体（はあといつだかの修行の時、空を飛ぶのを諦めて武力の向上にその全てを捧げると豪語していた愛紗ちゃん。

今現在その成果を遺憾なく発揮してくれている。本来、気に指向性を持たせるというのは非常に難しいことであり、格闘技世界チャンピオン（一般地球人類限定）でもあったミスター・サタンが未習得だったように、おいそれと使用出来るものではないはず。

とまあ、それは脇に置いて。今愛紗ちゃんは、体表面に纏う身体強化と武器に纏わせる付与強化を半々で使っている。

まあ、気を戦闘に特化させるならまずはこの2つだろうな。そんなのもって、基本的にどちらかのみを使用するのが常道である。



常道。

「はあああつツツ！！！」

シャオオオオン…

「おわっ」

あ。服の端が……。

んでだ。愛紗ちゃんは常道を砕いて隣に新たな道を開拓する方法を取った、と。

俺が見ていない間に練習してたのかね？まあ素質は有ったわけだから習得が早くても別段驚きはしないんだけど。

どちらも使えるように鍛えた方が良い様に思えるがそうでもない。

『気』について未だ概容程度しか知らないの、これは仮定の話になるが……。

気の総量に限界が有ったとしよう。その場合、引き出せる量とか其れに連なるアレコレも考えなければならぬが……仮定だからいいや。

総量が1000として、どう使うか。

生命維持に必要な量を100として、残りを大まかに分けた2種

類の強化に使う訳だが。

早い話

『万能を目指す』か

『一点に特化させる』か、のどちらかを選ぶかということ。  
ぶっちゃけ状況によるんだけど、こと戦闘において……特に、白  
兵戦であれば特化させた方が強くなる。

俺（悟空一派）という例外を除けば、余程特殊な戦闘でない限り  
特化させるべきだろう。

軍vs軍の複数での戦闘になる訳だから、弓兵や工作兵のように  
それぞれの役割に特化させた方が役に立つのだ。

万能というのは特殊な方々を除いて考えると、器用貧乏ともとれ  
る。

『剣も使えるし弓も使えるし罨も作れるが、特に得意なものはあ  
りません。』

というような風に。

公孫贇なんか良い例なんじゃないかな？

全体的に割と高めな能力を持つてるんだけど光るものがない。

「悪かったな！中途半端でー！！」

なんか聞こえた。

兎に角、総量の割り振りが肝ってことだね。

自由に使える残りの900を単純に攻・防で割り振ったとすれば、一番イメージしやすいか？

HUNTER×HUNTERのグリードアイランド編辺りを読んだことのある人は直ぐに合点いくんじゃないかな？

オーラの攻防力云々なんてそのまんまだしな。相性とか抜きにしても分かりやすい。

まあ、今までののは例え話だから実際はもっと色々な要因が絡むだろうし、なにより氣が使えるのが前提だし。

長々と展開してきたけどこの身体の持ち主、つまり『孫悟空』は、バランスに重点を置いていた。

これはセルゲームの時の話だ。しかしそれ以降の超化は、いずれも純粋に全体的な身体能力の向上に方向性が向いていると思う。セルゲーム前の修行の折り、悟空自身が色々と言っていたと記憶している、もちろんトランク스가偏ったソレでボロ負けしたことも。

あの時はパワーかスピードかの問答だったな、うむ。

1対1での戦闘ならバランスよく。複数対複数、軍対軍での戦闘ならば何かに特化させる。

究極的にはこんなところだろう。セオリー通りなら……。

「やはり、……お強い。途轍もなく。」

「愛紗も前とは全然比べもんにならねえくらいなっつてっぞ！

オラ、正直こうやって模擬戦ちゅうのやんのが一番楽しみでさ、  
今すげえワクワクしてっぞ！」

「それはッ！なによりッッ！！」

大分話が脱線してしまったが、愛紗ちゃんの気の運用方法が斜め  
上になってる話だったな。違ったっけ？

今の愛紗ちゃんは……ぶっちゃけ、パねえ。マジパねえっす。

武器への付加と身体への付加の釣り合いが取れているのでとても  
安定しているのだ。

対軍で特化の方が強い理由はやることが限られているから。別に  
少ないとかでは無いんだけども。

タイマンだと総合的な力が求められるが、軍とは複数で一個の生  
き物である。故に多数の部隊に別れ各々が各々にしかできない任を  
背負っている。それをひとまとめにしてぶつけ合う訳だから、多芸  
に秀でる必要は無い。

恐らく愛紗ちゃんの強化のソレは、タイマンを何千回とする事を  
前提としたコンセプトに基づくものだと思う。でも上手くいかなか  
った場合のカバーも出来るようにしたい、と。

だから両方に強化をしてるんだろうな。

しかし

バシィッ！

「くううつ!？」

横薙ぎの如意棒の一閃を辛うじて柄で受けるが、衝撃を逃がし切れずに後ずさる。

「……はぁ……はぁ……、……ッ……。」

試合を始めて大凡で十分程経った。愛紗ちゃんは既に息が切れ始めている。

通常こんな短時間で息が切れるというのは、有り得なくもないけどあんまりない。模擬戦であれば精々『いい汗かいたー!』がいいところだ。

だがまあ、愛紗ちゃんの疲弊の理由は至極単純。

気の使い過ぎ。

周りに敏感になるとかそういう使い過ぎではないことは分かっている。もらえると思う。

要するに、物凄く燃費が悪いということだな。

一時的な効果は高いが、その分疲労は通常の倍かそれ以上。

「なあー、やっぱもうお終えにしねーか?おめスッゴク疲れてっぞ。」

「……っ……。い、いえ、まだ、出来ます……。  
それに、ハア、悟空殿、も……、仰つてい、ハア、いたでは、あ  
りま、ハア、せんか。」

「んー???」

む。何か意固地にさせてしまつようなこと言つたつけ？

「限、界まで使えば、元の状態に戻す、フウ……んんっ、元の状態  
に戻すために爆発的な回復力が発生する。回復した際、元の量に何  
割が増した状態に還元されている、と。だからこうして限界ギリギ  
リまで使つて少しでも高みに行けるようにと……」

途中で息が整つたようで流暢に続けていた弁が突然止まつてしま  
つた。

因みに今の愛紗ちゃんは、両の目を瞑り左に得物を持つて柄を地  
面に突き立て、右手は人差し指を立てて顔の横に。自慢話でもして  
いるかのような『どや顔』のまま停止している。

「あちゃー。愛紗、気絶しちゃってるのだ。」

うむ、燃料切れだな。ペース配分を考えないで使うからだ、まっ

たく。まるでハマーみたいな奴だな。

これじゃアホの子の認識を鈴々から愛紗ちゃんに替えなきゃならんなあ、あっはっはっは。

「ふむ。では愛紗も限界のようですから、続きは私がやりましょう。」

ほほう。

「なに、悟空殿も物足りないのではと思ひましてな。

ここは一つ、私が一肌脱いでその不完全燃焼を解消して差し上げましょうぞ?」

ハッハッハと笑う星ちゃんからはもう戦闘狂の匂い（ ）しかないという。

『匂い』とは【良いにおい】という意味合いも持っています。『臭い』でも間違いないのですが、星ちゃんは女の子なので敢えてこちらを使用させていただきました。

「むー！ズルいのだ！鈴々だって戦<sup>や</sup>りたくてうずうずしてたのだー  
！！」

「おお！そうか！では、悟空殿には我ら2人を一緒にお相手していただく。」

「おっ！2人同時か。うし、何時でもこい！」

うわははは、こちらとて伊達にサイヤ人と同化してないわい。サイヤの戦闘狂っぷりは宇宙——いいいいいい！！！！  
てなわけで相対して早速ジャキツと構えたのだが……

「あら、2対1なんて面白そうね。私も混ぜて頂こうかしら？」

なんと紫苑がエントリーしてきた。

「ここしばらくは君主交代のゴタゴタで机仕事が多かったから、うんっ」

途中で言葉を切り大きく伸びをする……たゆんたゆん。

「……ふう。……本格的に身体を動かすのは久々になるかしら？」

「うっっ……。紫苑よ、なぜそんな目で私たちを見る？」



「クスッ、お・さ・け」

「はうあっ!？」

「クスクスッ、ご・は・ん」

「「!？」」

「文官さんたちにも手伝ってはもらってるんだけどね。それでも一人当たりが処理しなきゃいけない仕事が多くて多くて……。だからと言って悟空さんや鈴々ちゃんたちを責める訳じゃないの。人には向き不向きがありますから」

でもね？よくよく見てみると、三割くらい、ちょうど、あなた達の欲求を満たしてくれそうな請求書だったのよ……。ふふふ。」

背筋がゾクゾクうつ!？

「でもね？まだ、ね？それだけなら分かるのよ。悟空さんや鈴々ちゃんや沢山食べるのは一緒に過ごしていれば嫌でも分かるし、星ちゃんにも璃々を救ってもらった恩がありますから、お酒を飲むならむしろ御酌をしてあげたいくらいなんだけど……」

ピリッとした紫苑の雰囲気四散する。しかし今度は擬音でゴゴゴが付く雰囲気……

「……最近ね？街に出ると、よくお土産を貰うの。それもたあーくさん。」

「それはよ、よかったではありませんかかか」

星ちゃんの言語回路が！？

「お土産なら今までにも何度か貰っていたから最初は気にしなかったわ。でも流石に街に行くたび貰うのはおかしいと思って聞いてみたの。」

「「「……………」」」

「そうしたら

『黄忠様の遣いのものだ。最近新しく太守になられた天の御遣い様の歓迎の宴のために、大量の酒とメンマが必要であるとの仰せだ。』  
なんてことを言われたそうなの……うふふ、不思議よねえ。」

一旦言葉を区切るも威圧感は変わらず、むしろ強くなってきた！？  
というかメンマ（笑）

「その私の使いという人は『青い髪』に『白い服』で『朱色の槍』を持っていたそうよ」

カラン

星ちゃんの手から朱槍がこぼれ落ちた。

「はは、ははははは、なにやら私の特徴と被るところがありますな。私を貶めようとするそんな不埒な輩は成敗せねばなるまい、さあさっそく『せいちゃん？』」

「悟空さんと模擬戦やるんでしょう？だいじょーぶ、折檻はまた今度にしてあげるから」

そういえば模擬戦やるんだった……紫苑の話が反れてからすっかり忘れてた。

それより『お酒』の後に『ご飯』と来たからな、俺と鈴々にも折檻あんのかなあ？

「糧食の方では割と助かっていたのよ。」

いた、って過去形っすか。

「三人とも武官さんだからお給金は良いでしょう？今まではそこから引いていたし、賄っていたんだけど……。」

ジロリ、と視線が此方に向いた。

「ええと……、需要量が供給量を上回った、とえばいいのかしら？」

時代背景にそぐわないオーバーテクノロジーなんて今更だけど、需要と供給なんて言葉あつたっけ？

「うん、使い方としては合ってるよ。ただ今の状況で使うべきかどうかは分からないけど。」

か、一刀君め、地味に主人公しやがって。

「うふふ、いいんです。どうせ物の例えですから。鈴々ちゃんの分は何とかなっていたんだけど、悟空さんの……ね？自分で穫ってきてもらって今までは何とかなっていたけど、消費の仕方が凄すぎたみたい。」

俺が悪いんちゃう！元の身体を持ち主が悪いんや！

「しかも、この請求書にも私の名前が入っていたの。担当していた文官さんは『蝶の仮面』を着けた人物に脅されて仕方なく……と話してくれたわ。」

ちよ、また星ちゃんかよ（笑

「義を重んずれど其処に義は無し、といったところかしら。」

「なっ……！紫苑殿！……それは私に対する侮辱ですか！？」

「あらあら、私は蝶の仮面を着けた人の話をしているだけよ？  
どうして星ちゃんが気にするの？」

「んっ！？こ、これはすな、つまりその、そう！我が偉大なる友人の名誉を守るための正統な申し出であって……」

うむ。さつき

『娘を助けて貰った』

とか言ってたから紫苑は分かってるんだな。星ちゃん墓穴掘りまくりジャマイカ。

「大丈夫よ。今日は鬱憤晴らしに来たんだから！

ただ……万が一星ちゃんの方に矢が飛んで来たとしても……」

「……へ？紫苑殿、それは……」

「問題ないわよねえ。」

「待って下され！割と洒落になっておりません！」

「さあっ、て！やりましょうか！」

星ちゃんに死刑宣告……！

が、しかし

自業自得……！

錆び……！

錆び……！

身から出た……！錆び……！

「それならやっぱり2対2でやった方がいーんじゃないのー？」

「心配しなくて良いのよ鈴々ちゃん。」

悟空さんなら私たち3人が相手でも足りない位なんだから。」

「そういうものなのかー、ならしかたないのだ。」

それでいいのか燕人張飛。

その後行われた3対1の異色マッチでは、3人は割と協力的に攻めて来たものの所々で

「ひいっ」

とか

「やめっ」

とか

「流れ矢が行くわよー」

とか。

昼も半ばから始めた試合は中々にハードで、西日に目が眩み星ちやんが流れ矢に当たって気絶した辺りでようやく幕を閉じたのであった。

「明日はご主人様も交えてやりましょうか」

「嘘だろー!?!」

南無三。

「決戦にむけて・その3」（後書き）

後書きをちゃんと読んでくれる人ってどれくらいいるんでしょうかね。

私は割とスルーします。

実は学園黙示録のお話を三話ぐらい書き溜めていたんですが……

メインヒロインの一人がプロローグで死ぬわ

ほぼオリ主と化した孝に呆れるわ

カッコいいコータが気に入らないわ

ブームが過ぎるわで没にしました。

書いてる間は楽しいんですけどねー。

結局時間を無駄に消費しただけでした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0030m/>

---

憑依モノ・恋姫編

2011年3月24日20時23分発行